

明日への夢

白黙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生前（多分）アルターに憧れた男がその後2度目の人生（多分）でアルター使い？になるお話

投稿者はこの作品が初なので至らぬ点があつたら許して下さい
なおこの作品は、作者の妄想3割に原作要素7割の全10割で構成されております

クソと言われようと何年かかろうとも必ず完結はさせますので、暇つぶし程度でもいいので読んでいただけたら幸いです。

それではお目汚しをばどうぞ
なるべく努力はしますが投稿者に、語彙力を、期待しては、行けない（駄文確定）

目 次

序章 目覚めの化物篇（原作開始前）

| | | |
|---------------------------------|---------------------|----|
| WakeUp 1 | 目覚めの日 | 1 |
| WakeUp 2 | 分かつてきたこと | 3 |
| WakeUp 3 | それからの面倒くさがり | 5 |
| WakeUp 4 | 邂逅（本人はヤバいことに気づいてない） | 5 |
| 7 | | |
| WakeUp 5 | 黒猫を飼う | 10 |
| WakeUp 6 | 覚醒事変 | 13 |
| WakeUp 7 | 自己採点の実力試験 | 19 |
| WakeUp 8 | また巻き込まれました☆（なんでや） | 22 |
| WakeUp 9 | 人助け（この場合は人体実験とも言う） | 22 |
| 25 | | |
| WakeUp Final Part1 | 「絶望ト恐怖ト怒リト」 | |
| 33 | | |
| WakeUp Final Part2 「Reset」 | | |
| 第1章 覚醒の赤と緋 第1節 新校舎のバケモノ篇 | | |
| Life 1 | 特例墮天使の日々 | 44 |
| Life 2 | いつもと変わらない日々…？ | 48 |
| Life 3 | 特例墮天使のお仕事 | 51 |
| Life 4 | その後顛末 | 51 |
| Life 5 | 目覚めの殴り込み | 61 |
| Life 6 | 真っ正面から | 67 |
| Life 7 | 1週間後なので後日談（とは言つてない） | 80 |
| 85 | | |

第2節 墮天校庭のエクスカリバー篇

Life 1 イキつてるアホ（主に主人公） |

Life 2 急ぐ捜索 |

Life 3 圧倒的な格の差 |

Life 4 覚悟の戦い |

Life 5 目覚めの兆し |

第3節 三大会議のリンカーネーション篇

Life 1 僕は『僕』になり『ボク』と出会う |

Life 2 アレからの日々 |

Life 3 三大勢力和平会談 |

Life 4 僕は『

Life 5 大門 |

Life Final 決別 |

第2章 激情の化物 第1節 殲滅旅の狐姫篇

Life I 狐少女との邂逅 |

Life II 何気ない契約 |

Life III 激情噴火 |

Life IV 神衣の力 |

Life V 旅の終了は契約と共に |

第2節 指名手配のレインフォックス&ブラック

Life I レインフォックス&ブラック |

Life II 加速する危機 |

Life III 衝突の赤と赫 |

Life IV 目覚めし龍 |

番外編 現時点での主人公の詳細その2 |

第3節 黄昏戦争のモンスター

Life I 我、赤い糸に染まりしもの
Life II 最速最凶
Life III ウホッ!!男同士のむさい温泉回!!
Life IV 結成!!対【超ロキ】対策チーム
Life V 修行開始

228 224 221 217 214

序章 目覚めの化物篇 （原作開始前）

W a k e U p 1 目覚めの日

朝起きて昨日のことを思い出し俺は震えていた。

昨日は俺、父さん、母さんの3人で隣町の海まで遊びに来ていたんだけど途中俺は父さんと母さんから離れて自分が迷子になつてゐるに気づかず海で遊んでるうちに溺れかけていた。というか溺れていた。（ここまでは覚えてるのがここからが両親から聞いた話）その後ライフセーバーのお兄さんに助けられたらしい。そして病院に行つたけど特に異常もなく異常が出るようならまた明日病院に来てくださいと言われて帰つて来たけどその後死ぬのか!?という勢いで昨日はいきなり寝たので心配してたそだ…

やべえわあこの歳になつて海來てはしやいで溺れるとかガキかよ…そして父さんと母さんが心配していた：起きたのに気づいて2人とも急いで駆け寄つて来るぐらいだからなあ：本当に申し訳ないと思ひ

「…めんなさい」と謝つたら

「いいんだゆうじからちよつとでも目をはなしてしまつた僕達も悪かったんだからね」

と言つて許してくれた。その後母さんはご飯を作るために台所に戻つて母さんに連絡を受けて一時的に戻つてきてた父さんも俺がどこも異常がなく無事なのをしつかりと確認した後に仕事に戻つて行つた。つてそこまで見ててようやく気づいた

「ん、え、あ?…」

体縮んでね?とゆうか誰だこれ近くの鏡に映つていたのは5歳くらいの少年だつた。

〔格好は違うけど…〕の髪型に見た目つてどう考へてもスクライドのカズマだ…」

その姿はスクライドの主人公シェルブリットのカズマがまだ兄貴といった時、つまり幼少期の姿だつた

「つまり俺はシェルブリットのカズマだつた…?ハツ（察し）」
とネタにはしつて見たものの何故こうなつたかが分かつてないが
さつきからずつとチラチラとあつた違和感の正体がここで掴めた
「そいいえばなんで俺はさつきからあの人たちのことを父さんと母さ
んつてそれにゆうじ…って言つたか？」

確實名前であろう「ゆうじ」を俺に向けて言つてたことそしてこの
5年（と言つてもちやんと覚えてるのがそこ2年分しかなけど）の記
憶に父さんと母さんの存在から考えられる結論は

「一度目の人生の可能性…」

生前の最後と思わしき記憶が昨日と同じ海で溺れていつた記憶
だつた。正直に言うとこれは怖すぎる暗い暗い海の中にじたばなし
ながら沈んでいくとか…完璧なトラウマじやん!!どう考へても昨日
も溺れかけたからそれで前世の記憶思い出したとかだろこれ!!なん
だこれ思い出したとしても最悪じやねえか!!こんなトラウマで前世
の記憶を思い出すて…はあ

「しかし…」

何故にスクライドのカズマ？シェルブリットのカズマさんなんで
すかねえ？名前は「ゆうじ」で姿はカズマとはこれどゆこと？多分名
前は父さん、母さ…両親がつけてくれたものなんだろうけど（ほぼ確
定）、もう1つは姿がカズマなのが謎過ぎる。どうしてカズマなのか
もしかするとここつてスクライドの世界とか？…ならやることは1
つだな!!

とりあえずベランダにてつとスウウ（空気を吸つてからの）

「（小声で） シエルブリットー！」

すると地面が少しえぐれた後に虹色に発光しながら右腕が3等分
に別れた後金色のリングでその枝分かれ状態の腕が元の腕の形に固
定後オレンジとゴールドを元にした装甲が右腕を包み込んでそして
ゴツゴツとした腕が出来上がつた

「…………ゑ？」

まじで出るとは思わなんだ…

その腕は誰がどう見てもシェルブリット第1形態だつた

W a k e U p 2 分かつてきしたこと

次の日

昨日はあの後シェルブリッドを発動した影響もありまだ疲れが抜けてなかつたのもありものすごく眠くなつて眠つてしまつていた：：氣づいたら夜だつたのでまた2人から心配されてしまつた。

ものすごく心配をかけてしまう息子ですまないと思う。

それからちよつとずつだが思い出すでいいのかなあ…？2度目の人生での名前やここが何処なのかも分かつて来た。

まず名前は、**大門** 雄護だいもん ゆうごつてのが俺の今の名前だつた。というか5歳だからまだ名前しか分かつてなかつた。まあ普通5歳の子は友達の名前や周りや自分の名前覚えてればいい方だしなあそりやそりかあー。

それはそれとして（いや普通にアウトなんだけどね）で今日も昨日と同じくシェルブリッドを出してみようと思い母さんがお昼ご飯作ってくれてる間に自分の部屋に戻り窓を開けてからベランダに出てベランダ…というか庭の砂場（子供用のちっちゃんが遊んだりする奴で前に父さんが作つてくれた）のを使ってもう一度シェルブリッドを出そうと思う

……よし!! やるか！

「シェルブリッド（小声で分かりづらいレベルの声で）」

と言うと昨日と同じ手順でするとほんと少しだけ砂場の砂がなくなり腕にシェルブリッド第1形態が出てくる

「おおー…やっぱシェルブリッドカッケエなあ…」

と口に出してしまふほど俺はシェルブリッドに見とれていた

「やっぱ全体的にも見たいなあ」

と思い一度そのままの状態で自分の部屋に戻り部屋にあつた鏡で俺自身の体を見て回る…

「やっぱ…」の状態だと前髪も上に上がるのか…」

あれでもカズマの幼少期の時つてシェルブリッド発動しても前髪は上がつてなかつたような気がするけどお…

まあ見た目や能力がカズマだけで名前とかは雄護だしなそこら辺は差異もあるだろうと思つてまたそこで遅れて気づく

「背中の赤いフィンがない…？」

そうシエルブリッド第1形態ならばあるはずの背中の赤い羽3枚（つて正式名称じやないはずだけど正式名称忘れたから赤い羽でいいか）がないのだ……

え？ なに？ つまり今後そういう俺の敵になるような奴と戦うにしても第1形態の身体能力と右腕のシエルブリッド本体だけで戦わないといけない訳？ ……

流石に今から体を鍛え始めたとしてもかなり厳しくないかなあ
というか俺がシエルブリッド持つてるくらいだから絶対に絶影持つてるやつとかも出てくるよ！？ 第1形態だけでどうしろと！！ 絶影が本来の姿で来たりしたら負ける気しかねえ！？あれと第1形態でいい勝負？ してたのはカズマがカズマ（という名の負けず嫌い根性）だつたからだ

一方この5年間普通の子供として生きてきてつい先日前世の記憶思い出しただけのガキじや絶対負けるね！

まあ愚痴をこぼしても仕方ないしとりあえずもつかい庭に出てからシエルブリッド装着し直してそれでも赤い羽がないようならまた別の方法を考えよう。

…それか本格的に本体の俺が体を鍛えて強くなるかだな… 正直これは最後の手段にしたいなあ… 鍛えるの面倒臭いし（ただの面倒くさがり）

じやあまずは庭に出

「ゆくろんお昼ご飯できたから出てきてらっしゃい」「もうそんな時間！？」

「ハーアイ」

と返事とりあえずお昼食べてからこの後のこと考へよう。

W a k e U p 3 それからの面倒くさがり

その後

日々シェルブリッドを纏うことにより様々な事が判明して来た事がある。

まず1つ目は、身体能力であるシェルブリッドで地面を少し叩くだけじやジャンプは流石にできなかつたが思いつきり力を入れる事で2メートルは飛ぶことが出来るのが分かつた（ちなみに足で着地をしようとするとちよつと痛いです）。

そして2つ目は、シェルブリッドの展開持続時間だ。

これはただの興味本位でやつたのだがいがいなことが分かつた。それは展開持続時間がないと言うことだ。

え、既にやばくないか？シェルブリッド第1形態だけでも普通はやばいのにそれにプラスして持続時間無制限とか！まあそれでも性能は本編カズマより下なんやけどね…

それとは別でシェルブリッドを再構成して腕につけるたんびに体力をちよつと持つていかれるのはそこそこ辛いですよ…

うんまあ、だからこそ体力消費してまで出したのが時間無制限とは思わんやん？

更に3つ目、それは少し前に1番気にしてた部分…そう!!背中の赤い羽3枚の件である。結局あの日の昼飯後で何度か試してみてわかつた赤い羽は出なかつたのである…それは落ち込みに落ち込んだ…そりやね？絶影とかが敵として出てきたら本格的にやばいと思うよ？でもね？それとは別でさ…男だつたら「衝撃のファーストブリッド」

や「撃滅のセカンドブリッド」とか「抹殺のラストブリッド」を放つてみたいじやん!?

まあ出せないのはしようがないよね…つてその事をかなり引きずりながら最終手段の体を鍛える道を選んだ。

当然ながら両親からは心配もされた（そらそうだわ溺れかけた子が翌々日以降にいきなり体を鍛え出したら普通は困惑するわな）。それ

に対して俺は「勝ちたい子がいるんだ!!」や「絶対に負けたくない!!」とか「二度と溺れたくもないしね!!（これはほぼ関係ないな）」と言つたところ説得できてしまつた…いやいい事なんだけどまさかこれらの言葉で説得できたところに驚きを隠せなかつた。…今世の人生の両親はこれだけでいいひとや善人と呼ばれる部類の人間だと分かるので嘘について体を鍛えることに申し訳ないと思つてしまう…

それもあり1年間体を鍛えた事で驚きの変化が起こつた。

なんとシェルブリッド第1形態の時になかつた赤い羽3枚が第1形態の再構成の度にちゃんと出てくるようになつたのだ!!ヤツタゼ!!

じやなくてここまで事を今まとめて考えられるのは、

その1、俺が使つてる力は實際はシェルブリッドとかじやなくてそれに似た別の能力の可能性。

その2、シェルブリッドではあるがカズマの実力と違いすぎるので考えてシェルブリッドを元になつてている複製品デッドコピーの可能性。

その3、ただの本人のスペック不足の可能性。

…の仮にその3が正解ならちよい落ち込みますね…。

ちなみにちゃんとシェルブリッドの実力を何回も測つてる。

全く人がいないうな所まで行き試して見たところ…うん…まあ誰も使つてない廃工場でしたけどさすがはシェルブリッドコンクリは粉々になるし、鉄の塊や鉄骨は粉々にはできんやつたけどバツキバキに割れて崩れるぐらいにはできてしまつた…すいませんシェルブリッドさん自分シェルブリッドさんの実力舐めてました!!本当にすいませんでしたあ!!

W a k e U p 4 邇逅（本人はヤバいことに気づいてない）

そして更に1年がたつた。

この世界が人生2度目の世界だと気づいたあの目覚め（もしくは始まりの）日からもう2年の月日が既に流れている（ついでに言うなら体を鍛え始めたのも今年で2年目だな）。

あれから7歳になり小学校に入学して小学一年生となつた…のはいいもののどうも落ち着かない…（というのも俺の間違えでなければ小学校は2度目だしな）つてのもあるし他の7歳児達ののテンションについていけないのだ：

それもあり学校のクラスメイトからは【変な子】もしくは【よく分からぬ子】と言われる事があるし、先生達

からは【他の子達に比べて怖いぐらい大人しい子】と称されているようになつていた（実際に中身は成人近くまで来てた青年だしな）。つて事もあり当然ながら親友やら友人ましてや友達と呼べる者はいなかつた。

あれ、なんかちょっとと思い出して涙出てきた…。

あ、でもやっぱ訂正！少し前に（言うなら小学校の夏休み入った時期から）友人…？と呼べるかわ未定の人が遂に俺にもできたのだ!! ヤツタア!! ヤツタア!!（別にボツチだつたから寂しかつたわけでわなないのでそこの認識は注意していただきたい）

それに人じやなくとも出会いはあつたしな。
ちなみにさつき言つてた友人未定1号の所へとこれから遊びに行くところだ!!

と思いながらいつもの石畳の道を行き森林の中を突き進んでいくと1件のお屋敷のような家が見えてくる。

そしてその家の前には1人の同じ歳くらいの女の子がたつていた。それに俺は気づきその人物に呼びかける。

「朱乃姉ちやーん遊びに来たよおおお!!」

と言つてそちらに向かつて行きながら話しかけると向こうもこちらに気づき駆け寄ってきた。

「久しぶりーー ゆうくん!!」

抱きつかれた!? やべえ!? 殺される!!

そしてテンションたつか!! ん? 人のこと言えない? だと…? (細かいことは) 気にしないでくれ!! いやね? 別に久しぶりに友人未定とはいえ知り合いに会いに行くのに楽しみじゃないわけナイジヤナイ力

!! (軽い言い訳)

まあ、言い訳はここまでにしてと。

今俺に抱きついて来たのが(というか勢い良くこっちに来たから当たつた時にむせかけたわ) 友人未定1号の『姫島朱乃』通称・朱乃姉ちゃんなのだ。

この歳(と言つても身体は7歳だけども)になつて初の友人枠がまさかの女子とは思わなんだ…

出会いとしては結構単純だつた。

そうあれは小学校入つて最初の夏休みがまだ入つたばつかの時だつた。

その時は外の人気の無い場所にシェルブリツドの練習しに来てた後に昼にやめて帰ろうとしてた時に見かけたのだつた。その時に朱乃姉ちゃんはそれはもうわんわんと泣きながら涙を流していたので「どうしたの?」と話しかけたら「お家への帰り方が分からぬの…」と言われた一瞬固まつてしまつた何故ならその子は見た目からすればあまり自分と変わらない歳だつたから小学生で自分家の道順を忘れるか普通?と思つて家の特徴を聞いてみたらほほ町の外れなのがわかつたそりや分からんかしょうがないねと思いその子に「そこまでの行き方なら僕覚えてるから一緒に行こうか?」と聞くとすぐに泣きやみ此方を見てから嬉しそうな顔で「ほんとに!! いいの?」

と言われたので

「うんもちろんだよ」

と言い名前をお互いに聞いた

「きみ名前は？僕の名前は大門 雄護！」

「私の名前は姫島朱乃って言うの!!」

そこで初めて名前を知りその後に朱乃姉ちゃんを家まで送つてからまた会う約束をし何回もあつて行くうちに今に至るという訳だ（ちなみに朱乃姉ちゃん呼びは朱乃姉ちゃん本人に歳を聞かれた時に俺が歳が下だつたのもあり本人にそう呼ぶように強制されたのデス）。

とそこまで考えた所で朱乃姉ちゃんが

「ねえ今日は何して遊ぶ」

と聞いてきたので

「じゃあかくれんぼしようよ！」

といいかくれんぼを開始し久々の友人？との遊びを楽しんだのだつた。

W a k e U p 5 黒猫を飼う

あれは約半年前の土曜日のことだつた

そう、まだ朱乃姉ちゃんにも会つてないじきだ。

あの日も町外れ近くの廃工場でシェルブリツドの練習をしていのだが途中雨が降り出しそこから5分もしない内に土砂降りになりしかも雷まで鳴り出したのでやつべ！と思ひ走りながら急いで帰つている途中だつたのだがいつも通る道で帰つてゐるといつもと違うことが発生したのだ。

1つはさつき言つたいきなりの土砂降りだつた事。

そして2つ目はその雨の中で公園を通つて行くと丸まつて木の下で眠つているキズだらけの黒猫がいたのだ。

どう考へてもおかしいと思つた：何故なら黒猫はこの辺りの場所にはいないので。

普通はそんな事は分からぬのだが最初期に体を鍛え始めた時に町のいたる所を通つてきたのでここら辺の猫だけなら大体は覚えていた（まあ別のところに今までいたとかなら流石に俺でもわからんが）

いつもならなんだか位にしか思わないが見たことない黒猫がしかしもキズだらけで雨の中木の下で丸まつて眠つているのは何か嫌な予感というあいまいな予感でその黒猫を……

お持ち帰りしました!!

あ、間違えた保護します。

いや間違つてないよな持ち帰つてはいるし。

そして両親にも事情を説明して家で飼うもしくは保護してもいいかな？と聞いたらまさかの1発OKを貰つた。……最近俺は思うんだ、この人達つて本当は善人じやなくて聖人か何かだと割と最近はそう思う。

雨も止んだ次の日の日曜に両親に動物病院などに連れてつてもらい、その帰りに猫用の飼育道具や餌などを買って帰つてきた（当たり前だが俺が拾つてきたのだがその日予定していたシェルブリツドの

練習や鍛錬もやめた)。

その後に猫も目を覚ましたのだが最初はものすごい警戒されたうんまあ木の下からいきなり移動してたらそら警戒されるよな、それはいいんや問題はそのあとのものすごい勢いでお決まりのごとく顔を爪でひつかいて来るので痛いつたらありやしねえ！そして何故かとうか当然だみたいな顔（いや猫の顔を見てもそんなん何となくで思つただけども）両親に懐いたのだ！ナゼエ!?最初に保護したの俺なのにナンデエ!?

その後我が家飼い猫となつた黒猫と同じ事を毎日繰り返してるうちに遂にやらかしてしまつた：両親がいなくて油断しきつてていたのもありくつろいでいた所に黒猫のクロが到来（名前は両親がつけました）いつものようにひつかいつてこようとしたところにそれを手で受け止めたのだ。それだけならどれだけ良かつだろうか：その時につい反射行動で手だけ（机の上に置いてあつた空ペットボトルを消滅させて）シエルブリッドをまとつて受け止めてしまつたのだ。

やばいやばいやばいやばい完全にやらかした!!人じやないけど家族同然に扱つていたクロにシエルブリッドを見られてしまつた!!どうしようどうしようどうしようと迷つてしまつて自分でも気づかぬうちに

「…めん」

と謝り自室に戻つてしまつていた…

ああ終わつたクロの最近の態度がマシになつてきたのこれまで最初見たいに警戒されるかもしれない…というか絶対にされる…悲しいなあ…悲しいなあ…と思ついたら

「にやー」

という鳴き声が聞こえちらを振り返るとクロがいたというかどうやつて入つてきた？扉は閉めてた筈閉め忘れてたか？するとクロがこちらに来て顔をめっちゃ舐めてきた!!キッタナ!?後手も舐めきた!!ナンデエ!?

あ、もしかして今までひつかいたところを舐めてくれてるのかな？
「警戒しないのか？」

と言うと返事の巴とく「にや〜」と鳴くので良かつたと思い「ありがとう」と言つた。

それからは少しづつだけど俺にも懐いてくれた。

今では頭も撫でさせて貰えるし!!毛をもふもふさせて貰えるようになった!!やつたね!!

W a k e U p 6 覚醒事変

前に朱乃姉ちゃん家に遊びに行つてから1週間があれからたつた。また土曜で今日も学校は休みなので先週約束してたのもあり今日も朱乃姉ちゃん家に遊びに行つてるというか現在進行形で向かっている。

それと嬉しい事が1つできなんと鍛錬の成果が出たのかアルターつまりシエルブリッドを形にして纏わなくとも若干だがアルターで身体能力強化ができるようになつたのだ！あれだねアニメで劉鳳が記憶喪失の時に使つてたの言うなれば応用だね!!（厳密にはかなり違うけど気にしない事にした）

と考えてる家に朱乃姉ちゃん家に着いた
すると前回同様朱乃姉ちゃんが出てきて

「ゅくーん」

これまた前回同様抱きつくためにこつちに飛び込んできたので：

「ハハハ！」

と言い避けた

うん、いや抱きつかれるのは満更でもないよワイは別に歳なんて気
にしません。せやけどなこの娘のお父さんが話に聞く限り怖いんだ
よね…

だから俺もやりたくてやつてる訳ではないんすよ？ホントだよ？
とそこまで考えてると朱乃姉ちゃんが

「ゆうくんなんで避けたの!?」

と物凄く驚いた感じで言つてきたので

「え？逆に避けたらアカンの？」

と素でかえしてしまつた

「ダメだよ!!」

「ダメなの!?ナンデエ!!ナンデエ!!」

と面白おかしいコントのような会話を続けてるともう1人こつち

に向かってきている人が見えたので挨拶をした

「あ、ここにちは朱璃おばさん！」

「はい、んにちはゆうくん」

と返事を返してくれたのは朱乃姉ちゃんのお母さんの姫島朱璃さんだつた。それにしても…若くない？この人？朱乃姉ちゃんの歳に對して見た目だけで言うならかなり若そうだよねこの人？いつたい朱乃姉ちゃんはいつこの人と結婚したんだろうか…？若干（割と）失礼な考えが頭を巡る。

とそんなやり取りをしていると俺が登ってきた石置の階段の方から誰かが登つてくる足跡が聞こえてくる。それを聞いて俺は「つ、遂に朱乃姉ちゃんのお父さんが帰つてきたのか!? だとしたらめっちゃ逃げてえ!!」と考えたところで階段の方から黒い服装、もとい黒づくめの男たちが階段の方から來たので「え、これが朱乃姉ちゃんのお父さんと…誰だろう？」と思い何となく朱璃おばさんの顔を見ると若干睨むような目付きで向こうを見てた……って事は朱乃姉ちゃんのお父さんではないけど

「姫島朱璃…やつと見つけたぞ」

と黒のリーダーっぽいのが言つたのに對して

「…私は貴方達のような方など知りません」

と朱璃おばさんが言い返す

するとまたリーダーっぽいのが口を開いた

「だろうな、私達は姫島家からその娘を回収し、殺すように依頼されたのだからな」

……………は？

え、今コイツらなんて言つた

殺す？誰を？朱乃姉ちゃんを？なぜ？ナゼ？何故？

「そこのガキ」

と言ひこちらに今度は顔を向けてリーダーっぽいのが話しかけて

くる

「お前のおかげでこいつらが見つかつたぞ、礼を言おう」

「何を、言つてるんだ？」

「ああ、説明してやるよ。少し前にお前がそこの女姫島朱璃の気配がついた状態だつたから気づいたのだから礼を言おう」

訳が分からぬ…なんだコイツらさつきから何殺すとか言つてんだ？頭がおかしいのかと考えるとまたアイツが喋り出す。

「そして姫島朱璃よ再度通告だ。その娘をを渡して貰おう。忌々しき邪悪な黒き天使の子なのだ。」

すると一瞬で俺達は黒服達に囲まれる。

「この子達は渡しません！私の娘もその友達の子も渡しません！この娘は私とあの人の大切で大事な娘!!そしてこの子は私達の子と友達になつてくれた子!!だから絶対に!!絶対に渡しません!!」

と朱璃おばさんが朱乃姉ちゃんと俺を庇うようにして叫ぶ。

そういうことなのか!?やつと今理解が追いついた!!つまりこの世界はそういう世界なのか!!だつたらこの形はもつとやばい!?

「……貴様も黒き天使に心も穢されてしまつたようだ。致し方あるまい」

と言い黒服が刀を抜いた。

クソつ間に合え!!!!

雄護 side out

朱乃 side

「……貴様も黒き天使に心も穢されてしまつたようだ。致し方あるまい」

と言いながら変なおじさんが刀を母さまに向かつて振り落としたのが見えた!!

「母さまあああああつ!!」

と言つた次の瞬間辺り一面が眩しく光出した。

そして光が止むとそこにはゴツゴツとした金色の腕で刀を掴んでいるゆうくんがいた

朱乃 side out

雄護 side

間に合つた間に合つたギリギリでほぼ賭けだつたけど良かつたあ

⋮

そう思い黒いおっさんが向けた刀をそのまま装甲が分厚くなり肘下から拳までしかないシエルブリッドでつかみ折つた。

すると黒い汚つさんが

「な、なんだと!? 貴様何をしたんだガキ!!」

と言つてきたので

「あ、わかんないのか? 折つたんだよ」

「違うそんな事ではない貴様は何者な 「そんな事はどうでもいいんだよ…」な、なに!?」

「お前何で朱乃姉ちゃんを殺す必要がある? さつきから聞いてると朱乃姉ちゃんを殺すように聞こえてくるんだが…? 朱乃姉ちゃんがお前らになんかしたのか?」

「そんな事関係ない!! そいつはそこに存在すること自体が悪なのだと忌々しき邪惡な黒き天使の子はここにいるだけで存在そのもの「黙れッ!!!」?!?

「それで貴様らは正義を語るつもりか…?」

「ゆう…くん…?」

…大丈夫朱乃姉ちゃん達は俺が守るから。

「それを貴様らが正義と言いのならば俺は、俺自身の正義で貴様らを断罪する!!」

いまさつき命の危機に陥つたからかやつと分かつた…この力の本当の使い道が!!

「こい絶影!!!
〔ゼツエイ!!!〕

すると周りの木が消滅後俺の前に両腕に拘束具をつけた二本足の青、黒、白が主体カラーとなつた人形が目の前に出来上がる。「いけ!!絶影!!」

そう言うと絶影は走り出した黒服達を薙ぎ倒して行き俺も黒服を追いかけシエルブリッドで殴り飛ばして気絶を繰り返す。

「グアツ」「ゴツ!」「ガアアアツ」

するとうちの1人が

「ふざけんな!!」

と言い朱乃姉ちゃん達に向かつて火の玉のようなものを何個も発

射する。

「ふざけるなはこつちのセリフだ!!」

それを急いで走り朱乃姉ちゃん達の前に立つてからシェルブリツドで防ぐ!!

「このやろう!!」「ゴハツ!!」

そうして火の玉野郎を殴り飛ばす

「ハアつハアつハアつ……残りはお前だけだ刀おつさん……

と言うと

「な、なんなんだ…なんなんだお前はッ!!」

あ、決まつてんだろう?

「ただの化け物だよ…!!」

そう言いながらおつさんを殴り気絶させた。

「終わつたあ……絶影…黒服達を全員を列迅で縛り上げて拘束しろ」

そう絶影に向かって言うと絶影が氣絶した黒服達を1箇所に集め円のように並べて座らせたのを列迅で縛り拘束ご列迅を結びちぎると絶影が消えシエルブリツドも消えた。すると一気にその分の疲れが来る。ああ、これはちょっとやばいなあ。

すると朱乃姉ちゃんがこちらに来て

「…ゆうくん…大丈夫?」

と言うので

「大丈夫…って言いたけど…めん今日は疲れたから帰るね」

と言うと不安そうな顔で

「また遊びに来てくれる…?」

と言わされたので

「うん!また来週遊びに来るね!」

「本当に!?」

「うん、僕嘘はつかないから!」

「絶対!絶対だよ!!」

「うん分かつてる!またね!」

「またね!」

と言い笑顔になった。

良かつた…朱乃姉ちゃんが落ち込む顔は見たくないからね…

そう思いながら今日は家に帰るのだつた。

そしてその後俺は意志とは関係なくこの約束が守れなくなるの
だつた…

W a k e U p 7 自己採点の実力試験

一昨日、朱乃姉ちゃん家に行つた時に襲つて来た黒服のおっさんから2人を庇おうとして間合いに入つた時に理解した事があったそれは俺の能力についてだ。

俺の能力の実際の所はシェルブリッドだけでなかつた。その能力を試したかったのだが、あの日は本当に疲れててそれはもう泥のように眠つた。

次の日からしばらく小学校も休みになつた。

何故かつて？

昨日から休みになつたのだが学校から通知が来たのだ。

その内容によると校舎の1部がボロボロに崩れ落ちたらしい：それもあつて学校はその1部の修理と掃除の為1週間休みなつた。あの校舎もそうとう立つてから時間が立つてるのでそれもしようがないと言われているが実際に昨日は見に行つて見たのだがそれはもう見事に校舎の3分の1がバツキバキに碎けていた。

その周辺にもkeep OUTのテープが貼つてあるのが学校の門から見てわかつた。

それにもだ：周辺の掃除と『修理』だ。

学校の通知をそのままの意味で受け取るならたつた1週間で校舎が治るということだ。

なんなの？この世界つてそういう技術が俺の前世の世界よりも発展してんのかな？

まあ、現在の時点でも考へても分からぬだろうからそこは深く考えないことにした。

そして本日、遂に能力の自己試験です！

場所はいつもの廃工場です!!

あの時（一昨日）に間に入りシェルブリッドを展開して刀を止めようとしたのだが普通に間に合わず素手で最初は受け止めたのだ。

その後、俺は頭の中で『死ぬ、死ぬ、死んでしまう!!』と考えた後だつた。

一瞬の出来事ではあつたが右腕にシェルブリッドもどきが装着されてそれと同時に能力の本質が頭によぎつた。

それにより1発勝負で俺は頭に絶影を明確に思い浮かべたことにより俺の目の前には絶影が現れた。

だからもう一度同じように今考える…………来い!!

「絶影!!」

そう言つて少ししてから工場内の鉄骨が消滅してから俺の目の前に絶影が現れる。

…良かつたあちゃんと出たわア

これで俺の能力の本質がわかつた…。

俺の能力は頭に明確にアルター能力を思い浮かべることでそのアルター能力が使える事だ（多分）。

それとこの能力にもう1つ備わっていたものは『調整と加工』である。

『調整と加工』は完璧に俺の主觀でつけた呼び方だがこの能力はそのままの意味で出すアルター能力の形や出力を変えられる事。

ただし作る度に体力を持つて逝かれる（そこは今までと変わらず）

ここ2年のシェルブリッドの謎も今回の事で解明することが出来た。

○何故シェルブリッドの出力が最初は弱く赤い羽3枚が出ていたのかつたのか。

↓体がそこら辺を勝手に調節していた可能性が高い。（多分能力を理解できてなかつたのもあるが、実際体を鍛えだしてから赤い羽3枚は出できたし）

○何故シェルブリッド第1形態にも関わらず体に長時間出しても体に異常や疲れが出なかつたのか。

↓これもさつきと同じで出力を落とす代わりに体への負担^{デメリット}も大幅に減らされたのだと思う。

う〜〜ん

これはもはやチートでは？

とも考えたいがよく考えようこれは昔言われてた神様転生とかではない筈（そもそも神様らしき人にあつた覚えがない）。

そこから考えられる可能性は

この世界は俺みたいな能力者が隠れてうじやうじやいる可能性（こないだの黒服汚つさんの件からそれが考えられる）。今のところはこの説が1番有力というかこれしか考えられないなあ。

あとはアルター能力がどの能力でどこまで出力を出したら体に異常をきたすか実験だア!!

Wake Up 8 また巻き込まれました☆（なんでもや）

あれからアルター能力をそれぞれ使えるか試して見たけども：

アルター能力の殆どが使えたのは予想どおりだつたのだかなあ：
アルター能力がほぼ使えるのはいいが、問題としてはそれぞれのアルターで初期の出力がかなり弱いのが出てきたりしたのだ

例をあげるならストレイト・クーガーのアルターであつたラディカル・グッド・スピードで自転車にそのアルターを使えばアニメの時のようなスピードは出ない（多分これも体がその速度に対するGに耐えられないから）。

代わりに自動車並みのスピードは簡単に出せるし、アルターの素材として使つた自転車も全く壊れなかつたしな。

そして今日も今日とてアルター能力の試行錯誤してたんだがなあ

そんな事を考へている俺の前には現在進行形で廃工場の閉めていたドアを破壊して入つて來た1人の剣を構えている男性ともう1人が黒いコウモリの羽のようなものを生やした男だつた。
はあ…どうしてこうなつたのだろうか…

雄護 side out

??? side

僕は今現在悪魔から逃げている。

その悪魔は僕とクレーリアを殺す為にずつと追いかけている。
でもまさか紫藤さんが悪魔と協力してまでも僕達を殺そうとしてくるだなんて…そこまでしなきや行けないのかと僕が考へていると
その追つ手の悪魔が

「何をよそ見してやがる！」

と言い思いつきりその悪魔が放つた魔力弾を食らつてしまつたその勢いで近くの廃工場のトビラに叩きつけられそのままトビラごと

工場に突入していく。

幸いにもそこまで重症では無いのですぐに立ち上がり聖剣を持つて警戒態勢をとる。

その間に追手の悪魔も廃工場内に侵入していく。

すると廃工場の奥の方から

「な、なんだあ!?」

と言い子供がこちらに来た

??? side out

雄護 side

剣を持った男性がこちらに気づき

「子供!!君早くこから逃げなさい!!巻き込まれるぞ!!」

と言うがそれに気づいたコウモリ男が

「いいやそのガキに俺の姿が見られ為そのガキは逃がさんしこで殺す!!」

と言いながらそのコウモリ男の手の中にあつた禍々しいエネルギー的なものをこちらに………ってヤバッ!!

「危ない!!」

するとさつきの剣の男性が俺を抱きかかえてその攻撃を避ける

「あ、ありがとう」

と言うがその男性は「ウウツ」と言い肩を抑えていた。

そしてその抑えていた肩から流れ出るものがあつた。

血だ、血が流れているのだ。

「お兄さん大丈夫!?

と言うと

「お兄さんは大丈夫だから早く逃げなさい!!」

とこちらに叫ぶ

：逃げられるわけないじやん

今回も前回も巻き込まれただけだから俺にはよくは分からぬが

今わかつたのはアイツが悪いやつでこの人はいい人だ。

：

だつたらやることは1つだな…!!

「いや、俺は逃げないよ…」こを立ち去るのはコイツを倒した後の時
だけだ!!」

「!?な、君は何を言つて」

「シエルブリツドオオオオオオオオオオ!!」

そう言つて俺はシエルブリツド第1形態改を展開し纏う

Wake Up 9 人助け（この場合は人体実験とも 言う）

「シェルブリッドオオオオオオオオオオオオ!!!」

そう言つて俺はシェルブリッド第1形態改を展開し纏う。

そしてその後に左腕にシェルブリッド擬を装着した（簡単に説明するならこないだの黒服戦で使用した右腕に装着したシェルブリッドもどきを今回は左腕につけてる状態）

そうするとコウモリ男が

「き、貴様まさか神^{セイクリッド・ギア}器^{セイクリッド・ギア}所有者か!!」

と言つて来た。

セイク：なんだつて？もしかしなくてもこの能力の名称か？

それともコウモリ男の勘違いか…？

「お、おい貴様何とか言え!!」

と今度は言つて来た。

アレなんかコイツの言い方が小物臭くね？

まあとりあえず俺は…

「何勘違いしてやがる…」

「な、なんだと!?」

「俺はただのアルターの化物だ!!!」

するとそこで驚いて今まで無言を貫いてたお兄さんが、

「アルター…？」

と言つていた

コウモリ男とお兄さんの反応からして…

この世界にアルター能力者を見かけてないもしくはいないのか？

まあ…今はそんな事どうでもいい。

大事なのは

「お前はここで倒す!!コウモリ男!!」

「な、何だと!!お前のようなただの神器所有者に私がやられる訳ない

だろうが!!

一瞬驚いた反応をした後に簡単にブチ切れこちらに飛んでくる。
「つまりは俺を舐めてるつて事だな?」

と言い俺は

コウモリ男の背中まで瞬時に跳躍して

【ゴスツッ!!】

と鈍い音を立てる勢いでコウモリ男の背中を殴りすぐ下の地面上に叩き落とした

「ガツ!! ゴホツゴホツ!! 貴様!! 何をした!!」

「あ? あんたの真後ろまで瞬時に跳躍して殴つただけだ…………とい
うか? いちいち喚きながらじやないとお前は喋れんのんか?」

「何だとオコのガキが!!」

すぐにコウモリ男が立ち上がり初めこちらを睨みつけてこっちに来ようとするが

アレに気づかない時点で

既にこちらの勝ちは決まつた

「が、体が動かないだと!? な、なんだこの青の触手は!?」

今気づいたか俺がさつき殴り飛ばした時に体に括りつけた青のト
ゲに:

だがもう遅い

「喜べあんたが最初の俺のオリジナルの実験体だ!!」

「な、何を「レールガンショット!!」ガアツ!?」

俺は背中の赤い羽を瞬時に3枚全て消費しその勢いで
ジエットのようなスピードでコウモリ男の懷に飛び込み両腕を
真っ直ぐそのままの状態で拳を入れる

「これが俺のオリジナル技だ」

そう言い終わるとコウモリ野郎もがき苦しんだ後に白目を向いて
倒れた……

あれ? なんで? と思い殴った場所をよく見たら……
やつベ股間強打してしもうた……

身長が足りないから仕方ないね☆ (100%悪気はなかつた)

とりあえずお兄さんの方を気にしないと

「お兄さん腕はもう大丈夫?」

「え、あ、ああ大丈夫だよさつきより出血量は少なくなってきたしね。」

「そつか」

そう言つて驚いた表情から笑顔になりながら答えてくれた。

「お兄さんには色々聞きたいんだけどいいかな? あ、僕の名前は大門
雄護だ」

「ああ君には助けられたからね僕が話せる範囲なら話そう。それと僕
は八重垣やえがき 正臣まさちみ つて言うんだ」

いや先に助けたの八重垣さんだけね

「そうかそれじゃ:いや、その前にか」

「うん?」

と首を少し傾げながらこちらを見ている八重垣さんの前で俺は

「エタニティエイト!!」

と言いエタニティエイトを出した

「なんだい? それは?」

「これはこうするんだよ」

と言いながら俺はエタニティエイトを八重垣さんの腕の傷に当てる

「これは…!」

「八重垣さんは俺を庇つて怪我をしてしまったから先にこつちを治さ
ないとね」

「君は一体どのくらいの神器を持つてるんだい?」

と言い終わる頃にはエタニティエイトで腕の傷は完治させていた。

「そうそれまず一つ目の質問だ、さつきから八重垣さんやコウモリ男
が言つてるその神器つてのなんだい?」

「ん? その言い方からすると君は神器の事をよく知らないのかい?」

「いや、知らなくても使う分には問題なかつたしね? それと今までそ
れを知つてそうな人がいなかつたからね:だから八重垣さん神器の
事でわかる範囲で教えてくれないかい?」

「ああいいよ」

それから八重垣さんから聞いた神器とは

特定の人間の身に宿る規格外の力の事で、聖書の神と言う神様が人間に与えたもので歴史上の偉人の多くが神器所有者とされているという事や

神器は人間に先天的に宿るものなので人間か人間の血を引く混血しか持たない

と言ふことがわかつた

「へーそうなんだって事はこれも神器の力つて事なのかな?」

「さあそれは協会とかに行かない限り調べることができないんだ…」

そしてその後聞いたのが

この世界には三大勢力と言うものがあるらしくそれは堕天使、悪魔、天使の3つの勢力に別れているらしい。

そして八重垣さんは今まで天使の勢力である協会の戦士として戦つていたらしいのだが、

ここを収めていた悪魔のクレーリアさんと恋に落ちて恋人になってしまつたらしいのだ

…というかこの街つて悪魔が収めてたのね…

ワシ初耳じやよオ

と話の腰をおつてしまつたが

要はそれを認めんとする悪魔の勢力と天使の勢力の協会から追われてしまう事になつたのだと

「だからこそあの悪魔を倒した君には驚いてんだよ」

「なるほどおまあ慢心して言うなら僕は（能力に振り回されたり少しでもを負担）を減らすために）鍛えてますから」

「その歳で達観してゐるなあ」

「いえいえ、でそれを聞いて僕は思つたんですよ

「ん?なんだい?」

「実は僕が持つてる能力に書いた文章道理に相手を動かすマッドスクリプトつて能力があるですよ?」

「それは僕に言つていいのかい?」

「言つて良いんですよ。で、ですね更にそれを出力を最大まで上げれ

ば本来は僕より精神力が下の人にはしかからないんですけどね？そうすれば精神力関係なくそのままの通りに操れると思うんですよ

「な、なんか話が物騒じやないかな？」

「いやそもそもないですよ？で、です。ここからが本題でそれをまだ試したことがないのであそこで延びてる悪魔にかけて試して見てもいいですか？」

「うーんそれは僕が勝手に決めていいのかい？」

「追いかけて勝手にのされたのはあっちだから大丈夫でしょ？」

「君は悪魔みたいな事を言うね…」

と笑顔だが八重垣の顔が若干引きつっていた

それから八重垣さんの了承も得てとりあえずマツドスクリプトを出してから出力を最大にした。

さつきの悪魔にはこのストーリーを付与しよう

『その後、大門雄護にのされた悪魔は股間に来たあまりの痛みに八重垣さんを追う以前から俺に倒された時の記憶を失つていて起きてすぐ八重垣さんを直ぐに探し始めた為に廃工場奥隠れて見ていた雄護と八重垣さんに気づかずそのまま出ていき協会も悪魔側も2週間もの間八重垣さんとクレーリアさんを全く見つける事が出来なかつた。』

「よし…」

「出来たのかい？」

「うん！八重垣さん奥に隠れるよ！」

「え、え？」

そう言い八重垣さんと廃工場の奥に隠れてから悪魔を見てると先程の悪魔が起きた

「う、うーん私は一体何を…ハ!!こんな事をしてる場合ではない!!早くあの剣士を見つけなければ!!」

と言いこちらに気づかず飛び去つて行つた。

「これは成功かな？」

「そうみたいですね…八重垣さん1つ頼みがあります」

「なんだい？」

「電話番号教えて貰えませんか？」

といい少し前に両親から誕生日プレゼントで貰つた携帯電話を取り出した：（まだこの歳では買つて貰えないと思つてたけどね）

「理由を聞いても良いかい？」

「八重垣さんが完全に俺に信用してくれると言うなら今日から1週間後、悪魔や協会に全く見つからなかつたらここに来てください。あなたとそのクレーリアさんが望むならさつきの能力であなた方を一生三大勢力に見つからないようにします。そしてとりあえずはその連絡用です」

「なんで僕達にそこまでしてくれるんだい？」

「だつて知り合いが死んだら悲しいでしよう？」

「まだ出会つてそこまで経つてないけど？」

「そんなものは時間では決められませんよ？」

「それも、そうだね：分かつたまた1週間後ここで会おう」

「はい、また1週間後」

あれから1週間たつた

【学校はまだ治りそうにないため2週間休校を伸ばします。】

という事らしい

そりやそりやただ1週間で治つたらさすがにビビるわ
と廃工場でただ佇んで考え方をしていると入口から

2つの人影が入つてくる

「やあ元気にしてたかい？」

「八重垣さんこそ：とそちらの人は？」

「初めましてクレーリア・ベリアルと言います。この間は正臣を助けてくれてありがとう

「つて言うと貴方が八重垣さんの「そう彼女が僕の最高の恋人さあ!!!!」
!?!?」

うつわ性格変わりすぎと驚いてその後2人による惚氣を30分以上聞かされた。

しかもその後にはクレーリアさんのお兄さん（実際には従兄らしいが）のデイハウザー・ベリアルさんの話も聞かされた

とほほ…

「と言う訳で僕から話がある」

「どうするか決まりましたか？」

「ああ：雄護くん：君に僕達が外国に逃げる手伝いをして欲しい」

「そう言うと思つていました」

「ありがとう…」

そう八重垣さんが言い終えると俺はマツドスクリプトを1週間前と同じ最大出力で出して体に異常が出ないようエタニティエイトも出して体へのサポートに回し僕はストーリーを書き出す

そして10分もかからないうちに書き終つた

その内容はこうだ

『八重垣とクレーリアの2人の恋人はその後雄護の魔法みたいな能力にをかけられたことにより一生が終わるまで三大勢力や裏の世界の者たちには視界に入らなくなり、2人は外国に生き2人静かにいつまでも幸せに暮らしました。』

とそれで良いか2人に聞く

「この内容でいいですかね？」

「！ああ…これでいいよ！」

「私もこれで賛成するわ!!」

と言つたので最後に忠告を言つた

「おふたりはこの内容の為にもう二度と家族や友人にも会えなくなってしまうかもせんがそれでもいいですか？一応僕には電話をかける事ができますけどが…」

「覚悟はできる…!!」

「正臣と一緒にいられるなら私も」

「そうですか…」

といい俺は能力をマツドスクリプトの最大出力でそのストーリーを現実へと発動させた

「それじゃあ八重…正臣さん、 クレーリアさんお元気」

「君もね」

「本当にありがとうね雄護くん!!」

と言いながら2人は廃工場から去つていった

その後その街でおじいさんのような足取りで歩く少年が見受けられたとか何とか。

W a k e U p F i n a l P a r t 1 「絶望ト恐怖ト怒リト」

俺は気づかなかつた自分の傲慢さに
『その日常はいつまでも続くだろう』
『この日常はいつまでも続くだろう』
『その平穏はいつまでも続くだろう』
『この平穏はいつまでも続くだろう』
『この平穏はいつまでも続くだろう』

そして、

『この力があれば全ての人を守れるだろう』

その…この…傲慢さに気づくのが遅すぎたんだ…

そう思いながら俺は新しく作った腕の接合部から流出する血と痛みに苛まれて倒れる

ことの始まりの一日の始まりに戻る

その日も俺はいつもどうりの行動をしていた

学校が今はなく9時過ぎになるとずっと寝ている俺の上に乗つかりふみふみと前足で踏んでくるクロから起こされて、

最近の日課になつている朱乃姉ちゃん家からかかつてくる電話をとりいつもどうり話すそして最後には明日また朱乃姉ちゃん家に遊びに行く約束をする。

そこで終わつたかと思つたらあの日から3日たつた日からずつと電話をかけては惚氣てくる八重垣さんからの電話が来てそれに出るとまさかの今回最長記録更新の2時間近くの惚氣通話である。

そして日課となつてゐる廃工場に行つて廃工場での鍛錬とシェルブリツドの改良と他アルター能力の試行錯誤をする。

それから夕方になつてきたので歩いてゆつくりといつも通りの道を通つて家に帰つて行き、そして家に辿り着く。

ここで気づくべきだつたのだ：いつもちゃんと玄関の鍵を閉めていた両親がいたのに玄関の鍵が空いてる時点で気づくべきだつたのだ

更に俺はこの間悪魔に圧勝して勝つたために力に自信をつけてしまっていた。

それこそが最大の慢心だと言うのに

雄護 side out

三人称 side

雄護が鍛錬から帰つて来てそのまま自宅の玄関を開けるとそこには

血溜まりができていた。

「え、 は？ え？」

雄護は今日の前で見えている惨状が理解出来ていなかつた。

否、 わかつていて理解が及ばない或いは理解したくないのである。

そんな隠せていないような動搖をしながらリビングに歩いて行くとそこには、 血しぶきの部屋の中心で唯一血の一滴もかかっていない初老の銀髪で髭を生やした男が座つていた

すると銀髪の男は雄護の方を見たあと笑顔で

「おっほ!! 君が異次元君かい??」

「誰だそれ……つてかお前は誰だよ…………??」

そう言つた雄護…少年は一見酷く冷静に見える口調で言う

「俺ちゃんかい俺ちゃんはリリン…いやリゼヴィム・リヴァン・ルシファア…って言うんだぜ♪リゼヴィム様つて読んでくれていいだぞ♪」
と銀髪の髪をした男性は軽々とそう言つてくる

「お前の名前なんてどうだつていいんだよ…………1つ聞くぞこの家に散らばつて飛び散つてる血は誰のだ…」

「それはこの家に入つて来た時に喚いていた男女2名さ♪」

そうリゼヴィムが言い放つと沈黙が走りその後：

「…殺す」

「あ、なんだって？」

「殺す!!!」

そう言いリビングのソファを再構成し、

シェルブリッド第1形態改とシェルブリッド擬を瞬時に

両腕に纏いリゼヴィムと名乗った初老に対し殴りかかるが…

「あつひやつひやつひやつ!!異次元君のレベル程度じやあ俺ちゃんは倒せんよ♪」

といい雄護が殴りつく前に

リゼヴィムが片手で生成した魔力弾を放ち雄護の右腕のシェルブリッドに当てると当たった瞬間部屋に【ブチッ】

【グシャツ!!】【ブシャアアアア】という音が響き渡り雄護が自分の右腕に目をやるとそこには

「あ？あ??」

今度こそ本当に理解できなかつた

右腕が存在していた場所からは血が吹き出していたのだ。

そこには腕も無くシェルブリッドもなくただただ右肩から先が血が出てているのだ。

【ガアアアアアアアア!!】

そこまで理解が追いつく事で右腕のあつた場所からどんどんと激痛が来てしまい雄護は叫ぶ。

そして、それと同時に理解した

『コイツには勝てない』と

そこで次に雄護がとつた行動はリビングのものを再構成し無茶をすることで右腕を再々構成し、同時に足にラディカル・グッド・スピード（脚部限定）を纏つて瞬時に家からの脱出だつた。

【アアアアアア!!】

「おや?逃げるつもりかい?そやはいかないよん♪」

といい大量の異形の怪物を雄護の元に向かわせる。

(クソ!クソ!クソがア!!)

そんな言葉と怒りと恐怖と哀しみの感情が雄護の頭の駆け巡っていた。

三人称 side out

雄護 side

時は現在に戻る

俺は既に満身創痍だつた。

あの銀髪野郎は『今は敵わない』と思い即座に撤退することを選んだ。

その後アーツは追っ手として怪物を放つてきたが特別強いわけではなかつたが、いかんせん数が多くて出力を瞬時に現在出せる限界ギリギリまで引き上げて『衝撃』『壊滅』のラディカルのブリットで倒せたのだがそれでもおおよその体力を全て持つていかれた。

「ハアツハアツハアツハアツ…」

息はもうとつくて上がつていてそれでもあそこから少しでも遠くに今は逃げるために進むが、前にクロを拾つた公園まで来たところで遂に倒れる…

(ここまでか…父さん…母さん…俺が居たせいでこんな事に巻き込まれてごめんなさい…)

（仇を取れなくて…ごめんなさい…）

そこまで心の中で謝つたところで意識が薄れていく…

意識が消えかける瞬間に見えたのは叫びながらこちらに駆け寄つてくる金と黒の髪色をした浴衣を着てい男性だつた。

W a k e U p F i n a l P a r t 2 「R e s e t」

アザゼル side

俺、アザゼルはある日、日本の駒王町に視察に来ていた。

理由としてはサー・ゼクスから聞いた話でなんでもこの街の責任者であつたクレーリア・ベリアルという上級悪魔がこの町に来ていた協会の戦士八重垣正臣と恋仲になつてしまつたそうだ。

すると悪魔の上層部はその上級悪魔クレーリア・ベリアルと協会の戦士を肅清すべく上級や中級の者たちを向かわせ更にはこの町の協会とも手を組んで捕まえようとしていたらしい。

そこまでして捕まえようとするなんざ何か裏を感じるがこの話はおいおいまた考えるとしよう。

話は更に続く。

なんとそのクレーリア・ベリアルと八重垣正臣はいきなりこの町からいなくなつたらしいのだ。

ここまで包囲網なら普通は簡単に捕まえる事ができるだろう。しかし1人は上級悪魔でもう1人は協会でも有力な戦士だつたらしい。

それなら捕まえるのも一筋縄では行かないだろう。
しかし問題はここからなのだ。

いなくなる前までは探せば姿を見つける事が出来ていたらしいのだが、ある日いきなりどんなに探しても見つける事すら出来なくなつてしまつたのだ。

それだけではなくある悪魔の報告を聞いたらこういつたらしいのだ。

「私は戦士の男を追つていたのですが、次の瞬間気がつけば廃工場の中で目が覚めていたのです。油断をしていた事などでは決してなく次の瞬間にきなり廃工場にいたんです。私はあの人間がそこまでの手練だとは思えせん！なので考えられるとしたら何者かが介入して

のだと思います。」

という言い訳をしたらしい。

しかも二人が姿すら発見出来なくなつたのはその翌日からと言うのだ。

どう考へてもこれは何かしらの魔法……

もしくは、神器か…

とすればその二人に協力した神器所有者がまだこの町にいる可能性は高いな。

しかし、この場合考えられる能力はなんだ？

認識をずらす？いや、この場合認識阻害の魔法の上位版か？

だとしてもだ：

そういうつた他人に影響を与える能力の大体は自分の実力以下じゃないと効力が弱い節があるがそこはどうなるんだろうなあ…

くつそワクワクが止まらん!!この町の神器所有者を探すか!!

5時間後

だアアアアアア見つかねえええ!!

なんだ!?これ5時間探して気配が1ミリもしないとかなんなんだよ!?

やめだやめだ疲れたしそこの公園のベンチで少し横になるか。

1時間後

……………んあ?

やつべ今何時だ…

少し横になるつもりだったのにもう空が暗いじやねえか…

流石にここにこれ以上長居してたらシェムハザにまたキレられるな…

そうと決まればグリゴリに戻るか。

そう俺が考へ終わつた時だつた。

「あ？」

ガキが公園に歩いて来るのが見えた
なんだ家出でもしてんのか？

と思つていると公園にガキが入つて来てさつきまで公園の柵などで見えていなかつたガキの全体像が見えてくる。

そのガキは体の至る所から血を流していた。

おいおいこりやなんだ！？

するとガキが公園の入口の木の近くまで来たところで倒れた。

「おい!! 大丈夫か!! おい!!」

そう言つているがガキからの返事は帰つて来ない。

クソこれだからガキはめんどくせえんだ！！

と俺が思つているとガキの周りから突如として光を放つている八つの緑色の球が飛びま回つてくる。

するとその八つの球はガキの体内に入つていつた。

その後見ると出血が止まつていた。

一体なんなんだ：

とりあえずガキはグリゴリに持つて帰るか。

アザゼル side out

??? side
(.....ン?)

気がついたら僕は白い部屋にいた。

(ここはどうだらう?)

そう考へていると向こうの方から『ウイーン』という音が聞こえてくる。

そしてそつちの方にむくと金と黒の髪の男性がこちらに向かつて歩いて来ていた。

(誰だらう?)

「よおガキ目が覚めたか?」

「えつと……?」

「おつとその前に自己紹介だ。俺はアザゼルって言うんだ」

「アザ…ゼル…さん？」

「やめろやめろさん付けとかするなむず痒いから！アザゼルって呼び捨てで構わねえ」

「えっと……わ、わかりました……アザゼル？」

「よし！そんでお前の名前はなんて言うんだ？」

「…………カズマです。」

「カズマか。なるほどねじやあ名字は？」

「…分からぬい」

「あ？」

とそう聞かれて僕は答えた。

「ここがどこで今まで何してたか僕が何なのか…名前以外がいや、名字も全く分からないんですけど何か…何か…大切な事があつたような事がして」

「分かつた！分かつたから泣くんじやねえ!!」

泣いている？誰が？僕が？

そう考えてから頬を触ると涙が流れていた。

「すみません…ティッシュ貰つていいですか？」

「いやまあいいけどよ…」

と言つた後にアザゼルがティッシュをくれたのでそれで涙と一緒に流れていた鼻水『ズビツ!!ズビビビツ!!』も拭き取る。

「つて事はなんだお前さん記憶喪失なのか？」

「記憶…喪失っていうと記憶が無くなるやつですか…？」

「そうだその記憶喪失であつてる」

「そうですか」

「まあとりあえず本当にそうか調べるからちよつとついてこい」

「分かりました」

それからアザゼルに連れてつてもらいその白い部屋を出た後に色んな検査室？らしき場所を1時間かけてめぐつた。

「なるほどな」

「あの…僕の事何か分かりました？」

「すまん特には…調べて見たがこれと言つて体に異常がなかつたな。
だが…」

「だが…？」

「少しだけお前の右肩から右腕にかけての骨に繋ぎ直したような跡が
ついていたな。それ以外はないな」

「そうですか…」

「そう落ち込むな」

「はい…ありがとうございます…」…そういうえばここに来る前は
僕つて何処にいたんですか！それは分からんんですねか！」

「いやそつちもさっぱりだなそもそもお前が何処に住んでいたかが分
からないし、それにお前はあの時血だらけで公園まで歩いて来たから
な」

「血だらけで？」

「血だらけでだ」

「血だらけで公園まで歩いて来たのか…僕は本当に何してたんだろ
うか…？」

「それにしてもお前さんここまで話してて思つたんだが随分落ち着い
てんだな」

「ああ…なんていうか何も分からんんですけど話を聞いてると自然
と僕はしそうだなって思えてきて」

「そうか…まあ記憶が消えても人格がそのままなんて奴はいるしなお
前もそんな感じじやねえのか？」

「…そうかもです」

「…ここまで話したところでアザゼルが急に「アツ!!」といきなり思
い出しかのような反応をして

「カズマお前…神器の事はわかるか？」

「神器とは…？」

「…こういうもんだ」

「…いいどこからかタブレットを取り出してそこに映つている動画
を再生する。

その動画の中では1人の男性が立つていてその人が気合いを入れ

るようになら後腕が光だし次の瞬間その光が止むと男性の腕が銀色の鱗の様なものを纏っていた。

「これがセイ「これなら僕できる気がします!!」!? 本当か!!」
確証はない…が何故か僕はこれが出来るという強い確信が溢れるくる。

「よしじやあやつて見ろ!!」

「はい!!…………来てくれ!! 神器!!」

そう言つた後に僕の右腕が閃光を放ち出しそれが止むと僕の右腕はさつきの映像と同じ鱗の様なものの纏つていたが…映像と違つて僕の右腕の鱗の色は金色で緑色の八つの球がついていた。

「すいません…なんか映像の奴と違いました…」

「いや問題ないこれも多分神器だろうからな…というかこれはもしかしなくとも『龍の手』トウワイスクリティカルの亞種か?」

「あの…」

「なんだ?」

「そのとわ何とかつて何なんですか?」

「龍の手な!さつきの映像に出てたやつだよ」

「でもさつきの映像やつとはこれつてなんか違いますよね?」

「ああだからこれは龍の手の亞種じやないかと俺は思う」

「亞種:」

「そうさなこの形ならさしづめ『黄金に輝きし龍の宝腕』ゴルドクリティカル・ジュールってところか?」

「…だつさ(ボソツ)」

「なんか言つたか?」

「いえ何も!!:ところでジュールつてなんですか?」

「ああそれは宝玉を英語にするとジュエルだからその工を一棒変えただけだ」

「かなり適当ですね…」

「まあいいだろ。それとな今日からお前は俺が引き取るから」

「え、は、えー……」

「仕方ねえだろお前の身元が分かんねえんだからよ」

と言うわれその日から僕は「神の子を見張る者」の所属の神器所有者となつて日々特訓（地獄）の毎日が始まってしまったのだつた。

この物語は大門雄護が無くした記憶を取り戻し復讐をする物語である。（仮）

第1章 覚醒の赤と緋 第1節 新校舎のバケモノ

篇

Life 1 特例墮天使の日々

あの日アザゼルにグリゴリで僕を引き取ると言われてもう9年もたつた。

今年で僕はもうすぐ17歳になる。

「これで全部かな？」

これと言つて何か今のこところある訳でもないが明日は学校なのになんでこんな仕事を依頼して来るかなあ…

と思い僕、龍導^{りゆうどう}カズマはアザゼルから出される裏の仕事を終わらせて溜息をつく。

…まあ裏の仕事といえども殺しはなく裏の者からでた犯罪者の捕獲が主だ（殺しの仕事ではないがあまりにも手加減が出来ないような相手であれば殺す時もある）。

そして今回も裏からでたもの達の捕獲が終わるのでポケットからスマホを取り出しある電話番号に電話をかける。

少しの間コール音がなった後に【ガチャツ】と通話が繋がる音がする

ると

『もしもししどうした？』

「アザゼルさつきの依頼がおわりました。」

『おお!!早速捕まえたか!!』

「ああ、なんか今回は割かし内容が簡単だつたからね」

『と言つてもそいつ等5人は表の人間を既に何人か殺してやがるからな早めに掴まなきやならなかつたんだよ』

「なるほどです……でもこの人たちつてものすごく自信満々に挑んできた割に弱かつたんですけど？」

『あのな、お前みたいな特例墮天使っていうほぼ上級墮天使幹部と同じ奴と戦わせたらそうなるに決まつてんだろ?!そいつ等は確かに戦闘特化の神器だけどなお前は既に人間でありながら素の身体能力だ

けで言えばバケモンなんだぞ!!その位はそろそろ自覚しとけよ!!』

「の割にはさつき捕まえた連絡した時には『早かつたな!!』的な事を言つて驚いてましたよね?」

『だつてカズマ、お前は全くもつて探知能力や神経研ぎ澄ませて相手を探るなんてやり方が出来ないからだろうが…………そう言えば本当に今回は何故こんなに捕まえるのが早かつた?』

『いえ、相手の中の1人が探知系の神器だつた人がいたので普通に散歩してたら神器所有者つてバレて喧嘩ふっかけられました』

『なるほどな…馬鹿な奴もいるもんだな』

「はあ…それは良いんですけどこの気絶させた人たちはどうしますか?』

『いつも通り俺の隠れ家に置いとけ後で俺が回収しておく』

『了解です。それではおやすみなさい』

『ああ、またな』

と言つた後に「ツーッ」という通話がきれた音が発せられたのを確認した後にスマホをポケットに再度収納しアザゼルの現隠れ家に歩いて行き、先程縛り上げ気絶までさせた神器使い達を隠れ家の倉庫に放り込み外から鍵を閉めておく。

その後僕は頭痛がする頭を抑えながら駒王町の自宅へと帰るのだった。

翌日

昨日はあまり疲れなかつた：

そんな事を考えながら僕は現在駒王学園に向かつて登校中である。頭痛がずつとしていたために頭痛が収まつて眠り出しがたのが4時そして起きたのは7時で僕は本日約3時間しか寝れてないのだ…

神器を使う度に頭痛がするのは何なんですかね~?

酷い時は体調崩して風邪を引いてしまつてオーフィスと黒歌さん

に心配かけたのは本当に申し訳ないと思つたからね…気をつけないと

いや昔よりかは寝てるのかな…?

「おーーい!!龍導ーー!!」

ん？あれは……

「松田くんと元浜くんかあ：おはよう！いつたい朝からそんなに急いでどうしたんだい二人とも？」

と挨拶したのは友人である松田くんと元浜くんである。

この2人は僕が1年生の頃から同じクラスで中々自分から話すことが出来なかつた僕に対し気軽に話しかけて来てくれたのだ。

「『どうしたんだい？』じゃねえ——!! 昨日俺たちがお前に貸した『密着エロス24時』はちゃんと見てきたんだろうな——!!」

ただ残念な事にこのお二人+もう1人の友人の計3人はこの学園では『変態三人組』と呼ばれる程の変態ぶりである：

「ごめんね：昨日は頭痛がずっとしてて寝れてない無いから今も眠気がしててもう結構危ういんだよね：つとその前にさつきのコレは返すね」

「お、おうそうか：あんまり無理すんじやねえぞ？キツかつたら帰つた方がいいと俺は思う！」

「俺もそう思う！！早く体調は治せよ！そしたら我が秘蔵のエロDVDを貸してやろう」

「二人とも……ありがとう」

と2人に感謝の意を示したところで僕は気づいた

「二人とも兵藤くんはどうしたんだい？今日は一緒じゃないのかい？」

「いや兵藤の奴なら「お—————い!! 松田！元浜！龍導！」む、兵藤來たか」

とそこで学ランの下に赤い服を来てている男子がこちらにニマニマしながらやつてきた。

そうこの人がさつき言つていた僕のもう1人の友人の兵藤一誠くんだ。

…というか兵藤くん今日はいつにもましていい笑顔だなあ：と思うと兵藤くんがこう言つた

「聞いて驚くなよお前ら!! なんと…俺に…彼女が出来たんだ よオ——!!」

暫くの沈黙の後

「な、何――――――――!?!?」

「お、おめでとう兵藤くん？」

松田くんと元浜くんの驚きの声がそこら中に響き渡った後に僕も驚きながらお祝い？の言葉を送るのだった。

Life 2 いつもと変わらない日々…?

あの日

あの後に兵藤くんから聞いた話だと、昨日学校の帰りに1人になつた後に別の高校の女の子に声を掛けられてなんと急に告白されらしいのだ!!

『世の中そんな事があるのか〜』と僕は兵藤くんには失礼だが少しばかり驚いた。

それでも…兵藤くんが『彼女が出来たんだ!!』って言つた時は驚いたけど自分の友人に彼女が出来たと分かると自然に祝つていたし嬉しかつた。

何故だろうか…………あつ!!

変態だから!? 彼女出来ないと思つてたんだ!! (多分)

…さすがにそれはないな

後あれはなんだつたんだろうか…

と思い出すのは彼女出来ました宣言から後の初デートに行くと聞いた日曜の次の日の学校での兵藤くんとの会話だつた

「おーーーーい!! 龍導」

「あつ兵藤くんどうかしたのかい?」

「どうかしたどころじゃねえ!! お前! お前は夕麻ちゃんの事覚えてるよな!?」

そう言いながら聞いてきた名前は先週聞いた兵藤くんの彼女さんの名前だつた。

「兵藤くん…さすがに先週聞いたばかりの友人の恋人の事を僕は忘れないよ」

「だよな! だよな!! 先週確かに俺は夕麻ちゃんの事を松田や元浜や龍導に話したものんな!」

「そ、 そうだよ…なんだい? もしかして2人が君の彼女の事を忘れたとでも言つたのかい?」

「言つたんだよ!!」

「…え？」

違和感を覚えた。

彼ら3人は前も言つたが『変態3人組』と称される位で校内で転校生などでない限りまず知らない人は以内であろうと僕は思つてゐる。それもあつて彼らはものすごく彼女を欲していて中でも1番変態だと（性格はいいんだけどね…）兵藤くんが彼女が出来た時にはそれはもう嫉妬の炎が出来るように見えるほどだつたのだ。

…それなのに1週間たたない内に忘れる事があるだろうか？
ないな…絶対にない！

とすれば怪しいのはその兵藤くんの彼女さんの方か？

…よし聞いてみよう。

「ねえ兵藤くん!!」

「うおっ、なんだ!?」

「兵藤くん自身は覚えてるんでしょ？」

「はあ？当たり前だろ!!自分の彼女忘れる馬鹿はいねえよ!!」

「だよね？だからスマホから電話かけたりはしたの？」

「それが電話番号も写真も消えてんだ!!俺は消した覚えがないのに

!!

「なるほど…」

これで考えられる可能性は2つ

1つ兵藤くんの彼女さんが何かしら裏の事件に関わつてしまいそ
れによつて兵藤くんの彼女に関する記憶を消された可能性

2つ目はその彼女さん自信が裏の人間で兵藤くんに用がある為関
わりを持ちもう用がすんだ為に周囲から自分に関する記憶を消した
可能性

の2つの可能性が出てくるが…仮にどつちだつたとしても確実に
出る矛盾点が1つある…それは兵藤くん自身から記憶が消えていな
いということだろう。

何故だ…何故なんだ？

と考えた事までは僕は覚えてる。

結局あの後この件はウヤムヤになつてその後兵藤くんはこの話を出さなかつた…

それとその翌日には3年この学園のアイドルである『二大お姉さま』の1人のリアス・グレモリーさんと歩いて登校して来た。

更にはその日の休み時間に兵藤くんを呼び出したのはこの学園で女子からかなりの人気を集めるイケメン王子の木場祐斗くんが来たのだ。

：一体今兵藤くんの周りでは何が起きてるのだろうか……？
この事をアザゼルに聞いてみようかな？

とアザゼルから捕縛命令が出ていた危険思想の神器所有者達を縛りながら僕は考えるのだった…。

Life 3 特例墮天使のお仕事

やばいよ…やばいよ…

アザゼルはなんでこんな重要な事を話してなかつたんだろう?
まさかリアス・グレモリーさんが72柱の悪魔の出でありこここの管理者だつたなんて!!

しかも!今回の異変は下級と中級墮天使が関わつてる可能性が高いって何!?

またグリゴリから問題児（と言うか問題そのもの）が出たつて事ですかね!!

そしてこれまでのを考えると多分、兵藤くんは神器所有者の可能性が高くそれを奪う為に殺そうとした所をリアス・グレモリーさんが間一髪で助けたんだろう多分。

更に今日この町で墮天使と神器所有者が当たつた気配が出たそうだ：

その為今回の異変でアザゼルから墮天使が関わつてた場合は特例墮天使としてこの異変の早期解決と『こちらからの謝罪と出来る限り何か償いをする事と出来れば首謀者大半の引渡し』を管理者リアス・グレモリーさんに伝える事だそうだ…それともう一つ言われた事あつたけどアレは僕はしないなあ…

ともかくこの町で拠点にしてるであろう教会に早く行かないと!!
そう思い見えてきた教会に向けて続けて走り出すのだつた。

カズマ side out

イツセー side

「こういうとき、神に頼むのかな…」

俺はそんな事をいつのまにか口にしていた。

「?」

疑問符を浮かべるレイナーレ。構わず俺は続ける。

「でも、神様はダメだ。さつきも俺の言葉を聞いてくれなかつたし、アーシアも助けてくれなかつたからな…」

「何? 遂に壊れちゃつた?」

「じゃあ、アレだ。魔王さまなら俺の頼み聞いてくれますかね? いますよね? 聞いてますか? 一応俺も悪魔なんで、俺の願いだけでも聞いてくれませんか?」

「…………どうしようもないわね。こんなところで独り言を始め出したわ、コイツ!」

「後は何もいら niede」

そう言い足の痛みを堪えながら俺は立ち上がる

「そ、そんな嘘よ!!」

俺を見てそう叫ぶレイナーレ

「だからコイツを1発殴らせてください!!!!」

そう言つて俺は再び動き出す

「…立ち上がる筈がない!!下級悪魔ごときがあの傷で動けるはずないじやない!!体中を光が内側から焦がしているのよ!?光を緩和する魔力も持たない下級悪魔が耐えられる筈ないわ!!」

「ああ……痛てえよ……チヨー痛てえ……今だつて脚はガクガクで意識だつてどつかに行つちまいそうだ……けどな…」

そういう更に俺はアイツの前まで進む

「それ以上にてめえがムカつくんだよ!!!!」

『Explosio』

その音声と共に俺の全身に今までと比べ物にならないほどの力が溢れてくる。

「そんな!!それはただの龍の手トウワイス・クリティカルの筈?…でもコイツのこの魔力の波は中級…いや!!上級悪魔のそれ!!」

上級悪魔つて部長と同じつて事が…そりやありがたいな…：

「う、嘘よ!!」

そうやつて光の槍を投げるがそれを左腕の神器で【バキッ】と音をたてて碎く。

「い、嫌!!」

それをみて黒い羽根で逃げようとするレイナーレ。

だが俺は逃がすつもりはない!!

「逃がすかバカ!!」

「わ、私は至高の！」

「吹っ飛べ！クソ天使ッ!!」

そうして思いつきり殴ったレイナーレは教会のガラス窓に衝突し【ガツシヤアアアン】と音をたてそのまま外に。

「ザマーミろ」

一矢報いた：

とそう考えた俺の心には虚しさが残る…

「アーシア…」

もう一度と彼女は笑ってくれない…

イッセー side out

三人称 side

アーシアの事を思い出していたイッセーだがそこで限界が来て倒れ……。

「おつかれ、まさか墮天使を倒すなんてね」

そう言つて倒れかけたイッセーに肩を貸すのは先程地下からイッセーを送り出した木場祐斗だつた。

「よー、遅せえよ、イケメン」

「ふふ、部長に邪魔をしないように言われていたんだよ」

木場のその言葉をイッセーが不思議に思つていると

「その通りよ。あなたなら、墮天使レイナーレに勝てる信じていたもの」

声のするほうへ振り返れば、紅の髪を揺らしながらリアス・グレモリーが笑顔で歩いてくる。その横ではいつものニコニコスマイルで姫島朱乃がいる。

「部長、どこから？」

「地下よ。用事が済んだから、魔法陣でここへジャンプしてきたの。協会にジャンプなんて初めてだから緊張したわ」

そうイッセーが聞くとリアスは淡々とイッセーに笑顔を向けながらそう答える。

（なるほど、それで木場たちと共に上へあがってきたのか。：：つてことは、下の神父たちは全滅だな。部長相手じや、ぶじじやすまないだろうし。）

そうイツセーが考へているとリアスの後ろにあつた地下に続く階段から小猫が上がつて来る。そのままイツセーの横を通り過ぎていこうとすると

「小猫、どうやら汚い堕天使さんたちを回収してくる必要はなさそうよ」

「はい…？」

「部長？」

リアスの言葉にオカルト研の（リアスを除く）全員が啞然としていると協会の出入り口から声が聞こえてくる

「ゞ、ゞ志望の品をお届けに参りましたゞ」

その若干どもつた声と姿を見てイツセーは驚き叫ぶ。

「なんで龍導おまえがここにいるんだよ!?」

そう言つたイツセーの視線の先には全身黒い格好をし黒いロングコートを纏い墮天使たちを引きずつて来ている龍導の姿があつた。

三人称 side out

カズマ side out

まあ、普通は友人が墮天使を四人も引きずつてきたらそれはそういうはんのうだよね… はは…

「兵藤君… 聞きたいことはたくさんあるだろうけどまず一つだけこつちから聞かせてくれるかい？」

「な、なんだよ？」

そう、ここに来て兵藤君の姿を見て気付いたのだ

「君は悪魔だつたのかい？」

「え、な!!」

それを聞き驚いている兵藤君に応える

「君の背中から悪魔の羽が出てたからね」

「いつの間に!!」

それを聞いて羽が出てるのに気づいたようだつた…

「今⁷の反応含め今までの行動を考えるとまだ悪魔になつてそう立つてないよね? すると……いいやこいつらに聞いた方が早いか」

そう言い僕は堕天使引きづつて来た堕天使の1人をリアス・グレモリーさんの足元に投げつけた

リアス・グレモリーさん（以下長いのでグレモリーさんと記す）はこちらを無言で警戒するが堕天使が起きたのに気づいて視線がその堕天使へと切り替わつた… よかつたあずつとにらまれ続けられると精神が持たないよ…

「…、ここは?…」

「きげんよう、堕天使レイナーレ」

「…、グレモリー一族の娘か…」

「初めまして、私はリアス・グレモリー。グレモリーカー家の次期当主よ。短い間でしようけど、お見知りおきを」

そう笑顔で言つたグレモリーさんに對し、先ほどレイナーレと呼ばれていた堕天使はグレモリーさんを睨み付けているが。

と、途端に嘲笑う。どうしたのだろうか?

「…、してやつたりと思つてゐるんでしようけど、残念。今回の計画は上に内緒ではあるけれど、私に同調し、協力してくれてゐる堕天使のいるわ。私が危うくなつたとき、彼ら私を―」

「彼らは助けに来ないわ」

レイナーレの言葉を遮り、そうグレモリーさんは断言する。

「堕天使カラワーナ、堕天使ドーナシーク、堕天使ミッテルト、彼らは私が消し飛ばす…、予定だつたのだけども急に現れた彼が全員気絶させて回収されたから今はそこで三人とものびてるわよ」

「な、何!? 誰だお前は!!」

グレモリーさんがそう言つた後にこちらに振り返つて事実を確認

するとともに僕の存在を認識するや

「で、あなたはいつたい誰なのかな?」

やつと自己紹介かな?

「これは失礼いたしました。僕は駒王学園高等部2年生で兵藤君と同

じクラスかつ神の子を見張る者グリゴリの堕天使総督アザゼル直属兼『特例墮天使』の龍導カズマです。あ、あと墮天使からは・特例・や人間で羽が無いので・無翼・ともよばれていますが呼び方は何でもいいですよ』

「む、ムヨク?」

そう兵藤君が聞き返す。

なんか皆さんのが警戒心が高まつた気がする…

そう考へていてるとグレモリーさんが聞いてくる

「それであなたはここに何しに来たのかしら? 事と場合によつてはここで消し飛ばすわ。」

「なあ… 木場、部長が言つている消し飛ばすってどういう意味なんだ?」

「その一撃を食らえばどんな者でも消し飛ばされる。滅亡の力を有した公爵家のご令嬢。部長は若い悪魔の中でも天才と呼ばれるほどの実力に持ち主ですからね」

と主を褒め称えるように先ほど木場と呼ばれてた男子は答えている

「別名『紅髪の滅殺姫』

そういう「うふふ」と笑つて答える黒髪ボニー・テイルの女子… 確か姫島朱姫さんつて言う3年生の先輩だつだけ?

… つてそだグレモリーさんの問い合わせに答えてなかつた!! 早く答えないとキレ… 見るからにもうキレテらつしやる!!

「う、上からの命令です」

「上… まさか墮天使総督のアザゼルから!?

「なぜアザゼル様がそこで出て」

「うるさいよ」

「ガツツツ!?

「「「「!」」」

そこでみんなが驚いてるが気にせずそのままレイナーレを思いつきり壁に投げつける… だけだつたんだけどそのまま殴つた勢いで協会の壁にめり込んだ

うん、だつて飛んできた方向と言い兵藤君のケガからしてどう考へても犯人この方にしか思えないんですね。

ええ、レイナーレさんクソザコスギ（△）（内心煽り）（私怨まじり）

とそうじやないそ、うじやない

「で、話の続きでしたよね？なぜアザゼルからの命令かつて話の」

「え、ええ。いろいろツッコミたいことはあるけどまあいいわ」

「かしこまりました。それでさつきから言っているアザゼルからの指令があなたへの交渉なんですよ」

「交渉？」

「アザゼルからの指令内容はこうです。今回の異変で堕天使が関わつてた場合は特例堕天使としてこの異変の早期解決と『こちらからの謝罪と出来る限り何か償いをする事と出来れば首謀者大半の引渡し』を管理者リアス・グレモリーさんに伝える事なのです……」というわけで……大変申し訳ございませんでした!!僕自身も兵藤君の様子がいつもと違うからアザゼルに聞いていたのですが中々アザゼルが口を開かなかつたので脅して情報を吐かせた後に無理やり押し通して指令を出させたのですが……遅かつたようですが……」

そうグレモリーさんに話してゐる最中に気づいてしまつたのだ協会の椅子で横になつてゐる金髪の外国の女の子が青白くなつてゐる。あればどう考へても……

そう考へていたら兵藤君がこちらを見て叫んだ

「遅かつたようですが、ねーよ!!龍道!!謝罪なんていらないんだよ!!謝るくらいだつたら……謝るくらいだつたら……アーシアを返せよ!!」

… その言葉を待つてた

「兵藤君……もう三つ聞きたいことができた」

「なんだよ!!」

こんな時でも質問してくる僕に対しても質問してくる僕に対してキレかかつてゐる

「キレルのはいい、だが兵藤君もしかしたらアーシアさんは生き返ら

すことができるかも知れない」

「え…ほ、本当か龍道!?!」

「聞かないことには絶対とは言えない。これはそのアーシアさんに関するとしても大事なことなんだ…。一つ目の質問まずこのリングは彼女の神器かい?」

「ああそうだ!!」

そう言い兵藤君に見せたリングは先ほどレイナーレを殴つたときに奴の腕からすっ飛んできたのを回収したもの

「二つ目彼女は死んでどのくらいたつた?」

「まだ10分もたつてない筈…うん多分…」

多分で大体10分たつてないならあとは…

「そして最後の三つ目の質問…。君にはその生き返った後のアーシアさんの一生を背負う覚悟はあるかい?」

「…それはわからんねえ…けどな俺はアーシアを生き返らせるなら生き返らせたいんだ」

「それは…どうして?」

「だつて俺はアーシアにとつての初めての友達だからな!!」

「これ聞く必要はなかつた感じかな?」

「分かつた!!そしてこれにて条件はクリアされた!!イケるぞ兵藤君

!!

「ちよ、ちよつと待ちなさい!!」

そう言つた瞬間グレモリーさんが止めに入つた

「なんですか?」

「理解するのに時間がかかるて口をはさめなかつたけどあなたの口ぶりからしてアーシア・アルジェントを生き返らせる事ができると聞こえるのだけど?」

「そう言つているんですけど?」

「そんなの悪魔の駒イーヴィルピースや特殊な道具でも使わないと無

「あります。僕のこの両腕に」

それを聞いてグレモリーさんが今度は兵藤君に問いかける

「イツセーそれでいいの……？」

「はい!! 正直不安じゃないと言えば嘘になります……けど、アイツは、龍導はこんな時に絶対嘘はつかないんで!!」

「嬉しいことを言つてくれるね……だったら僕は君の期待に応える!!」

そう言い僕は僕の神器を両腕に展開する

すると両腕には金の籠手と金の鱗に覆われその上から最初から埋まつていたかのように両腕に四つずつ緑の宝玉が現れる。

「龍導それは?なんか俺の神器に似てるけど」

「これが僕の神器『ゴルドクリティカル・ジユール黄金に輝きし龍の宝梳』だよ。これでアーシアさん

を生き返らせる」

そう言つて僕はアーシアさんの近くまで来て気づく

「ひよ、兵藤君??」

「な、なんだなにか問題で」

「君の学ラン貸して!! アーシアさんが裸だと生き返らせるのに集中できなあから!!」

「お、おうわかつた」

そう言つて兵藤君がこつちに来て急いでアーシアさんに学ランを被せる

「あとアーシアさんのこのリングをどつちの腕でもいいから着けてあげて」

それを投げて渡すと「あ、あぶねーだろ!!」と言つて怒られた。

も、申し訳ない

「あ、それと」

「まだあんのかよ!!」

「作業中は絶対に邪魔しないようにさつきも言つたけど集中が途切れるとダメだから」

「了解だ」

「それじゃ始めるよ…… 神器頼む!!」

神器にそう言葉をかけるとそれに応えるかのように両腕に付いている八つ全ての宝玉から緑色の光が溢れ出す

「すげえ… まるでアーシアの神器見たな光だ…」

そう言つているように聞こえたが今はこつちに全神経を集中させないと

戻つてきてくれアーシアさん… 僕は君のことは全く知らない、だが、僕の親友が君の帰還を待つているんだ!!!

そう思つた瞬間協会すべてに覆つてしまふほどの閃光が発生した

「ハア… ハア… 兵藤君、蘇生は成功だ…」

その言葉を言い終わると同時にアーシアさんの瞼が開き始める

「あれ？」

僕はそれの言葉を聞くと同時に立ち上がり協会の壁にめり込んだレイナーレと他3名の墮天使を回収し協会から出ようとする

がグレモリーさんに呼び止められる

「待ちなさい。どこに行くつもり? まださつきの交渉に対しての答えは言つてないわよ」

「すいません… 明日必ずあなた達のもとへ行きます… 案内は兵藤君に頼んでください… 僕はこいつらと違つて逃げも隠れもしません。ただ渡す前にこいつ等には反省させないといけないんで…」

「… わかったわ。その代り明日必ずよ」

「了解です」

グレモリーさんとの会話が終わり僕は帰宅用に足元に魔法陣を起動する

すると兵藤君とアーシアさんの声が聞こえてくる

「… イッセーさん?」

「帰ろう、アーシア」

その言葉と同時に魔法陣が光つて発動した

また明日会おう兵藤君、そしてアーシアさん

そして僕は家へ帰るのだつた

Life 4 その後顛末

： また吐きそオロロロロロロ r …

： 洗面台でまた吐いた

気持ち悪い…

とりあえず布団まで移動しよう…

というかどーしよう… 「明日学校で詳細は話します!」 的なこと

言つちやつたけど…

そう考えた後に僕は布団の横に置いていた目覚まし時計の時刻を見る。

現在時刻 14時27分… つまり午後2時27分ですね（やつちやつた☆）

やばいなー（思考能力低下中）おこられるなー（リアスさんに）き
れられたなー（黒歌に）しんぱいさせちゃつたなー（オーフィスに）
やつぱり簡単に人の蘇生なんて引き受けるもんじやないね…
： 後が怖いが今日は強制的な呼び出しがない限りはもう寝とこ

う。

そうしようそうしよう。

というわけで…：

「ありがとう、あとおやすみー」

そうして看病してくれてて寝てしまつたのであろう布団の近くで
寝ている我が家の龍神様に掛け布団をもう1枚押し入れから取り出
して掛けてお礼を言つたのちに僕は再び眠りについた。

カズマ side out

イッセー side

俺、兵藤一誠は現在部室に集まつている俺以外のオカ研メンバーも
含め全員沈黙に徹していた。

（イッセーさんイッセーさん）

そう言つてアーシアが俺の制服の裾を掴んで小声で話しかけてきた。

「アーシアどうしたんだ？」

「あの私の勘違いだと思うんですけど部長さん何かに怒つていらっしゃいますか？」

「あ、うん多分部長が起こつているのは俺たちに關してじやないよ」

龍導君に 対して らしいよ」

あ、木場さんこんにちは

「龍導に対して？あいつなんかやつたわけ？」

『実は龍道君が明日』詰綱は明日語で『みたいなどとを言ひたらしい

「そういえば今日は朝から居なかつたな」

「大だり龍導君の家の電話番号を聞いて、巡回してみた。」
「うーん、

「うん……」
育達が雷語に出ながら「たのむ」

それで俺

あれ？ ジヤあ俺がアイツに電話かければいいんじやないか？

そう考えて制服ズボンのポケットからスマホを取り出して…

そして龍導の電話番号に掛けるそれからコール音が數度なつたが

もしかしてあのあと何かあつ

・ブルルルルブルルルル・

龍導か掛けなおしてきた!!

方子ヤ

もしもし?

「もしもし？兵藤君？さつき僕の携帯に電話かけたかい？」

『というか話途中で遮ってしまうけどそこにオカルト研究部のみんなは居るか、?』

「居るけど…」

『ならいまからそつちに行くから兵藤君にやつてほしいことがあるんだけど』

「なんだ？」

『こないだ兵藤君含めた三人にメモ帳の紙やつたでしょ？それを床でいいから置いてほしいんだ』

『こないだのメモの紙を床に置いたらいいんだな？』

『そうそう』

「わかつた」

そう言い俺が龍導が言つたとおりにメモの紙を部室の床に置いたらメモの紙が光そこから

「…ども」

龍導が現れた!!

イツセー si de out

カズマ si de

僕、龍導カズマは現在兵藤君に渡していたメモ帳の紙を使い転移してきました。

「…ども」

あ、なんかこつち向いて頭抱えてため息ついてるリアス・グレモリーサンがいる

「あなたね… 仮に許可なしにここへの侵入は見逃すわ… けど!! 電話3回も無視とはいひ度胸ね!!」

「3回電話… あ、もしかしなくても家の方にかけてますか？」

「そうよ!!」

「えつとお… その一非常に言いにくいくんですけどー」

「何!!」

「寝ました」

「はあ!? あなた学校さぼつて寝てたの!?」

「まあそれも含めて今から話しをするんでしょ? ちようどよかつたですよ… こここの自称管理人とは話がしたかつたですかね?」

「ヒエツ」

という会話をすると兵藤君と昨日の… 金髪シスター（名前昨日聞いた気もするけど忘れちゃった）さんに若干怯えられた悲しいなあそれからここの部室の椅子に座り

「では改めてお話をしましようか？リアス・グレモリー譲

「…ええいいわ会談をしましよう龍導カズマ」

呼び捨てですか… マ、イツカ!!

「で昨日の話の続きでしたつけ？」

「そうね特に昨日アーシアを蘇生した能力のほうがきになるわね」

「あ、そつちですかあ（いや別に昨日の話がそれで流れるならそれでもいいの… かな？）」

「で!! 昨日のあれはいつたい何なの？」

「僕の神器『黄金に輝きし龍の宝椀』の能力ですよ」

「改めて聞いてみても全く聞いたことない神器ね」

「だつてアザゼルも『その神器見たこともねえから俺が名付けてやるよ!! そうだな』『龍の腕』に似てるしその亞種っぽいし『黄金に輝きし龍の宝椀』なんてどうだ？（雑回想）』なんていわれてつけられたくらいですからね」

「そ、 そうなの？ それでその能力つて昨日見たまんまの」

「能力ですね。 実際のところは少し性質が違うので僕はこの能力を『復元』と呼んでいます」

「『復元』？」

「分かりやすいですよね？ というかそもそもがこの能力は『回復』って呼んでたんですよ」

「え、 じやあお前の神器つて能力、 二つもあんのか？ … なんかズルいな」

「そう言つて会話に割り込んでくる兵藤君… というより

「兵藤君話聞いてた？ というよりなんで僕の神器の能力が二つだと思つたん？」

「へ？ さつき言つてた『回復』と『再生』やつ

「なるほどそゆことか。 言い方が悪かつたよ。『回復』つてのは『再生』の前の呼び名だから僕の神器が使えるのは『倍化』と『再生』だけだ

ね

「はーー!? お前倍化できるのかよ!」

『 言うほど驚く内容でもないきがするが…？』

「一応『龍の腕』の亞種だから」

「じゃあレイナーレを吹き飛ばしたのも神器の力なのか？」

「んや？ あれは素の身体能力の全力だよ?」

「な?! じゃあ、あれで神器なしの実力なのかよ!？」

「(…数分もたたないうちに「は?」を2回も言われてしまった) そ
うだね、墮天使にも強さのランクがあつて下級墮天使は神器の実力な
しでもいけるんだけど中級墮天使とかもいてそれ位だと流石に神器
使わないと僕も勝てないしね」

「まあ上級墮天使とかもあるんだけど… そもそも上級はグリゴリの
幹部しかいないし、僕が全力出しても一度も勝ててない」

「へ～じゃあ昨日龍導が言つていた『ムヨク』とか『特例墮天使』つて
のは何なんだ?」

「ああ『ムヨク』つてのは俺が「お前は人間のくせに欲がすくねえんだ
よ!!」つて突つ込まれて更にそこに人間だから翼が無いってのも含め
て「何も無いつて『無』に『欲』をカタカナの『ヨク』つて呼んでさ
らにそこから『翼』に変換して『無翼』つてコードネームはどうだ???
まあ皮肉なんだけどな」つてグリゴリ1の中二病に名付けられたのが
始まりだよ」

「なるほどな（中二病つて今聞こえた気が…）」

「次に『特例墮天使』はグリゴリ内でさつき言つてた幹部… 上級墮天
使と同等又はそれより下の特殊な立場のやつに与えられる称号です」

「つてまあ無駄話はここまでにしましよう」

リアス・グレモリーの方を見やると彼女もそれに気づいて小さく

「そうね」と同意した後

「それじや今回の事件について詳しく聞かせてもらおうかしら」

と言つた

「そうですねまずは事の発端で事件の首謀者であるレイナーレが行つ
た事から言つていきましょうか」

そう言いながら僕は懐からメモ帳を取り出しあしめる。

Life 5 目覚めの殴り込み

やあ、僕の名前は龍導カズマだ

数年前に厨^{アザゼル}一病に拾われて準堕天使幹部的なものをやつています。昨日まで13日もの間アザゼルからの仕事により別の町や都市に趣、グレゴリに敵対又は逃亡した神器所有者の捕縛をしておりました。

そんな面倒臭い仕事も終わり久しぶりの学校そして兵藤君や松田君と元浜君に会えると思って登校したら居なかつた。

：いや、正確には松田君と元浜君は居た。そう……兵藤君がクラスに居なかつたんだ。ただ単に朝からオカ研の部室に行つてみたがやはりそこにも兵藤君は居なかつた。その後一応学校内を探してみたが居ない。

普通ならまだ学校に来てないだけと思うけど、最近はあるのクソおんn、……失礼。

リアス・グレモリーが早朝から兵藤君を鍛える為にランニングに連れ出しているから前より早く学校に登校しているんだ。だから、この時間帯でまだいなのはおかしいんだよね？

そしてここまでやつてもう1つ当然だが分かつた事があつた。

グレモリー眷属がそもそも学校に全員が登校して來てないのだ。クス、これまた失礼、グレモリーの奴ならまだしもクイーンを含めた眷属全員がいないのはおかしい……もしかしなくとも僕が居なかつた間に何か事件が起きた。r巻き込まれた可能性が高いな……

因みにその事（学校にオカ研メンバーがいない事）を松田君と元浜君に聞いたところによると何やらオカ研の合宿があつたらしいのだとして昨日は普通に他校のオカ研との試合があつて今日はそのお休みと……オカ研の試合とかどう考えても嘘だよね…………？そんな事を考えてるとアルジェントさんが教室に来た。しかも、チヤームがなるギリギリでだ。

珍しいこともあるんだなあ～

……いやそうだつた、アルジェントさんもグレモリー眷属でし

たね。

その後昼休みになつてからアルジエントさんを屋上呼び出した（もちろん松田君と元浜君にあらぬ疑い掛けられぬようアザゼル印の「認識ズラし催眠装置」かけてきた）

「……」（足音が聞こえた）

「……どう聞きたいこと内容は分かりますよね？」

「元のソルジャー」

「えーと……皆さんが学校に居ないことに置いてですね……？」

「はい。話せる範囲でいいので僕が居なかつた間に何があつたのか知りたくて」

一
は
レ
：

れ
て
。

何でアテイヘリトに部下巻き込んだ!?

「……………！」ハナヤノでモコモコしてしません！

「でそのレーティングゲームつてのは勝敗は…」

「はい…負けてしましました」

まあ当たり前ですね。

もしかして『滅びの力』があるし『赤龍帝』大丈夫とでも思つてい
たのか…?

だとしたら…

「勘違いも甚だしいな」

三

グレモリーさんは『赤龍帝』…兵藤君がいるから大丈夫とでも思つて
いたのかもしれないけど素人が最初から何度も戦い抜いたプロに勝

てる訳がないですよ」

え
あ
の
す

「一応言つときますけど、アルジエントさんが謝る必要ないですから。どう考えてもグレモリーさんが悪いですから…」

「それはそうと話中断しててすいませんでしたが結局今日なぜ皆さん来てないのでしょうか？」

「それは今日がリアスお姉さまの結婚式で皆さんもその出席と準備の為冥界に行つてて」

「なるほど…」

つまり自業自得でわ？わ？

「じゃあ兵藤君も今日はそれで休みなんだ」

するとアルジエントさんはさつきよりも顔を俯かせる

そして遂には泣き出した…えつ？えつ？えつ？

「イッセーさんは最後まであの時諦めなくてあの後からずっと目が覚めてないんです」

兵藤君がまだ氣絶したままか…命に別状はないんだね…ならいい…訳でもないか…

「じゃあ今日兵藤君のお見舞いに行つてもいいかい？」

「つ！！はい！！」

そう言つたら笑顔でアルジエントさんは答えた

それから時間は経つて放課後

約束通り兵藤君家にお見舞いに来た

けれど兵藤君の部屋から話し声が聞こえる

!!が先客がどうもいるようで…!!

「そろそろ扉の前にいる方も入つて来ては如何ですか？」

カズマ side out

イッセー side

俺、兵藤一誠はさつき目覚めた…

しかもレーティングゲームに負けたようだつた…

ただ、だからと言つてあの焼き鳥野郎に部長は絶対に渡すつもりもない!!

だからさつきから話しているグレイフィアさんに俺はそう伝える

「そうですか。なんにせよ私はサー・ゼクス様からの伝言は伝えました

と

「そうですか。なんにせよ私はサー・ゼクス様からの伝言は伝えました

ので戻ります……がその前に

「そう言いながら部屋の扉の方を向くグレイフィアさん
「そろそろ扉の前にいる方も入つて来ては如何ですか？」

と言つた

すると扉が開いて見知った人物が入つてきた

「龍導!! 来てたのか!!」

「兵藤君のお見舞いにね。さつき来たばかりだけど
「心配させてごめんな!!」

「いいよ僕も今日この街に帰つて来たばかりだし」

そう龍導と話してると

「やはり貴方でしたか…」

「ゞ無沙汰していますグレイフィアさん」

「ええお久しぶりですカズマ様」

と挨拶を交わしてた

「え、お前グレイフィアさんと知り合いなの？」

「いやこれはグレモリーさん達には内密にして欲しいんだけど、実は
駒王学園に入学するに当たつてアザゼルがサー・ゼクス様に許可貰い
に行つてんだよ。だからその時に面識しただけだね」

「はい」

ヘー…………

つて!!!

「つて事はお前魔王様に会つたことあるのかよ!?」

「うん」

うん!?

まじかよ!!俺はまだ会つたことないのに…

「それはいいとして、なぜ貴方がここにいるのですか?」

とグレイフィアさんが会話を割り込んできた

「だから兵藤君のお見舞いです」

「そうではありませんここは悪魔である一誠様のお家です。なぜ墮天使である貴方がここに来たのかという問題について聞いているのです」

え!!何?!龍導は俺の家に来ちゃ行けないのか!!?

「友人のお見舞いに来ただけです」

それに対しても龍導が淡々と答えた

いや、龍導…多分グレイフィアさんが求めてる答えは今それじゃないと思うぞ…

「そうですか…まあそれはまた次の機会に問い合わせることにしました。う…それでは」

そう言い残してグレフィアさんは俺の部屋をあとにした。

「で、どうする?」

「え?」

「話は扉の前で聞かせて貰つてたよ…グレモリーさんを助けに行くのかい?」

そうか…話聞いてたのか…

「アルジエントさんからも今回のあらましは大体聞かせて貰つた」

つて事はレーティングゲームに負けたことも知つてんのか

「ハツキリ言おう。今回のはグレモリーさん自業自得だ!!」

「なッ!!」

「だけども!!それでも!!兵藤君が助けに行きたいと言うなら…僕も手を貸そう!!…仲間は多い方がいいはずでしょ?」

龍導…

「頼む!!俺は部長を助けたい…だから力を貸してくれ龍導!!」

「ああ!!任せてくれ!!」

そう言つて急いで部屋の扉から出て

「準備してくる!!兵藤君も準備出来たらこの家の前で待機してて」「わかった!」

そう言い残し部屋から急いで出ていった龍導

…さて俺も準備するか

イツセー side out

カズマ side

「兵藤君待たせたね」

「おおー龍…導…？」

「そうだけど？どうかしたのかい？」

「いや、タキシードスーツまだわかるとして何で変な仮面付けてんだよ？」

ああ、これがことか

「忘れてるかもしないけど僕はこれでも一応堕天の勢力の人間だよ？当然だけどそれなりに知られてるんだよ。そして今回は上級悪魔達が集まつてきてる。そこにはノコノコと駒王学園の制服を着ていつたら身バレしてしまうから、その為の変装用の仮面だよ分かつた??？」

「わ、分かつた」

ならばよし!! そして最終確認だ

「じゃあ準備はいいかい？兵藤君」

「いや、それはいいんだけどそのバイクどうすんだよ？」

「魔界に行くのに使うんだよ？」

「龍導…？」

なんでそんな理解できないような目で僕を見るんだい？兵藤君？

「どうかした？」

「魔界にはこの魔方陣で行けるって言われてグレイフィアさんからこ
れ渡されたんだが」

「それも聞いてた」

「じゃあなんで尚更バイクなんか持つてきてんだよ」

「それはその魔方陣を使って魔界にバイクで行くからだよ」

「はあ？」

「このバイクには魔方陣の紙を読み込ませる機能があつて、それで読
み込んだ魔方陣の場所に飛ぶことが出来る」

「そ、そうなのか」

「それに上級悪魔同士の結婚式なんでしょう？って事は確実に警備は堅
いはず。だからこそバイク突っかかるんだよ」

「なるほど…………え？」

まあ他にも理由もあるけど

「分かつたらさつさと行くよ!! 急がないと時間はそこまでないはず…

多分!!」

「お、おう!!」

そう言いながら兵藤君を急かして先程の魔方陣を貸してもらいバイクに読み込む

すると2m先正面に魔方陣が展開される

「じゃあ行くよ!!しつかり捕まつてね!!」

「ああ!!」

思いつきりバイクのハンドルを回す

「あ、それと身バレを防ぐため兵藤君の事を『赤龍帝』って呼ぶから僕の事は名前以外で適当に呼んでね」

「は、はあ!?それを今いきなりい」

「アクセル全開だア!!」

「話を聞きやがれ!!」

瞬間ボォン!!!と音を鳴らし僕達は魔界へ向かつた。

まあ分かりきつてることに魔方陣に即突つ込んだ事で魔界にも即侵入したが…

現在白い壁、白い天上に豪華なシャンデリア、そして両端に装飾がされた赤いカーペットの上…どうやらかなり誤算がありその上サーゼクス様とグレイフィアさんはかなり兵藤君に配慮してたようだ…マジか

尚、敵・警備員の魔魔の方々 数：たくさん

「お、おい龍導…?」

「はい、なんでしょうか?」

「もしかしなくとも…こつて」

式場ですね

「バイクで来る必要は?」

突撃するつもりだつたから問題ないね!!（嘘）

「という訳でしつかり捕まつてろよ赤龍帝!!飛ばすぞ!!」

「絶対嘘だあああああ

「し、侵入者発見!!」

と後ろで色々聞こえるけど今はスルーしよう。

そしてこうなつたら当たつて碎けよう!!

「どかない人はどんどん引くのでバイクの餌食になりたくないならどうぞ
いてくださいーーーー!!」

廊下を突っ切り、階段をバイクで駆け上がりしていくさらに廊下が続
いているがその先ガヤガヤでアカアカしたデカい扉発見!!（今まで
の倍位の衛兵も目視）

「赤龍帝!!そろそろ着くぞ!!衛兵轢く為に飛び降りるから身構えろ
!!」

「と、飛び降りる!?」

「大丈夫、僕が安全に下ろすから身構える事だけに集中してくれ!!」

すると切れたような顔の衛兵が僕達を見て叫んだ!!

「そこの奴ら止まれ!!止まらぬかあ!!!」

「止まれと言われて止まるバカはいねえ!!（いません!!）」

向こうが叫ぶならこつちも叫ばなきやね（?）

叫びながら兵藤君の首ネツコを掴んでバイクから緊急脱出した。

まあ、当たり前だけど案の定運転手がないバイクはスピードを出

したまま横に倒れ衛兵を薙ぎ倒して扉まで当たつて轟音をたてた。

そのおかげで煙が発生したが煙が晴れたと同時に友人は叫んだ。

「部長オオオオオオツツ!!」

「イッセー!!」

Life 6 真つ正面から

カズマ side

兵藤君の呼び掛け（と言う名の叫び）にグレモリーさんが気づいて名前を呼ぶがそれと同時に式場？会場？内の悪魔の注目がこちらに集まる。

だがそれよりも問題なのは仮面（認識阻害＋ボイスチェンジャー付き）を付けた僕がサー・ゼクス様に即バレしてしまった事だ!!何故そんなに確信を持てるかだつて？だつてあの人一瞬だつたが口パクで『やあカズマくん』って言つたんですよ!!こつわ!!バケモノ呼ばわりされてる僕でもビビるわ!!

と内心バツクバクにビビつているとグレモリーさんの隣に立つていた金髪の胸元をバツクリと開いた白い服装しての男がが口を開いた。

「貴様!!ここを何処だと…」

「俺は駒王学園オカルト研究部の兵藤一誠!!部長、リアス・グレモリー様の処女は俺のもんだ!!!」

「なっ!?」

金髪が怒りが混じつた驚きの声をあげるがまだ終わりじやありませんよ!!

「そして、僕は赤龍帝の付き添いで同じくリアス・グレモリー様を取り返しに来た《龍人》だ!!娘の為とか言つてゲームで娘の将来を決める親がいるらしいのでその後尊顔を拝みにきました!!」

当然仮面のお陰で声も変わつてゐる為安心して普通に名乗る事が出来ます。そしてついで煽る。

「呑気に自己紹介してんじゃねえ!!衛兵共コイツらを捕まえろ」

とか考えていましたら焼き鳥が何かほざいたせいで衛兵がまた全方位ほぼ埋めるようにコチラに詰め寄つて来てます。

そして先程思いつきり当たつた扉の方からも大量の衛兵が来てるのが見えました

ううん、思ったより来るの早いな…仕方ないけどこれが一番いいか

な？兵藤君の近くには木場君や塔城さんや姫島さん達がいるから大丈夫だね!!

「赤龍帝!!こつちは僕が抑えるからそつちは自力で頑張つてください!!」

「ああ、親友ありがとよ!!」

その言葉が聞こえたなら後は向こうに向かうがその前に

「リアス・グレモリー!!」

「…何？」

「今度こそ赤龍帝を最後まで信じるんだな!!」

「…………ツツ!!」

そう言い放ち僕は、扉の外まで出て扉を閉めた。

そこに一足遅く衛兵達が到着する。

「どけ!! 小僧!!」

「侵入者発見!! 侵入者発見!! 排除する!!」

「目標を捕縛する!!」

「やれるもんなら、やってみろ雑兵共!! 来い!! 神器!!!」

僕にやる事は決まってる！出来るだけ粘り出来るだけ時間を稼ぐ事だ!!

煽りながらさつきバイクで突っ込んだ時に気絶させた衛兵の装備を碎き神器を装備する!!

また、力を貸してもらうぞ神器!!

「ふざけんな餓鬼イ!!」

「トロイね!! トロすぎてアクビが出ますよ!!」

「ガツツ」「グアツ」

蹴りを雑兵その1の顔面に入れ、そのまま雑兵その2にカカト落とし!!

「邪魔すんなやあ」

「あんたがなあ!!」

「ボホオツ」

その次に雑兵その3の槍を折り顎にアツパー!!
「ハア！」

「ダア!!」

「ギイツ」

その4の槍の月を交わして土手つ腹に拳を叩き込む

「（）で止める！」

「ここのセリフだ！」

その56789
】（人が一斉に飛びかかる）
てくる

卷之三

そしてこの神器の両腕で先程の6人こ拳のラツシユ

「クソ!! 誰かアイツ捕らえろ!! 誰でもいい!!

「今度こそ同時に畳み掛けて捕らえろ!!」

ツ！キリがない!!この城の中にどんだけ衛兵がいるんですかツ!!

それに兵藤君達が早くグレモリーさんを奪取しないとこっちも持

だな
いわ！

別に坂口の衛兵まで倒してしまってもいいが！

「ま、まう?」可

「今更怖氣付けても許せん捕博ぞ！」

「いやそのつもりは無いし、捕まりもしない

いや、残念ですけどここで捕縛される気は

だつて今からする攻撃は死にはしないけどかなり痛いですから

Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!

B
C
C
S
t
!
B
C
C
S
t
!

何が！奴の脇の毛が光るしかぞ！」

「遅せえ!! 真っ正面からぶつ飛ばす!!」

肩から手まである神器『黄金に輝きし龍の宝腕』の両腕を前に突き

出し衛兵集団の真ん中に来た人に撃ち込む!!!

これが僕の最高威力!!

「必殺!!叫ぶ一撃!!!」

「グアツ」「な、ヤメツ」「ナンナンダア」

すげー（小並感）

久しぶりに使つたけどやっぱ疲労感というか一撃だけで発生する疲労がデかい、デカすぎる…

そして説明しよう！叫ぶ一撃とは！B o o s t の限界8回の状態で両腕で相手を殴る技で共振が発生しそこから衝撃へと変換される技である！尚、必殺技とは名ばかりで殺傷力は（多分）そこまでない（何ならここまで変な説明しといてあれだが要はただの強力な一撃である）。ちなみに今回みたいな集団や大人数に対しても衝撃が行き渡る為にかなり使える技なのだ!!ハイ説明終了!!

これで衛兵はほぼ片付いたかな？

「はあ、これでひと段落つい」

「まさかここまで出来るのは思いませんでした」

「え!？」

声がした方に振り返るとグレイフィアさんが悠々と立っていた：

「まさか魔王様の女王様も僕を捕獲しに来たのですか？」

「そんな冗談が言えるようならまだ余裕ありますね」

「いや無いですけどね…それで本当は何用で？」

「もしよろしければライザーリー様と一緒に観戦しないかい？」そして、ピンチに陥つて

「ゼクス様から『一緒に観戦しないかい？』

ようなら助けてやつてくれと言わされました

「ピンチではないですね…ああ…なるほどつまり『兵藤君が勝つところと一緒に観よう』つてお誘いですね？」

「…まだ一誠様が勝つと決まつたわけじゃないですよ？」

「勝ちますよ…僕の親友は…」

だから今日は帰りますもう眠いですし!!それにこれ以上ここにいて面倒事に発展しても嫌だし（何なら既に魔王様からの呼び出しどう名の面倒事発生してる）

「サーゼクス様のお誘いを断ると?」

「言い方からして強制力は無いんですね？だつたら帰らせてもらいます。それにどつかの厨二病のせいで2週間の仕事してきてて更にこれですかね？流石に疲れてるんで…」

「分かりました…それではまた」

「ええ、また次の機会がありましたらお礼も兼ねてこちらから伺います」

そう言つて僕はアザゼル印の魔法陣を起動させる

Life 7 1週間後なので後日談（とは言つてない）

「あんたつて奴は!!」

「すいません…」

はい…どうも…龍導カズマです…

現在進行形で黒歌に説教されています。

「大体あんたねえ…アザゼルからの仕事はまだいいとしてその後にまだ暴れに行くとか…馬鹿じやないの!!」

「返す言葉もないです…」

「通り怒つて疲れたのかため息をつく黒歌さん…いやほんとすいません」

「すいません」

「もういいわよ無事なら…それよりホントになんで悪魔の貴族それも大勢が集まるような所に行つてきてこの位で済んだのおかしいんだけどねー」

この位でつて言つてるけど

「実際現在風邪ぶり返して全身筋肉痛で頭痛あつて全く身動き取れないんですけどネ…」

そう現在進行形でこの間の能力乱用時よりデメリットがデカくて現在学校休んで布団に入つた状態で黒歌さんに看病されながら説教受けてました。

「とりあえずアンタは暫く安静にして寝るにや!!それと神器で無茶するのも禁止にや!!」

「えつ」

「『えつ』じゃないにや!!アンタはもうちよい自分を大切するにや!!」

「すいません…」

「すいませんはもういいから早く寝て体調治さないとオーフィスに心配されるわよ」
「寝ます!!」

そうやつて叫んだ後に僕は枕に頭つけて寝ようとするとき雨音が聞こえた

カズマ side out

黒歌 side

「寝たか…」

私、黒歌は同居人の龍導カズマを現在、看病をしていた。
：自分で考えてても少し可笑しいと思う

実の妹である白音ならまだしも実の家族ではない年下の男の看病をするなんて

「そりゃあ今日は雨か…」

あれは数年前の出来事だつた
いつものようにはぐれ悪魔を狩る悪魔や神器所有者たちの追つて
から逃れている日だつた

あの日も今日のように雨が降つていた。

その日はたまたま、ドジを踏み傷を負つてしまつていた私は近くの
公園で黒のノラに化けて休んでいた

が次に目を覚ました時は見知らぬ家にいた：

最初は何が起こったのか分からなかつた。

もう一度周囲は見回すと私の体に所々傷の処置が見受けられた。
そして近くでは若い夫婦？が楽しげに会話をしていた。

その夫婦は私が目覚めた事に気づくと凄く喜んでたのを見て：
『ああこれはノラだと思われて治療されたのだ』と気づいた。

それが大門夫婦との出会いだつた

大門夫婦はこちらに対して話しかけて来ていた内容としては
『ノラの私を飼い猫としては引き取るという』とか『今日から君は僕達
家族の一員だ』という内容だつた。

私は家族の一員とかは内容はどうでもよく『こいつらは所謂お人好
しなのだろう』と推測し『それなら暫く隠れみのにでもさせてもらお
うかな』と思考を終わらせると誰かがこの部屋に入ってきた。
それが大門雄護との出会いだつた

ハツキリ言つて最初はあまり彼の事が好きではなかつた。

彼の私を見る目は非常にいやらしいのだ。

勿論、元の姿にはなつてないので猫を容赦なくモフるような目なのだ。

だからこそ最初は彼が手を伸ばしてくる度に手を爪で引っ搔いた。がある日の事だつたいつものようにこちらに近づいて来るので手を伸ばすより先にまた爪で引っ搔こうとした……が実際に私の爪は彼の手を引っ搔くことはなかつた。

私の手は彼の黄金の手によつて受け止められたのだ。
一瞬だつたが私は確かに見た。

私達の近くのペットボトルが壊れ：いや、分解されその次の瞬間に彼の手が黄金色の獣の様な手になつたのを。

だが私は驚いたと同時に『しくつた！』という考えが出た。

当然だ、元々この家に来るまでは『はぐれ悪魔』として追われている身だつたのだ。

だから直ぐに手を突き放し警戒しようとしたがその前に雄護が私の手を離して神器も解除し、一言『……めん』とだけ言い残し自身の部屋へと帰つて行つたのだ。

それで私はただの思い過ごしだと気づいた。

そりやそうだ確かに神器所有者は珍しいが一般人の、それも一般家庭にも神器所有者は産まれるのだ。

だからこそ自室であいつが落ち込み泣いているのを見て演技じゃなくホントにただの神器所有者なだけの子供だと気づいた時は『悪い事をした』と思つた。

そしてあまりにその落ち込む姿があの子にダブつてしまいつつい慰めてしまつた。

それからちよくちよく私を撫でるようになつたけど私も私で『まあいいか』と思うようになつていた。

『今日は朱乃姉ちゃんと遊んだ！』とか『シェルブリットの使い方が少しだけ上手くなつた！』とかとその日あつた事を話すようになつた。

何故ここまで懐かれてるのかは正直私も分からなかつた。

それでもそんな話を聞いてて楽しく思う自分がいた。

そんなこんなで半年以上はゆうに過ぎて私はちよくちよくこの家を開けて白音を探していた

その日もいつも通り3日間出ていき、また3日したら戻つてくるつもりだつた。

私を待ち受けていたのは空の家だつた。

いつも通り、いつも通りの3人がいるはずだつた。

なんで何もないの？なんで3人がいないの？

分からぬ分からぬ分からぬ分からぬ分からぬ分からぬ？なんで

？

人に化け耳と尻尾を隠し近所の人へ聞いた。

『ここにこの前まで住んでた大門一家が何処に行つたか知りませんか？』と

すると聞いた人達が全員が全員、誰に聞こうと口裏を合わせてるかのようになつていて

『あそここの家にはもう何年も人は越してきてないですよ？』と

そしてそう答える人の目は答える時だけ虚ろになつていて

どう考へても悪魔が何かしたのだ。

そして悪魔がこの家に私がいないのに手を出すとしても一つだけだが可能性が浮かび上がつた。

あの子だ。

あの子の神器は私が知る限りでは籠手やガントレット型では見た事のない新種の神器だつた。

そしてあの子はずつとあの神器の練習をしていたはずだ。

つまりそれが何処からかバレて悪魔に殺された可能性が？

じやないとあの子だけならまだしも何故大門夫婦の存在を周りから消す必要があるのだろうか？

だからどう考へても…何度考へても…大門一家はもう…

にやはは…今更だけど私は結構この家が気に入つてたみたいだ…

猫扱いではあつたがあの夫婦は私が知つてゐる両親よりずつと両親

らしくずっと本物家族らしくも思えた。
もちろんそれは彼もだ。

そんな事を考えてもう何年も経つた。

この日は初めて彼に拾われた前の日と同じように敵に追われてた。

今度は禍の団の魔王派の一部の過激派に追われていた。

理由としては『穢らわしいはぐれ悪魔如きが組織に居るな、というより要らん』簡潔に言うなら『気に入らねえからぶつ殺す』との事らしい。物騒過ぎてしかも清々し過ぎていっそ笑えてくるにや。

魔王派は前からヤベー奴らと思つてたけどまさかここまでやばいとは思つてなかつたにや

そんな事を考へてる内に公園まで追い込まれてしまつていた。

久々にしくじつたと思った。

それでも何とかして逃げようとした…が

流石に数が多いそしてキリもない

『どうすれば!!』

とその瞬間一斉に襲いかかつてくる…………筈だった。

その前の一瞬見えた人影が私を囲いこんでいた奴らを殴り飛ばしたのだ。

『あの、大丈夫ですか?』

その人影に最初は警戒したが既に人影…人物は私の後ろから聞こえてきた声を聞いて私は耳を疑つた。

振り返るとそこには残念な色をした髪金髪と黒髪の青年が立つっていた

だが分かるその顔はその声はその髪型は

『僕の名前は龍導カズマです。えつとあなたは?』

それが彼との再会だつた。

そのあとは何やかんやアレアレコレコレ○○なになにがあつてトントン拍子でまた彼の家に住み着くことになった。

だから…今度は…今度こそは絶対に
私が白音も彼も守つてみせる

番外編 現時点での主人公の詳細

大門雄護／龍導カズマ
だいもんゆうご／りゅうどう カズマ

年齢：17歳

能力：アルター能力+「調整&加工」

趣味・特技：無し

好きな物：友人、仲間、家族（仮）

嫌いな物：戦闘狂

憧れ：エルブリットのカズマ等のアルター能力者

本作品の主人公、本人は転生者と思っているが実際のところは分かつてない。

前世？の記憶を取り戻して直ぐは大門家の子として生活していたがリゼヴィムの襲来により大門夫婦は殺害されてしまう。

外見の容姿としては黒髪の黒目で少しあどけなさが残っている青年の風貌（尚、「スクライド」のカズマからはどこをどう見ても似てい）。

現在は上記の事件のショックにより記憶を失ってしまい「龍導カズマ」を名乗っている。（尚、現在名乗っている「龍導」という名字はアザゼルが名付けたものであり「龍のように強く仲間を導ける存在になれるようになれ」という意味で付けられたもの）

外見上の違いとしてはアザゼルを真似て髪を金髪にしてるくらい記憶喪失となつた後アザゼルに引き取られ今は駒王学園高等部に所属しており家では基本的にオーフィス、カズマ、黒歌の三人で生活している

性格は友人や仲間、家族（と思つている）者に対しては優しく接するが他人には余り興味を持たがらない。

そのくせ本人は明確に友人と思つているのはイッセーや松田と元浜しかおらず、家族に関しては実の家族はおらずその為に家族というのを知りたいと思つている（その為に現在、自宅にオーフィスと黒歌を匿つている）自分を拾つてくれたアザゼルには父親に抱くような感情や感謝を感じている。

グレゴリから依頼を受ける為アザゼルからは「特例墮天使」という措置を貰つたりするが、人間の為にグリゴリ内の墮天使からは「特例」や「無翼」という通称で通つていて、実力的にはギリギリであるがグレモリー眷属全員を相手取つて勝てる位には強い。

グレゴリ内では地獄のような特訓をした為に上記の実力まで入手したが墮天使幹部には模擬戦で勝利した事は一度も無い（尚、中級の下や下級の墮天使には素の力で勝てる）。

アルター能力について

「大門雄護」の主な能力である

物体を分解、再構成を行うことで別の物へと作り替えることができる。

分解は基本的には生物以外なら全て分解できる。

アルター能力自体は「スクライド」本編に出てきたアルターを全て使う事ができるが、出力自体は本物のアルター使い達よりも弱い。

アルターによつては制限が付いていたりする（例：無常矜侍のアルター能力である「^{アブソーブション}吸収」をカズマが使うと吸える量は少なくしかも今はまだ体力だけしか吸収する事が出来ない）。

また「向こう側」への扉等を開いていないのと実力不足の為にシエルブリット等は第2形態に変化する事が出来なかつた。

その為にシエルブリット改（シエルブリット第1形態+絶影の列迅）とシエルブリット擬という「スクライド」には出てこなかつたオリジナルを編み出す。

また、現在は記憶を失つてアルターを神器だと思っている為に「黄金に輝きし龍の宝腕」という神器として扱つてている（これに関係してはアルター能力が精神に関係してゐるのもあつてほぼ完全にと言つていゝ程変質してしまつてゐるため）。

シエルブリット 改^{あらため}

シエルブリット改でようやく「スクライド」のカズマが使つていたシエルブリット第1形態と同じ出力と威力が出せるようになつてゐる。

尚、絶影の列迅を取り付けているため列迅を使い相手を拘束する事もできる。

必殺技は「レールガンショット」

相手を列迅で拘束してシエルブリットの赤羽3枚を全て碎いてその時発生する勢いに身を任せ真っ直ぐ相手に拳を叩き込む技。

シエルブリット擬^ギ

シエルブリットを素早く出現＆装備をコンセプトとして編み出した形態（言い方としては1件よく考えられてるようにも見えるが実際は偶然の產物）。

見た目としてはシエルブリット第1形態が拳から肘までしかないような感じで、上記内容の開発コンセプトもあって通常出力はシエルブリット第1形態の2分の1程しかなく背中にも第1形態時に出現する赤い3枚の羽がない。

「^ゴ^{ルド}^{クリ}^{ティ}^{カル}[・]^{ジュー}^{ール}黄金に輝きし龍の宝腕」

内容としてはシエルブリット第1形態の下位互換である（かと言つて「シエルブリット擬」よりも出力が出ていない）

形もかなり変わつていていたりする（最初はシエルブリット擬と同じく手から肘までしかないし外見は通常の龍の手に近かつた、イッセーに初めて見られた時は既に手から肘までに宝玉が3つずつそして肩に1つずつと両腕を鎧のように囲んだ剛腕形態へと進化している）
他には物体を分解する能力と回復と「復元」が使える（分解はアルターの基本で回復はシエルブリットに埋め込まれた状態でエタニティエイトが出現しておりエタニティエイトによる回復とエタニティに混ざつてエターナルデボーテによる蘇生）

尚これら的能力を1つでも使えば体中に大きな負担が掛かる（例：吐き気、頭痛、体中を刺すような痛み、などetc）。

しかも蘇生に関しては無理矢理力を引き出しているような物などで体にドンドン疲労が貯まつていつている。

関連人物

アザゼル

実の父のようを感じている反面、厄介な厨二病の精神子供とも思つ

ている。

オーフイス

ある日偶々家の近くにいた所を保護。

禍の団の首領にしてボスだが最近は禍の団に赴く時以外はカズマの自宅に入り浸っている。

カズマ自身はオーフイスの事を妹のように扱っている。

黒歌

オーフイスより少し前からカズマの家にいる奴。

日頃からダラダラしていると思えばいつの間にか家から出て行つていたりと行動が掴めないが、カズマがケガをしたり体調を崩したりすると怒つたり心配したりしてくれる。

その為カズマは黒歌に対しては母親か姉に近しい感情を抱いている。

戦闘狂ヴァーリ

黒歌の仲間

「なるほど…君がアザゼルが俺以外に直々に育てている神器使いか…どうだい？ここはひとつ俺と手合わせしてみないかい？」

といい初対面でいきなり勝負仕掛けた挙句

「なんだこの程度か…つまらんな…」

と言つてボコされてさつさとどつか行つた為にカズマの戦闘狂嫌いの原因を作つた奴。

その為余りヴァーリに対してはいい感情を抱いていない。

兵藤一誠

最初は何となくで行つてみたかつた学校で初めて出来た友人であり変態。

彼に対してもカズマは「自分が気づけなかつた為に彼は殺された」と思いイッセーが転生悪魔になつたのには割と重く受け止めている。

リアス・グレモリー

調べて見ても余りいい噂を聞かない人。

イッセーを転生悪魔にした張本人。

イッセーを助けてくれたことには感謝しているがそもそもイッ

セーが「赤龍帝の籠手」を持つていなかつたら何もしなかつたかもしないと
りたいと思いカズマからしたらあまり評価は良くない。

そもそも堕天使が町に入つたことも気づけていないのは（人間？の
カズマならまだしも）悪魔としてどうなん？

木場祐斗

イケメンナイト

直接の面識はない、ほほない。

兵藤君がいつも目の敵にしてるなーぐらいにしか知らない。

塔城小猫

学園のマスコットというのは知っているしなんなら毎回女子更衣室等の覗きをして捕まりかけの友人三人の変わりカズマがD O ☆ G E ☆ Z A している相手。

小猫は「懐かしい匂いのする人」という認識で覚えられている。

姫島朱乃

大門雄護の時にできた友達。

カズマとしては学園二大お姉様として学園内で知られてるとい
う事実は知っているが直接の面識は無し。

だがカズマも朱乃も「何かが引っかかるってはいる」

アーシア・アルジエント

話して見たらめっちゃいい子じやん！（カズマ談）

松田・元浜

イツセーと同じく初めての友人。

毎度毎度工口談義をされるがカズマはついていけない。
リゼヴィム

殺害目標

それ以外の何者でもない By 大門雄護

大門夫婦

この世界での両親。

いつも優しく接してくれて頼りになる人達だつた…多分自分の正
体を知つてしまつても今まで通り接してくれたかもしれない…ただ
その考えが現実になる日は来なかつた。

ただし、謎は残る。

WARNING WARNING WARNING WARNING
G WARNING WARNING WARNING WARNING
ING WARNING

この先はこの作品自体の根幹に関わる主人公の正体のネタバレ（この内容が本編で明かされるはD×D原作12巻の内容辺り）があります。
ネタバレが見たくない方はブラウザバツクを強く推奨します。

本当によろしいんですね？

主人公の正体

纏 雄護

年齢：正確な年齢は不明（本編開始前で推定でも軽く百年以上は生きている）

能力：生命戦維による e t s

趣味：アニメ、漫画等の鑑賞

好きな物：家族、仲間

嫌いな物：上記の内容を奪おうとする全ての者、

憧れ：シェルブリットのカズマや「カツコイイ者」

鬼龍院家に生まれた長男で、母に鬼龍院羅暁、父は纏一身（鬼龍院装一郎）姉弟に鬼龍院皐月と双子の姉である纏流子を持つ（所謂一番下の子である）。

尚、重度のシスコン

元の世界から生命戦維を全て回収する為に次元世界を渡っていたのだが当時制御すらできていない生命戦維に寄生されたりゼヴィムからの攻撃により瀕死の重傷となる（なんなら右腕の手だけをむしり取られたりもした）。

その後リゼヴィムにバレないように体を幼児サイズまで変えた後に気絶していた所を大門夫婦に拾われる。

なので大門夫婦には最初から正体を明かしているしその上で記憶を封印＆偽装して匿つて貰つていた。

能力：生命戦維

体内に生命戦維がある為、身体能力がかなり向上されている。

キルラキルOVA後状態では既に素の状態の流子より少し強い位で、その後も様々な次元世界を渡つては生命戦維を回収しては吸収を繰り返していた為、既にD×Dの世界に来る前から強さのレベル的には上級悪魔の下位クラスに匹敵もしくは圧倒するレベルではあつた。

アルター能力：「記憶の物語」マイメモリ・オブ・ストーリー

アニメスクライドのアルター能力を全て使える他形状変化に威力の増強などもできる。

又、一度覚えた「物」なら再現可能である。

ただし、精密であれば精密であるほど巨大であれば巨大である程アルター使用による体力と精神力の消費は増える。

因みにアルター能力者になつた理由は、かつてある街で暴れていた転生者を名乗るものと戦闘となり倒した後にその転生者から無限の吸収能力を駆使しアルター因子を吸収した（※アルター粒子ではなくアルター因子）。

尚、吸収した直後はかなり「アルター因子」と「生命戦維」との相性が悪かったのもあり1年間体中から発生する痛みに苛まれてまともに動けていなかつた。

ちなみにこの世界でもスクライドは放送された。

アルター因子について

アルター因子は神様転生の転生者が本来所有していた因子で後に雄護が転生者から奪い取つた物。内容としては体内に所有しているだけで「本人の性質に依存したアルターを生み出す」と言うもの。

その為、雄護が因子を吸収したあと因子そのものの本質の「侵食による破壊」と生命戦維の「侵食による再生」がぶつかり合うことで変質し上記のアルター能力が使えるようになつた。

「無限の吸収能力」

正確な名称はない、その名の通りなんて事はない能力（んなわけ）。

この能力は幼い頃に纏一身が双子の姉の流子とその弟である雄護

のDNAに植え付けた能力で、能力発動条件が「相手の体内にある生命戦維の吸収」もしくは「相手の肉体の一部を取り込む」のどちらかを行うことで相手の能力を一方的に文字道理「吸収」して自らの物、又は自らの進化の糧にする事ができる。

所持品：断ち切りバサミ（紛失）

双子の姉である纏流子がかつて使っていた対生命戦維の武装。元の世界から旅立つ時に本能寺学園跡地である海の底に沈んでいたものをわざわざ掘り出して来たのだがリゼヴィムにやられた時に手放してしまい紛失している。

所持品V01・2：刻刀（試作生命戦維切断機1号：黒刀）

断ち切りバサミの元になつたいわば試作品である。

生命戦維を斬ると言うコンセプトは同じであるがこちらは2振りの刀である。

ついでに言うならばこれは通常の鋼を使用している為、硬化生命戦維製の断ち切りバサミや縛斬と違いつ限界が来るかは分からぬ。雄護のアルター以外での主力装備尚、現在は……？

第2節 堕天校庭のエクスカリバー篇

Life 1 イキつてるアホ（主に主人公）

どうしてこうなった!?

なんだ!?何故こんな事になつてんだ!?
思い出そう…朝からそう朝から思い出そう

アザゼルが早朝から電話をかけてきた

「コカビエルが教会からエクスカリバー盗んでバツクれた」

「は?」

「あと駒王町に逃げ込んだから捕まえといで」

「は??」

「じゃあよろしく」

←

「あ????」

と言つて電話を切られたので学校には休みを伝えて朝から駒王町中を捜索したが見つけられず。

その前にオカルト研究部にこのこと報告しないといけないな。と思ひ旧校舎に直行したが何やら兵藤君と木場祐斗が2人組の黒タイツの女子と決闘みたいな事してる…?
よく見るとあれ協会の戦士かな?

いや協会の戦士だね…………何で?

あ、兵藤君が洋服破壊して搭城さんに殴られた。
まあいいや

僕は終わるのを見計らつてから出て行つた。

「やあ兵藤君」

「り、龍導」

「ん？誰だ君は？」

僕が兵藤君に軽く挨拶したら青髪に緑のメッシユを入れた剣士が反応した。

「ああ、お初にお目にかかる。『俺』の名前は龍導カズマ、そしてただの神器所有者だ」

…………？今おかしくなかつたか？

「えつとそれであなた達は？」

「ああ、龍導そいつらは」

「いや、いいさ赤龍帝自己紹介は自分でするよ」

「私の名は紫藤イリナ!! 協会の戦士よ」

「私の名はゼノヴィア、イリナと同じく協会の戦士だ」

「はあ～？協会の戦士が何でまたエクスカリバーなんかを持ち出して？」

「分かるのかい？」

「そんな並の聖剣じゃ出せないような聖なる波動を纏つた剣が2本もあるって事は多分エクスカリバー位だろうなあつて事位は嘘だけどな。昔グリゴリの資料で見たから覚えただけだ。

「なるほど」

「ねえゼノヴィア～もう自己紹介も終わつたし行かない？」

「待て栗頭」

「栗あ…!？」

栗頭と言われショックを受けたのかその場で固まる協会戦士1号

「まだ何か？」

あ、青髪はお構い無しか

「理由を聞いてないぞ。何でそんな物騒な物をここに持つてきてるのかを」

「ああ、そんなことか」

「それはね」

あ、栗頭が復活した

『神の子を見張る者』つて言う墮天使の組織のワツルーイ幹部のコカビエルって奴が協会からエクスカリバーを盗んだからよ』

「ああ、それを奪還しコカビエルを倒す又は捕縛をする事が私たちの任務だ」

はあ～んなるほど協会も随分コカビエルさんを舐めてかかってるんだなこの程度の奴らをよこすなんて

「それは私たちに対する挑発か？」

やば声に出てたか

「そうだと言つたら？」

「ここで肅清するぶつた斬る」

そう言いながら2人がかりで斬りかかって来る

ホワンホワンホワーン回想終了!!

そして今に至ると…なるほど!!全面的に僕が悪いねこれは!!

そう考え事をしてる『俺』に向かつて走り出す青髪と栗頭

「物騒だなおい!!大体、アンタら如きじやコカビエルどころか『俺』にすら勝てねえよ!!

「アーメン!!」

野郎頭ねえのか!?

「フンッ!!」

「グボオア」

「あ」

吹つ飛んだアアアアアア綺麗に溝内に入つたアアアア!!

あ、アルエエエエエ!?神器なしの純粹な拳で吹つ飛んだぞあの栗イ

!?

「す、すまん」

「い、いや忠告痛み入るよそれじや!!」

あ、ゼノヴィアつて奴は力量の差がわかつたのか素早く逃げ「い、イリナ～」と言いもう1人を回収しに行つた。

「り、龍導?」

あ、兵藤君が人じやないものを見るような目でこちらを見てる!!ヤメロオ!!

「えつと報告遅れています。先程の人達が言つた通りコカビエルさんがエクスカリバー盗んでバツクれました」

「はあ、それで?」

リアス・グレモリーさんから同情の視線受けてる!!だからヤメロオ!!

「コカビエルの捕縛命令が出まして、くれぐれもこれがグリゴリ全体の意思じゃない事をお伝えしたく参りました」

そう言い僕はD O ☆ G E ☆ Z Aをした。

顔面は地面にすりついて上を見れないが僕には分かる…哀れみの視線を向けられてる……グレモリー眷属全員（約1名を除き）から

……………ヤメテエ!!

Life 2 急ぐ捜索

前回のあらすじ

兵藤君の幼馴染を名乗る栗頭ツインテールにイラついたので腹パンしてしまった!!以上!!

何を言つてゐのか分からんかもしけんが僕も分からん!!
「龍導はどこに向けて話しかけてるんだ…?」

「さあ…?」

あ、兵藤君とアルジェントさんが訳の分からぬ物を見る目でコチラを見てるだからヤメロオヨオ!!

「な、何でもないよ。所で兵藤君ケガはないのかい?」

「え?」

「いや何かさつきのあの二人の感じだとまるで兵藤君と誰かが闘つたみたい的な感じだつたからね」

「いや闘つたのは確かに俺だけど」

『何でそんな事まで分かるんだ?』と言いたげな顔で首を傾げる兵藤君

「君の服が剣か何かに斬られたようなあとがあるからだよ」

「な、なるほど。あ、でもケガならさつきアーシアに治して貰つたら大丈夫だ!」

「そつかならいいや

背伸びしながら来た道を戻るか。今日はもう少し探してそれまだ見つからないなら明日も捜索だ。

「龍導もう帰んのか?」

んえ?

「いや? そうだけど? そもそもここに来た理由はコカビエルさんが工クスカリバー」とバツクれた報告をしに来ただけだし

「あら? 他に言うことはあるんじゃないの?」

とグレモリーさん……何だかんだ言つて前の糞鳥騒動以来から少しは態度が柔らかくなつた気がする。

これも兵藤君と同棲してお陰だろうか? だつたら兵藤君様々だ

ね。

「ないつすよ！多分さつきの2人組の剣士が言つてると思ひますけど『墮天使に手を貸すなよ』つて忠告をしてませんでした？だから今日は僕一人で何とかしなきやなんないですよ…」

「1人つてあの2人は？」

「論外ですよ!!アンタらはまだコカビエルさんを警戒してるけどアイツらは死んでも倒すとか言つてましたね？でもぶつちやけあの二人はさつきの通り相手との力量が分かつてない……その隙ができるて殺されるでしよう…」

「そ、そんな!?何とかなんねえのか!!龍導!!」

兵藤君が俺に急いで聞いてくる。

そつか確かさつきの栗ツイインテールは兵藤君の幼馴染なんだっけ？

「兵藤君…今回アイツらが死にそうで手が出せそうなら最低限僕も助けるけど忘れないで欲しい：君の幼馴染は天界＝協会側で君は悪魔で僕は一応曲がりなりにも墮天使側に席を置いてるんだそもそも今回は助けるギリはほぼないと言つていいレベルだ」

「でもアーシアの時は」

「アルジエントさんの時は状況が状況だつたからだよ…レイナーレ？だつたけ？あいつがアルジエントさんを1度殺害したって言うのもあつたしちよつと酷い言い方しちやうけどあの時既にアルジエントさんは協会を追放された後だつたでしょ？だからあの時は助けられたんだ」

「そうか…」

「一応の納得はしてくれたかな？…すまんけどあんな人を助けたくないって理由もあんだけどね…」

「そう…ごめんなさいね…力になれなくて」

「あ、こういう事件じやないなら手を貸してくれるつもりだつたんだ!?少しどころかだいぶ丸くなつてた!？」

「誰だおめー!?」

「聞こえてるわよ!?」

「ハハッ!!冗談はここまでにして搜索再開しますか!!」

走り出すと同時に左腕に巻いてる細長いリングに触れるそれと一緒に背中から金属製の翼が出現する。それと同時に僕は空へと勢い良く飛び出した。

「なんだそれく!?」

と地上で聞こえたけどスルーだ。

ちなこれは『鋼輪メタリングウイング』って言う装置で、こないだの10日…?位だつたか以上だつたかは忘れたけど任務の時の報酬でアザゼルから貰つたもんだ!!相変わらずダセエ名前!!

このリングは腕に装着してる人がリングに触れることで作動し背中に金属製の翼を出現させ飛ぶことができるのだ!!(説明終わり!!)そんなこんなで搜索を再開したがやはり見つけ出せず。

ううん黒歌さんに使い魔を借りるか?

あの黒子猫なら搜索できるよな?

取り敢えず本日はもう寝る……眠い

そんな事を考え帰宅しすぐ寝床に入つた…

夕焼けの中…リビングに黒い…赤黒い液体がそこら中の床に広がり肉片が飛び散つて…

俺を『赫い瞳』で見下ろし『ケタケタ』と嘲笑う白銀の髪と髭を持つジジイが目の前に立つており、その腕がブレた瞬間右腕を激しい痛みが襲う。

なんでなんでこんな事にどうして…………どうして!?

どうすれば良かつたんだよ!!

どうすれば…どうすれば…………

「悪夢かよ……最悪の目覚めだな…」

なんだアレ?コカビエルさんに対して今更恐怖してんのか?

「だとしても…だッ」

『俺』は負けられない：負ける訳にはいかないんだ…!!

「取り敢えず…飯食いますか」

あくびをしながらリビングに向かつた

その後朝飯も食い終わり黒歌さんに相談タイム

「という訳でかくかくしかじかで」

「にやゝるほどそゆ事なら私が直接探してやるにや」

「え？」

「でもここからじやじや無理だから私もついて行くにやゝ」

「いやアカンでしょ!!」

「なんでにや!?」

「妹さんにバレたくないんでしょ!?」

するとスマホにLONEのメールが来た

取り敢えず会話を一時中断しスマホのLINEを開く

「あ～」

LONEの画面を黒歌さんに見せた

「え～とにやににやに？『今日、協会の2人組にエクスカリバーを破壊の手伝いの申し込みをしてみるから龍導も手伝ってくれないか？ちなみに参加者は俺と小猫ちゃんと生徒会の匙だ』ってにやに!?」

「つて事だから」

「まさかホントにその作戦に乗つかるつもりにや!?」

「昨日『兵藤』にも言つたけど『俺』の立場上無理とは言つたけどな黒歌さん。矛盾してるけど一応堕天使所属の戦士兼フリーの依頼ハンターだから問題は無い!!」

「…………で、でもそんな子供みたいな言い訳が通るわけ」（依頼ハンターつてなんやねん）

「通すんだよ意地でも」（依頼ハンターじゃなくて何でも屋でした）
真剣な眼差しで黒歌さんを見る

「いざとなつたらちゃんと助けを求めますからだからここでオーフィスと待つてて下さい」

そこから1、2分の沈黙の後

「……………勝手にしろにゃ!!」

「ありがとう！」

そつと黒歌さんに向けて感謝の意を示し家を出た。

集合場所のファミレスへ向かう……………行くぞ!!自転車で

!!（糞鳥事件で無茶したのでバイクは今グリゴリで修理中）

Life 3 圧倒的な格の差

今回のあら寿司

フリー(の何でも屋)のフリーして利害関係による同盟に乗つかろう。

という訳で駒王町まで自転車できました!!

：いつもバイクで来てたからちよつと疲れました。

えーと指定されたファミレスは確かここら辺の筈…？

おつつファミレス発見！

そしてその扉の前に突っ立てるのは木場君じやーん

「おーい」

「？……龍導君かどうしたんだいこんな所で？」

「多分、君と同じ理由だよ…呼び出されたんだろう？兵藤君に」

「！！なるほどね」

「まあ立ち話してる場合でもないだろうし中入りましょうか？」

「それもそうだね」

そんな会話をしながらファミレスへ入った。

さて、兵藤君達は何処だ？あついた！

「おーい兵藤くーん」

「おつキタキタ」

と兵藤君は反応を返すがそれと同時に

「ああーーーー！」

と僕の顔を見て叫ぶ栗（以下略）が

「アナタは！私にはr「はーい人が多いところでは大きな声出しちゃダメですよ～？」むづび」

と何かを言い出す前に即座に口を塞いだ

こ、この人、今僕が口を塞がなかつたら確実に

「アナタは！私に腹パンした人！」

つて店内で叫んでたよね！ただでさえ常日頃から学園中の生徒（ほ

ぼ）に可哀想な目で見られてるのに!!

ここでも特殊な目で見られとうないわーい!!

そんな栗や僕、そして兵藤君達を見回してから

「それで？僕達になんのようだい？」

と会話を切り出した木場君だった。

（赤龍帝説明中）

「なるほど……話は分かつたよ」

「僕も大体は分かつた」

「ただ、エクスカリバー使いに破壊承認されるのは遺憾だけどね」

「随分な言い様じやないか先輩。君が『はぐれ』だったら、問答無用で切り捨ててるところだ」

なんなの？なんでこんな物騒なのこの人たち？Why？
特に木場君の殺意が一般ファミレス内で出していい量じやねえから!!

「おいおい！これから共同作戦なんだから仲良くしろとは言わないけどせめて2人ともいがみ合うのはよしてくれ！」

その言葉で青髪は「…それもそうだな」と言つて落ち着いたようだつた。

木場君も納得してはいないようだが喧嘩腰のようなものはやめてくれそうな感じだつた。

すると栗が

「やはり『聖剣計画』のこと恨みを持っているのね？エクスカリバーと教会に」

それに対し木場君が目を更に細め「当然だよ」と即答した。

『聖剣計画』？一体なんの事だ？

その後も栗ナと木場君+αの『聖剣計画』についてちょっととした小競り合いがあつたけどまあそれは省略しよう。

その後の話で分かつた事をまとめよう。

一つ、今回の計画の首謀者はコカビエルと『聖剣計画』の首謀者であつた元協会の神父であり『皆殺しの大司教』とも呼ばれているバルパー・ガリレイとオマケのフリード

二つ、木場君はその『聖剣計画』の犠牲者にて被害者にして生き残りらしい（その為にエクスカリバーや聖剣に憎悪を抱いている）

三つ、何の目的かは知らないがコイツらは聖剣エクスカリバーが砕けた後に造られた現七本のエクスカリバーを集めて何かをしようとしているという事

三つ目に関しては論外じゃないか!!何だよ何かって!?

そもそもあの人：コカビエルさんがアザゼルに対して反旗を翻すのが分からぬ確かに戦闘は出来ないけどこんな事よっぽどストレスでも溜まつてないと…………

『よーし!!でつかいロボットを作るぞおお!!』

『じゃあな俺は休むわ!!』

あるわストレス…アザゼルがやつぱり悪いじゃないですか…

今回完全に上司の尻拭いじゃないですか？普通逆では？部下の尻拭いを上司がするのは分かる2000歩譲つて同期の尻拭いするとかもまあ分かる…が!!なんで僕がアザゼルの尻拭いしなきやならんのおおおお!?

決めた次の依頼は重要案件じゃない限り蹴つてやる!!

オーフィスとダラダラして学園生活も満喫するんだモーン!!
で、

話し合いが終わつた後に匙元士郎がヤバい発言したので協会戦士組の食事代をさつさと払つて木場君と塔城さんを連れて早急にファミレスからだ。

匙元士郎の発言に続き兵藤君もヤバい発言した為に周りのお客さんが白い目で見てた。

うん、知つてた！そんな気がしてたから急いで出てきたんだもん！

そしてその光景を一部始終見てた塔城さんはただ一言…：

「イッセー先輩と匙先輩…………最低です」

でしょうね!!

そんなこんなでエクスカリバー破壊団結成されました!!

それからというものエクスカリバーを所持しているフリードの標

のが現在は神父ということで神父服で町を捜索するも見つからず。

初日から既に数日経過!!

放課後に僕、兵藤君、塔城さん、木場君、匙元士郎に協会戦士組で捜索するも手がかり無し!! 収穫無し!!

ハツキリ言つてヤバし!

そんなこんなで今日も今日とて捜索するがまだ見つからない。

放課後から3時間は経過して現在時刻は19時を回つている。

捜索は3チームに別れてしていて、兵藤君、木場君、塔城さん、匙元士郎の「悪魔チーム」とゼノヴィア、栗ナの「協会戦士組」そして僕ひとりの「単独捜索」で捜索している。

そして現在僕は『鋼輪（以下略）』で空中から認識阻害を発動しながら捜索…………してると「協会戦士組」発見

とりあえず地上に降りてつと

「コカビエルは見つかりましたか？」

「誰（だ）!!」

破壊剣向けられて草

「なんだ君か…気配も出さずに出てこないでくれ」

「全くだわ!!……とゆうかあなた今どこから現れたの？」

ええ…？ 僕が悪いのぉ？

「この機械の翼を使って空から」

「なるほど」

と頷くゼノヴィア

「まあそんなことはどうでもいいんですよ。それよりさつきの話の続きなんですが

「いや、すまないがまだ見つかってない」

こちらも収穫なしかあ…

「聖剣のオーラを何度も感じてはいるんだがそこに辿り着く前に毎回既に逃げられててね」

「そうなんですか」

聖剣のオーラか…………そもそも聖剣からオーラ出るんですね初めて知りました」

「おい、多分だがまた心の声が漏れ…………!?」

「ゼノヴィアどうし…!?これは!!」

「どうしました?」

いきなり向こう側を見て顔を険しくする協会組…!!

「まさか!!」

「ああ!!正しく話しがすれば何とやらだ!!聖剣のオーラだ!!しかも何かと衝突しているような感じだ!!」

衝突相手として考えられるのは

「兵藤君達か!!」

「恐らくな!こうしちゃいられない、私達も行くぞ!!」

「わかつたわ!!」

「分かりました!」

くつ!よりよつて冷静さを欠く木場君がいる方に現れたか!!頼む

から持つてくれよ

『ゴルドクリティカル・ジユール黄金に輝きし龍の宝腕』脚部限定顕現!!

脚に神器の黄金装甲を纏い宝玉が4つ装着される!!それにより身体能力が上がる感覚来る!!

「勝手に触れてすまないが!!急いでるので許してくれ!!」

「なつ!」「えつ?……えつ!?

その一言と同時に2人を両脇に抱えて加速する。

悪いけど驚きを聞いてる場合じゃないしね。

「で聖剣のオーラはどこら辺から出てるか詳しく述べますか?」

「あ、ああ!!向こうの広場の方から出ている」

『Force Boost Drive』

その会話の後に一気に力を引き出す全力疾走じゃあアアア!!

すると広場に近づいたからか剣と剣がぶつかる音や他の戦闘音も

聞こえてくる!!

見えてきたあれか!!

見覚えのある金髪の男子が白髪の男と剣を交えてる…あれがフ

リード・セルゼンか?。

他にもジジイに兵藤君と塔城さんそして匙元士郎がいる。

「下ろしますよ！」

「わかつ 「いやそのままフリードの方に投げてくれ！」えー!?」「分かりました!! 「ちょつ!!」」

そう返事し二人をフリードの方に向かって投げた！

ゼノヴィアはそのまま兵藤君の横を通り過ぎフリードに斬り掛かって行く。

「逃がすか!!」

栗ナは転びそうになりながらもゼノヴィア後を追いかけて行つた。

「おつとと…や、やつほゝイッセー君助太刀に来たわ!!」

「イリナ!!」

栗ナの言葉に兵藤君が反応する

「何とか間に合つたね！」

「龍導!! そつか龍導が二人を連れてきてくれたんだな!! （超速理解）」

「ああ」

せやでもうちよつと感謝してくれ!!

「あばよ!! 協会と悪魔の連合とクソ!!」

カツ

と閃光弾を投げて逃げてく

馬鹿な事考てる間に逃げやがつたってかクソだと!?

「追うぞイリナ!!」

「分かつたわゼノヴィア!!」

2人が頷きあい逃げたフリード達を追いかける

「絶対に逃がしはしないぞバルパー・ガリレイ!!」

と言い更にその後ろから木場君が2人を追いかけていく。

ここまで来たら僕も追いかけよう!! 十中八九ジジイはともかくフリードはコカビエルさんの下に戻るだろ!!

「なら俺らも!!」

と兵藤君が追いかけてこようとするが…

「いや兵藤君達は言い訳でも考えてた方がいいと思うよ!!」

「言い訳?なんに対す「イッセー、これはどうゆう事? 説明してもらうわよ?」ぶ、部長!？」

というわけで今のうちに木場君達を追いかける
バイなら

ハグれた!!今現在起こつた事を言おう!!

「ハグれ…ッた!!」

バキッ!!と殴っていた相手に溝内が決まり気絶した
出来事順

協会組ダツシユ教会

←
木場君ダツシユ

←
それらを追いかける僕

←
めつさ神器使いが出てきた

←
それらを倒している間にハグれる【現在】

「背中もらつたア!!」

「んな訛!!「ゴフッ!!」

背中から襲いかかつて来た神器使いを殴り飛ばす
クソッ!!これで2回目だ!!

「おい!!」

と先程殴り飛ばした最後の1人の首を掴んで揺さぶつた

「ヒイツ!!」

「ヒイツじやねえサツサつとコカビエルさんの所に案内しろ」

「なんで俺が『いいから早くしろ!!また殴られたいんか!!』わ、分かり
ました!!」

!!ヤベエつつ!!もう頭痛が押し寄せてきた
早く行かないと…!!

「オラツ!!行くぞ!!」

「は、はい」

神器解除して鋼輪を起動し、そのまま戦闘員Aを抱えて上空へ上がる

「でどつちだ」

「た、確かに向こうにある屋敷に居るって言つてました」

「向こうだな？」

と確認をとる

「は、はい白髪のクリスチャンがそう言つていたので間違いないと！」

白髪の…フリード・セルゼンか

そのまま一気に向こうの方に向かつて行くと屋敷が見えてきた！

「あれか！」

「はい！あれです!!」

ヨシ

「3回目の神器発動…持てよ俺の体…持つてくれよ…!!!」

「両腕顯現!!『黄金に輝きし龍の宝腕』

その言葉と同時に両腕、そして肩まで覆う黄金の装甲が装着される

「行つけえええええ!!」

「え、な、ナンデエエエエエエエ!?」

屋敷の扉前に降り立つと同時に戦闘員Aを投げつけた!!

残念!!味方以外には生かす価値ねえから!!

バゴォン!!!

戦闘員Aは本気で投げたこともあり木の扉に豪快な音を立ててぶち当たるがそれでも勢いは止まらず木の扉を木つ端微塵にして更に向こうにいた複数人いた人影の1人に向かい飛んでいくが

「フン」

とまるで飛んできた虫に対しても手で払い除けるかのような動作で地面に勢いよく叩きつけられた戦闘員A

当然そんな事が出来るのは現状で思い当たるのは1人しか居ない

戦闘員Aが叩きつけられた時の土煙が晴れてその姿が見える

「コカビエルさん…」

「ここはよく来たと言つておこうか『無翼』」

そこには僕がよくしる堕天使が立っていた

コカビエル

聖書に記されるレベル墮天使でアザゼルとシエムハザさんとのともである。だが行動方針自体はグリゴリでも数少ない武闘派の幹部とゆう事もありグリゴリの研究には興味がない模様…

そして僕に戦い方を教えてくれた…つまりは武術の師匠もある。

「お前ように50人もの『龍の手』の神器使いを遣わせたのだがな…この様子だと意味をなさなかつたようだが」

「なんで…！なんでこんな事を起したんですかコカビエルさん!!」

「カズマ…貴様なら俺が直接理由など教えなくとも分かるだろう?」

そうだこの人は確かにグリゴリの研究は興味がないから年がら年中修行しているような人だ。だが、だからと言つてグリゴリの幹部や部下達と中が悪い訳じやない…………むしろいいほうだ。

そしていくらアザゼルのバカ行動に対してストレスが溜まつていたとしてもこんな事は起こさないはずだ…

『誰がバカだ!!誰が!!』

…なんか抗議が聞こえたけど無視しよう。

だから考えられるのは

「三大勢力…天界、悪魔、墮天使の三つ巴で再び大戦並の戦争を起すつもりなのかあんたは!?」

「ク、ク、ク、…よく分かつてているじゃないか!!カズマ!!正解だ…100点をやろうか?」

そんなふざけた答えに対し即座にコカビエルさんに向けて拳を振りかざす…が、それをいとも容易く避けられる

「巫山戯るな!!そんな事して何になる!!また犠牲を出してそれで勝つたとしても!!勝利したとしても!!それでツ…何になる!!」

その言葉に対し今度はコカビエルさんが答える

「だからなんだ!!犠牲のない戦争など無い!!あの時二天龍さえ割り込んで来なければ!!墮天使が勝つっていたのだ!!それを休戦するのはいい!!だがな!!その後なあなあで戦争を終わらせた事が気に食わないのだ!!だからもう一度三大勢力間での戦争を起こし墮天使が1番強いのだと世に!!世界に!!知らしめるのだ!!」

言い終わると俺に向けて光の剣を射出する

「クッ!!」

「それにお前に戦い方を教えたのは誰だと思っている!!そんな拳では俺にはとどかん!!!!」

「グアツ!!」

光の剣を使わず素手で僕の拳と撃ち合う……が!!吹き飛ばされたのは僕だった

更にその衝撃で神器も解除される

「ハアハア…だつたら…これなら…どうだアアアア!!」

やつてやる!!4回目だ!!!!

もつともつと!!強く!!早く!!なりやがれええええ!!!!

僕の全身を黄金の輝きが包む

「何!?

「これが僕の疑似禁手化『ギジバランスブレイカ 破弾の黄金』だ」

暫くし輝きが晴れると更に形状が変化し、計8個の宝玉が各部に着いた黄金の装甲が両腕と両脚に装着された

『Full Boost Drive!!!』

『俺』の意思に同調するかのように力が一気に高まる

『『俺』は堕天使組織総督『アザゼル』の直属の部下の『特例堕天使』としてアンタをここで止める!!』

「そのような付け焼刃で出来るものならやつてみせろおおおお!!」

Life 4 覚悟の戦い

いきなりだが先に前回の戦いの勝敗を語ろう

負けだ

それも完全敗北に近い。

あの後コカビエルさんの少しの本気に押されに押され結局フリードとバルパーの2度目の逃亡を許してしまったが木場君とゼノヴィアが再びそれを追いかけて行つた……がここで予想外の出来事発生…：

紫藤がコカビエルさんの流れ弾ならぬ流れ剣に当たつてた

流石にそれは予想外だった。

その為、紫藤を庇いながらの戦闘になつた。

当然『俺』の疑似禁手化は疑似でしかない身体能力を全て神器展開部の両腕と両脚だけに集中させるつまりは胴体部や顔面の防御力や身体能力がガク落ちする。

そんな中コカビエルさんが放つたのはほぼコカビエルさんの十八番に近い技である光剣の一斉掃射であつた。

字面だけ見れば技名でもないしダサいと思うかもしれないがこれが全く悔れない。

数の暴力で攻められる為に防戦一方になるがそれと同時に弾く叩き割ると言う行為をするだけで僕の神器はどんどんボロボロになつていく。

それ程コカビエルさんの光剣は1本1本が強力であると言うことだ。そして光剣の一斉掃射が終わつた…………と思つたら人1人分のサイズはあろう巨大な光の槍？矢？を投げつけられたことで同時にズタズタになつていた屋敷が遂に完全に損壊して崩れたのだ。

その隙に何とか逃げてきたけど…………正直キツいの

…………だ：

やばい：意識が消えかかってる…………早く…………兵藤君の所に行つて知らせないと…………

『最後の手向けとしていい事を教えてやろう!!この後俺は貴様の友である赤龍帝の小僧を利用してここ一体の領主のリアス・グレモ

リーをも利用して戦争を始める!!その場所にはお前達が通う学園で行う!!そうすればまた戦争が始まるのだ!!』

早く……この事を伝えないと……幾ら兵藤君達でも敵わない……だから……早く……

龍導 S i d e o u t

イツセー Side

「どこと!! 龍導!! 木場!! セノウイア!! イリカ!!」

イッセーはアーチアと小猫ちゃんと一緒に龍導達を捜索していました。

「……イツセー先輩…早く学校に行かないと戦いに間に合いませ
ん」
だが、かれこれ5分探してゐるが一向に龍導達が見つからぬ

そう、先程コカビエル達が俺たちの前に現れて戦争をすると宣言しに来たのだ。しかも、俺たちの…駒王学園で始めると言つて!!

けど…けど…

「けど木場とゼノヴィア以外…龍導とイリナを見つけないと…」

木場とセイヴィーは撤退したらしいのだと、たか二がヒエールの言ふ

コカビエルの言うことは信じたくない……だけど、だけど、もし本当なら龍導は俺がイリナ達を助けてやれないかなんて言つたから……だつたら俺が、俺が探さねえと!!

分かつてる!!けど…………!!

と唐突にアーシアが驚きの声をあげて指を指す。

その方向に居たのは

「龍導!! イリナ!!」

今までに俺たちが探していた相手だった。

たが、当然と言つていい程無事とは言い難い姿をしていた。

龍導は大量に血を流していて、イリナも足に大きな傷をおつていた。

「アーシア!!」

「はい!!」

アーシアに声を掛けると即座に癒しのオーラを出して二人を回復していく

「酷い傷…!! イリナさんは足以外目立った外傷はそこまで無いですけど…龍導さんは…切り傷が沢山…」

イリナの傷はほぼ治つたが、問題は龍導だつた制服はボロボロで所々が切れており、制服が切れた場所には必ずと言っていいほど大量の切傷があった…

アーシアの神器でも全身治すのには少し時間がかかるようだ…

「うつ…」

そうこうしていると龍導が目覚めた

「龍導!! 分かるか!! 俺だ!! イッセーだ!!」

「…兵…藤君?」

「ああ兵藤一誠だ!!」

「…『コカビエル』は?」

余裕が出来たのか段々と流暢に話す龍導

「アイツ…学園で戦争を起こすみたいで先に学園に向かつた…部長達もその後を追つてた…俺は許可取つて小猫ちゃんとアーシアと俺の3人で2人を探してたんだ!!」

「そうか…なあ兵藤君」

「なんだ?」

「…『コカビエル』と戦うのかい?」

「当たり前だろ!! あいつは駒王学園どころか、この町も戦場にしようとしてんだ…そんな事絶対させつかよ!!」

「…兵藤君、悪いことは言わないやめとけ…死ぬぞ!!」

「なつ?」

「何言つてんだよ!!」

「兵藤君がここに固執する理由はなんだい？松田君と元浜君？それとも君の両親かい？クラスメイトかい？それだけなら僕が逃がしてあげられるよ？」

「それだけじゃねえ!!この町も守りたいんだよ!!だから俺は「だつたら!!」!?」

いきなり龍導が大声を出した為俺や今まで黙つてた2人も思わずびっくりする

「だつたら…覚悟を決めろ!!兵藤君…正直ビビつてるだろ？」

ああ…そうさ

「怖えーよ正直…!!でも俺たちがやらない『だから、ビビつてたら負ける!!今日は特に!!』!!だつたらどうしろって言うんだよ!!」

言いたいことは分かるでもやつぱり

「だからいいものをやるよ」

へ？

「へ?」

「赤龍帝!!ドライグ!!聞いてんだろ出てこい!!」

な、何を

『なんだ…うるさいぞ…堕天使の小僧』

その声と共に俺の意志とは関係なく左腕の赤龍帝の籠手が起動し、宝玉が点滅しながらドライグが返事をした。

「兵藤が前に限定的に禁手化した代償で左腕が龍の腕になつて以降なるたびに俺が龍の気を神器で吸収して外に放出してるのはお前も知つてているだろう？」

『ああ、それは知つている…だがそれがどうしたと言うのだ』

「あれな、嘘だ」

「『は?』

「あ、ハモつた面白ー」

「いや、そんな事どうでもいい!!そんな事より」

あれが嘘ならなんで俺は今腕の形が人型になつてるんだ？
「ちょっと修正するが少しだけ嘘だ」

「じゃあ…?」

「本当のことつて言うのはこれだ」

そう言つて右腕先端の拳部分に装着されてる神器を俺に向けて来る。なんだ?

「ん」

「ん?」

「いいから早く左腕で僕、俺の右腕にグータツチしろ」

そう急かされ俺は龍導の右腕に左腕を「コツツ」と音をたててぶつける。

その瞬間に俺の中に大量に何かが流れ込んできたまさか、これは!?

「多分、今お前が考えている通りだ兵藤」

「つてことはやつぱりこれつて」

「ああ、俺がお前から吸収していった龍の気だ」

『ククク、なるほどな最初からこういう自体を見越してたのか』

『え? いやいやまさか龍導がそこまで

「ああ」

「えーーーーー!?

「だつて赤龍帝なのに兵藤は弱いからな」

「そ、そんな言い方ないだろ!?」

「でも怖さは無くなつたら? そして覚悟は決まつてんだろ?」

「ああ…:

「ありがとう!! 龍導!! 絶対にコカビエルに勝つ」

「ああ、俺も家でお前らが勝つのを待つてる」

「ん???

「龍導も戦うんじや……?」

「いや、コイツを家に置いてこないと…それに体力も限界だし!!」

え、

「「ええーーーーー!?」」

俺たちは勝てるんだろうか?

Life 5 目覚めの兆し

「よつと……これでいいか」

あの後兵藤達と別れてすぐ紫藤を家で休みせようと思つたのだが……多分この時間だと家に黒歌さんとオーフィスがいるんだよなあ……

片や最上級悪魔に匹敵されると言われるSSランクのはぐれ悪魔。また片や裏世界に現在進行形で蔓延る歴代最大最凶勢力とされるテロ組織の名目上の長（尚、まだ規模は拡大中）

会う瞬間何が起くるか目に浮かぶ絶対に斬り掛かるぞコイツ……この発言に魂を掛けてもいいと断言しよう!!

…………ゼノヴィアは戦闘スタイルからして筋肉だがまだマシかもしれないと思えるレベルだけどコイツは……チラツと紫藤の顔を見るが普通に寝てやがる。：

それに

家まで帰つてたら戦いに参戦できないしな

まあいいや。

という訳で現在俺は貴様アザゼルがこの町で拠点として使用しているマンションの部屋を使わせてもらつてる。

こここの隠れ家の方が断然隣町の自宅に戻るよりかは早いしねえ、部屋の使用許可？もらつたよシエムハザさんに。

…………え？違う？アザゼルに？…………いやちよつと何言つてんのかわかんないです。

つてさつきから

「何一人でブツブツ独り言を言つてんだろう……」

もしかして俺は兵藤にアレだけ煽つて戦いに行かせたのにビビつてんのか……？

「……情けない……」

「でもこれは俺がやらなくちゃ行けない事だからな……」

最終確認!!戸締りよし!!紫藤…気絶確認!!

行くか!!

「つと最後に」

腕輪のバッテリーを入れ替える

付け替えながらアザゼルに腕輪を貰った時の会話を思い出す

『いいかカズマ覚えておけ。その腕輪は使用時間や飛行速度が早くなればなるほどバッテリー内の光力が減つて腕輪に刺した時に表示されるメーターガゼロになると強制的に翼の展開が終了する。また、翼本体に強い衝撃があつてもだ！』

『……欠陥品だらけじやないですか』

『言うに事欠いて欠陥品扱いかよ……一応コイツは光力だけを動力にして動くんだからかなりの発明品なんだぞ？』

『へ～そんなんですか～』

『……興味無さそうな反応すんなよ。でだ、コイツはお前にやる』

『え？ おつとと、いきなり投げんで下さいよ!!』

『悪い悪い！ それとこれもだ！』

『この小さい四つの物体はなんですか？』

『そいつらは予備バッテリーだ。今差し込んでる本体バッテリーから光力が無くなつたら代わりに予備を2本差し込めば使える』

『なるほど…………なら、これは有難く頂いときます』

『おう!!』

つてなこと言つてたな
でも時間ないし

「全部刺すか」

それと同時に先程抜いたバッテリーと残り2本の予備を更に差し込む

「行くかあ!!」

「プルルル!!」

今電話かよ…………えつとアザゼルからか：

アザゼルとの通話が終わる……この土壇場で随分嫌な希望だな……
だがこれなら時間を稼げはなんとかなるか……？

ここでグズグズしても意味ないな
ヨシつ！

「ともかく」

腕輪を起動し背中からメタリンウイングの翼が展開され飛翔する
【目指すは駒王学園!!】

一気に背中を押し出されるように加速し飛行する
飛行しながら右腕を優しく撫でるようにさする

「俺は俺が何者なのかも知らねえしお前がなんなのか知らねえよ
…………でもさ、けどさ、今は兵藤ダチを守りたいんだよ」

「だから力を貸してくれよ相棒!!」

右拳のグローブを剥ぐ

「最初っから全力だア!! 本日2回目のオオオオオオオオオオ!!!!」

息を大きく吸い込み一気に吐き出す

「『破弾の黄金』!!!」

俺の言葉に答えてくれたのか鎧の代わりに体から黄金のオーラが
溢れる

(すげえ力だ!! これなら!!)

駒王学園が見えてくる

(あれは…………魔力による結界か？ここまで大規模で貼れるやつと
言つたら)

携帯を取り出し急いで電話を掛ける

『龍導か!? 今、忙しいんだよ!! 用があるなら早めに言え!!』

B I N G O !

「匙元士郎!! 用というのは学園の結界維持か!!」

『ああそうだよ!! だから用が「今から俺が突入するから結界壊された
くないなら10秒でいいから一旦結界解除するんだな」はア!?』

(ヤバいなそろそろ着く)

『ちよつ!! か『話は聞きましたがそれは出来ません。貴方はそもそも

墮天使側の人間。私達を騙すか「あつそ、じやあ悪いけど強行突破させ
て貰う』な!?』ま、まさかやめてくれよりゅ』

ピツと途中で会長に変わつてたし、匙が何か言つていたが構わん!!

更に加速してゆき

「突つ込むぜええ!!一ツツ点ツ集中ウウウ!!」

全身から溢れていた黄金のオーラが全て右腕に収束する

「行くぜ必殺!!破弾!!」

駒王学園の結界に向け右腕を突き出すと同時に結界がまるで耐えきらんと言わんばかりに『バリイイイイイイイイイ!!』という音と共に弾け飛ぶ

「悪いな生徒会!!そして待たせたなお前ら!!」

「貴様ツ…!!」

「龍導!!」

「カズマ!!」「龍導さん!!」「カズマ先輩…!」「龍導くん!」「来たか!」

黒衣に身を包む男は男の出現に忌々しそうに睨み、赤い竜手の男とその仲間達も男の出現に安堵の表情とセリフを浮かばせるが

「……」

1人そうでもなさそうな方もいらっしゃいますけど

(つてそんなことよりこれは)

次に右腕に視線を移すといつもの龍の鱗のような装甲に四つの緑色の宝玉が嵌められているようなものじゃなく

全体的に細くスマートでありトゲトゲしい腕へとなり宝玉も拳の物の1つになつていて最大の特徴は拳と拳に嵌つていた宝玉が二回り程巨大化していくなんなら宝玉の色が兵藤の神器の様に深緑色へと完全に変化している。

(そう、名付けるなら)

『破弾の黄金』刃弾形態

「あの傷で…生きていたか……流石と言つておこうかカズマ!!」

俺の独り言を無視し、その言葉を放ちながら即座に光剣を飛ばしてくる……だが!!

「今はその程度なら問題ねえ!!」

光剣を体を捻り避け更に

「グッ……アア!!」

光剣を両の手でキヤツチし投げ返すその時に左の手が焼けるが、ん

な事はどうだつていい

「フン、どうやらただ右腕に力を収束しているだけではな 「破弾!!」
なつ!?貴様ツツ!!」

「戦闘中に悠長に話す奴が悪いよツ!!」

話が長くなりそうだから一気にコカピエルがいる所までジャンプ
して殴りつけるが防がれた

「それにな!!あんたの存在そのものが俺からしたら邪魔なんだよ!!だ
からここで大人しく俺達に倒されろオオオオオオオオオ!!」

「その程度オオオオ!!」

追撃するも受け止められるチツ

「何ぼさつとしてんだ!!コイツを俺達全員でやるんだよ!!」

いつまでも動き出さない兵藤達に喝を入れるように言うと

「!!アナタに言われなくとも!!天雷よ!!」

「なつ!?

姫島さんが俺の言葉に激昂して俺ごとコカピエルに向かつて雷を
放ちやがつた

コチラに向かつて来た雷を神器で弾いてコカピエルに向けるがそ
れをも光剣でいなす

「中々の威力だな、バラキエルの力を持つものよ」

(何?)

なぜそこでバラキエルさんの名前が出てくる?

確かに先程の雷は威力はまだまだとはいえバラキエルさんの雷光
に似ていたがまさかツ!!

「アソツの名を出すな!!」

(あの反応からしてやつぱり)

「リアス・グレモリーよ、貴様も兄、サーベクス・ルシファーと負けず
劣らずゲテモノ好きのようだな!!最弱の赤龍帝、聖剣計画生き残りの
魔剣使い、そして墮天使組織グリゴリの幹部、墮天使バラキエルの娘
!!これ程のゲテモノをまあ良く集めたもんだな!!」

「貴様アアアア」

(やはりバラキエルさんの娘さんだつたか)

姫島さんは怒り叫びながら先程よりも強大な雷を放つが先程よりも冷静さ失っているためかすりもしない

「私の下僕、そして兄である我らが魔王への暴言は万死に値するわ!!」

そう言い放ちながら手の魔法陣から滅びの魔力を放つ

「フンッ」

コカビエルが今度は光の槍を出しそれでグレモリーさんが放った滅びの魔力を『バチーン!!』と振り払うだけで打ち消す

「ならば僕の聖魔剣と!! 「私のデュランダルを受けてみろ!!」

今度は木場とゼノヴィアがコカビエルに聖魔剣とデュランダルで斬り掛かる

「中々…だが!!お前はまだその力を使いこなせてすらいない!!」「ガツ!!」

その言葉と同時に地面に叩きつけられる木場

「そしてお前は前任のデュランダル使いより遙かにパワーが足りない!!」

「グハッ!!」

木場より後方に投げ飛ばされるゼノヴィア

こりや時間稼ぎじゃなくてアイツを倒す方法を考えるしかないか
⋮?

考えてても仕方ないから取り敢えず突撃だ!!

「塔城!! 兵藤をコカビエルに向けて投げろ!! 兵藤!! 塔城、お前、俺の3人でアイツを殴るぞ!!」

「分かりました!!」「お、おう!!」

2人の返事とともに一気に俺は空へ飛翔する

塔城は兵藤を抱えてグラウンドを思いつきり蹴ると同時に悪魔の翼で飛翔その後兵藤をコカビエルに向けて投げつける

「ほう、今度はお前らか!!」

コカビエルはそれを只只楽しそうにしてコチラを眺めている

「必殺!! 破弾!!」

『Expllosion』「うおおおおおお!!」

「ヤアッ!!」

俺の破弾、兵藤の赤龍帝の籠手、搭城の拳が当たり煙が発生するやつたか!?

いや、煙だと!?

「今のは中々だつたぞ…だが」

「くあつ」

と搭城の痛むような声が聞こえてくる

クソ!!

やはり煙が出てるのは搭城の拳が焼けてるから……つて事は…
「だが如何せんスピードが足りてなかつたなア!」

俺達とコカビエルの間には光で作られたひし形の壁があり壁にヒビが入つてはいるが搭城だけが素手だつた為力を出し切れず逆に手を焼かれていた

「ハア!!」

「「グ（ハアツ）!!」

先程の木場達同様に俺達もグラウンドに叩きつけられる

「小猫ちゃん！イッセーさん！龍導さん！待つて下さい直ぐに傷を治します!!」

そう言い木場達の治療をいつの間にかして終わらせていたアルジェントがコチラに向かつて走つてくる

「回復の力を持つ者か…」

とコカビエルは呟いた直後光の槍を…恐らく千は有るだろうものを一気に出現させる

「流石にこのお遊びも飽きてきたな……………というわけで回復役のそこのお前には今から死んでもらう」
「え？」

その言葉が言い終わるころにはアルジェントにむけて無数もあつた光の槍は既に放たれ始めていた

イツセー side

「アーシアアアアアアアアアアアアアアア!!」

コカビエルはいきなり何か言い出したと同時に大量にあつた光の槍アーシアに向けて投げた!!クソオツ!!ここからじや間に合わねえ!!地面で寝てる場合じやないんだよ!!起きろ!!じやないとアーシア

「アーシア!!」「アーシアちゃん!!」

部長と朱乃さんが滅びの魔力と雷で光の槍を打ち消すがそれでも足りなく更に光の槍が降つてくる

「ヤメロオオオオオオ!!」

俺が叫ぶが当然、槍は止まるはずもなくそしてまもなく光の槍がアーシアに刺さる……筈だつた

その直前にアーシアと光の槍の間に人影が挟まつたのだ
そして無抵抗の人影に、アーシアに刺さる代わりに、『ドスツ』『ドスツ』『ドスツ』と刺さり『ドスドスドスドスドスドスツツ』と全ての槍が刺さり終わるとその人影は地面に倒れ落ちた
「龍導オオ!!!」「カズマ!!」「龍導くん!!」「龍導先輩!!」

アーシアを守つてくれたのは龍導だつた

あの一瞬に、あの瞬間に一気に加速してアーシアと槍の間に入りアーシアを守つてくれたのだ

俺達は龍導の名前を呼んで直ぐに近くへ寄る

「なんで…なんで…こんな事…」

顔以外の体中全てに穴が開き中からドンドン血が流れ出ている

なんでそこまでしてアーシアの事を守つてくれんだよ?なんで…
だつてお前からしたらアーシアは赤の他人だろ?

「なんでつ…て……お前の大好きな奴なんだ…う…?アルジエ……ン
トは…?」

そんなん?それだけの?理由で?ここまでツツ……!!

「直ぐに治します!!絶対に!龍導さんは死なせません!!」

目の前で起こつた出来事のせいで茫然としていたアーシアもすぐに回復の光を龍導に向かつて掛けるが1つ1つの傷の穴が大きすぎ

てアーシアの回復が間に合っていない

クソッ!!どうすれば!!どうすれば龍導を助ける!?考えろ考えろ

考えろ!!

『相棒』

こんな時になんだよ!!今お前に構つてる暇は

『堕天使の小僧を助ける方法なら一つだけあるぞ』

何!?

『この小僧から戦闘が始まる前から貰つたあの龍の氣由来の力をアーシア・アルジエントに譲渡をすれば一時的にだが回復の力を著しく上昇してあるいは』

だつたら!!『だが』

『だがな、そんな事をすればコカビエルに勝つ方法が無くなるぞ?それでもいいのか?』

『そんな事は後から考えればいいんだよ!!

「アーシア!!今から俺の力をアーシアに譲渡するそれで!!』

「分かりました!!任せてください!!』

2つ返事でアーシアも了承してくれる

「いくぞ! ドライグ!!』

『いいだろう!』

俺の籠手が強制的に第二形態へとなる

『Dragon Exploration !!』

『Dragon Transfer !!』

その機械音と一緒に籠手の宝玉に赤いドラゴンの紋様が浮き出て体中から大量に力が溢れですかさずそれをアーシアに譲渡!!

「いきます!』

アーシアは再度回復の力を使う

すると先程とは比較にならない程の緑の癒しの輝きを龍導の全身を包み込む

輝きが終わると龍導の体中の傷が消えていた!

「やりました:イッセーさん!!』

「ああ、ありがとう！ありがとうアーシア！」

「はい！」

と会話をすると『キンッ!!』と打ち合うような音が聞こえてくる音が出ている方を見るとゼノヴィアが再びコカビエルに斬り掛かっていた

「イッセーくん！戦いはまだ終わってない！だから今は龍導くんのことは一旦置いておいて」

ああ！！

「コカビエルをぶつ倒す！」

再び俺達は駆け出しコカビエルに向かつて行く!!

「なぜだ！なぜお前らはまだ向かつてくる!!」

笑いながら斬りこみ俺達に質問を投げかけるコカビエル

「決まつてんだろ！お前を殴るためだ!!!」

「私は主の為に戦うときめているのだ！！だからこそ主の邪魔となる貴様をここで斬る！」

「…………クハハハハハハハハ!! そうか!! そうだつたなあ!!」

ゼノヴィアのその言葉を聞いた瞬間に笑いだした!!

なんだいきなり？!

「貴様らは知らないのだつたな!! それに戦争ももう始まるのだから隠す必要も無いか！神は昔の大戦で既に死んだよ!!」

え？

なんだ？ アイツは何を言っているんだ!!

あまりの内容に俺を含めた全員がその場で動きが固まる

「主が…………いない？…………嘘だ!! 私を、私を騙そうとしているのだろう!! そんな『逆に言うが俺がお前らにそんなチンケな嘘を着いて何の得があるというのだ？』…………」

「…………主がもういないだなんて」

ゼノヴィアが反論しようとしたがコカビエルが言つた言葉で黙り込みアーシアは先程以上に放心してしまつていた

「戦意喪失か…………まあいい、なら最初はお前から終わらせようバラキエルの娘!!」

「クツ！雷よ！」

一気に放たれた光の矢を全て雷で撃ち落とす朱乃さん
「ならばこれならどうだ!!」

が、すぐ近くまで迫っていたコカビエルが俺達より2回りはデカい
であろう光の槍を打ち出し、朱乃さんに当たる
……………ことはなかつた

その前に輝く何かが光の槍を碎いたからだつた

……………光り輝く右腕つて

「龍導!!」

アイツもう目覚めたのか!?

いや、そんなことより

「なんだあれ…」

俺が知っている龍導の神器とは完全に別物だつた
原型がなく光輝く何かがアイツの右腕に纏つていた

背中にはよく見ると右側（輝きすぎてボンヤリとしか姿が見えない
が）にツル状の1本のプロペラかフインの様な物が着いている
「ほう、目覚めてすぐにこの一撃を止めるか!!だつたらこれでどうだ
!!」

そう言うとコカビエルは翼で飛翔して先程龍導を瀕死に追い込んだ時のように無数の光の槍を繰り出す

がそれもすぐに背中のフインを回転させて飛翔した龍導が全て碎
いた

『僕達の…………この子の邪魔をしてくれるなコカビエル』

え？今、龍導の方から女の子の声がしたけど気のせいか???

「ほう？貴様…カズマではないな？…………まあよかろう楽しけ
ば関係ないわア!!」

『だつたら真っ正面から文字通り打ち碎いてあげよう』

今度は光の槍を両腕に1本ずつ装備したコカビエルが龍導に向
かつて

行く

「八アアアアアアアアアアアアアアアア!!!!」

『シェルブルリットバアースト!!』

更に龍導?の右腕では龍導?の叫びに呼応して輝きが一気に増す
そして遂にコカビエルの槍と龍導の拳がぶつかった瞬間上空の辺
り一面を白い輝きが包む

輝きが収まつて来るが

倒れてたのは龍導だ!!

「龍導大丈夫か!!」

『大丈夫だよ…それよりコカビエルは?』

その言葉に気づき辺りを見渡す俺達

そして

「クハハハハ、イイゾ!!だが、惜しいなまだこれくらいじや足りん!!
な、!?

そこには笑いながら立つてゐるコカビエルがいた!!
あの一撃でもダメなのか!?

『そうか…アレでもダメだつたか』

「貴様!!先程のはいい一撃だつたぞ!!…………だからこそ手向けとして
俺の最大級の一撃を『だつたらこれで終わりだよ…』ガハッ!な、何
が』

今まで見たことない光の収束しだしたコカビエルに対し龍導?が
手を向けた次の瞬間、何処からともなく出現した黒い何かがコカビエ
ルの体を貫いた!!

な、なんだ!?

唐突に体を貫かれたことにより倒れ込むコカビエル

そして、先程の貫いた物も砂埃を立て地面に刺さつていて
あれは……

「黒い…刀?」

そこにあつたのは並列に赤いリングに縛られ地面に刺さつていて
1本本の黒い刀だった!

『流石にこれは予測できなかつたでしょ?』

満身創痍の龍導?がそう言う

あれも龍導?がやつたのか!?

!! 血を大量に流しながらも激昂しコチラに向かつて来るコカビエル

『Explosione!!』

すぐそこまできていたコカビエルを俺が殴る……………前に何かが横
ギリコカビエル掴んで行つた!!

「今度は仕た／＼か！」

上空を見るとそこには白い鎧に見に包んだ何者かがコカヒエールの首を掴んでいた

といふかあの鎧……アレ……なんか俺の『赤龍帝の鎧』に似てな
いか?

するとドライグが

「当たり前だろ? 何せヤツは」
『バニシン』

「あ、赤に引かれたか『白い龍』!!!」

「え？」
来るのか遅れですか」「たな龍導ガスマ」

アイツ龍導の知り合いなのか!?

『遅すぎるわ!!お前のせいでエツチは死にかけたんだぞ!!』

『うつさいわ！』

ケンカしたした

「俺はこんな所で終わる『いや、ここで終わりだよ、アザゼルに俺もア
イツもアンタの捕縛を命じられた時点でね……』今回アンタはや
り過ぎたんだよ」うるさいだ、だま『D i v i d e !!』グア!!「今
のアンタはこれで十分だな」おのれアザゼルウウウウウウウウ!!!!
その言葉とともに地面に叩きつけられ、コカビエルが気絶した

「それじやあこの男は俺が責任を持つて回収させて貰う…………ついでに送つててやろうか龍導カズマ」

「断わ…………る…」

その言葉の時に男の声に戻つたがそれと同時に龍導が再び気絶した

その言葉を受けてアイツも立ち去ろうとするが

『無視か白いの』

ドライグが呼び止めた

『起きていたのか赤いの』

するとアイツの翼が点滅しそれに答えた

『折角出会つたがこの状況ではな』

『いいさ、いずれ私達は戦う運命なのだから。こういうこともあるだろう』

『しかし、白いの以前のような敵意が伝わってこないが?』

『それは赤いのもだろう?』

『お互い戦い以外にも興味があるか…』

『そういうことだ。また会おう、ドライグ』

『ああ、じゃあなアルビオン』

そんな会話が終わリアイツも飛び立つて行つた

アイツは結局何者なんだ……

でも取り敢えず今はコカビエルとの戦いが終わつたことに喜ぶ俺たちだつた!

第3節 三大会議のリンク一ネーション篇

Life 1 僕は『僕』になり『ボク』と出会う

「う、ううくん…………え？」

起きたら謎の黒い空間にいました…………なんで？

「お？やつと起きたかい？」

そして目の前には金髪ボニー・テールで青い瞳の美少女が立つてい
た…………だから何で？

しかも駒王学園高等部の制服来てるし…………こんな娘あの学園
に居たっけ？

「おはよう！」

「おはようござります？」

というかホントに何処で彼女は誰なんだ！？

「えっと君は？ここは何処でなんで『僕』はこんな所に？」

と質問すると彼女はキヨトンとした顔をしてるどうして？

「力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチャ
ンスだつたしコツを掴んどかないとなあ～あの力近々必要になるだ
ろうし」

そしてなんかブツブツ言い出した小さすぎて何を言つてるのか分
からないな？

「えっと…」

「おつと、まずボクの名前は識目結しきもくゆく改めてよろしく!!僕のことはそう
だなく…………君の力の根源つて事で!!えつとそしてここは君の精神
的世界だよ」

「なるほど。『ご、ご』丁寧にどうも僕の名前は」

あれ？改めまして？

「君と僕つてここで一度あつた事あつたけ？というより僕ここに來た
ことない気が」

「そんな事ないよだつて君とは昔からの付き合いだからね」
「昔からの…？」

「そう昔から……君が記憶喪失なるもつと昔からのね」

そう言いながらウインクしてくる彼女

というか僕が記憶喪失になつてアザゼルに拾われたのは確かアザゼルが言つてる通りなら推定6、7歳児だつたはず

更に彼女が言つてる事が本当ならそれより昔からなら3歳や4、5歳の時?

いや、もしかして本当h

「というか君じやなく結つてよんでも昔みたいに」

と考え込んでいると彼女に話しかけられ考えを遮られる

「う、ごめん…………あ……と……結さ 「結!!」 ……結?」

「うん!! なんだい?」

さん付けで呼ぼうとしてまた遮られたので呼び捨てで呼ぶと彼女は嬉しそうに反応してくれる

「精神的世界つてことは分かるけどどうして今になつて結と会話出来るようになつたんですか?」

「覚えてない? コカビエル倒した時の事?」

「え? 誰がですか?」

「君がコカビエルを倒した時の事」

コカビエルさんを…………僕が…………

「ちよつと何を言つてゐるのか「正確には氣絶してゐる時に僕が代わりに倒したんだけどね?」あ、そうなんですね?」

結が倒してくれたのか…………いや、凄!?

「えつと記憶が曖昧なので教えてくれると嬉しいです……」

「いいよ! どちら辺から話せば良いかな?」

うーん

「その気絶した辺りから」

「OK! それでね……」

それからアルジエントさんを庇つて僕が穴ぼこになり兵藤君が僕を助けようとして龍の氣を増幅してアルジエントさんに譲渡しそれで治癒した際にその時にアルジエントさんから漏れ出てきた大量のオーラにより結が表面に出てきたことも

「なるほどです…………」

「あ、そろそろ君は起きるっぽいよ」

「え？」

「今、君がここにいるのは僕のせいだね…………さつき話した通り力の行使の6回目を僕がしてしまったから今君の右腕は複雑骨折ならぬ粉碎骨折していたからお詫びとして僕が右腕の修復をしてたんだ」

「粉碎骨折……」

ちよつと見てみたい気がした

「だから外では多分2日位時間が経つてるとと思う……ごめんよ」

「いや、いいよ僕の腕を治してくれてたんでしょ？だつたらありがとう」

そう言いながら左腕を差し出す

「これからようしく結」

「うん!!」

彼女も左腕を出し握手する

「と…アレ…なんか眠くなつ…………て来た…」

「その眠気が現実で目覚める合図だよ」

あ、と彼女は何か思い出したように声をあげた

「最後に、君は実力もかなりついただからそろそろ昔の記憶を取り戻すと思う」

「そなんだ……ありがとう…覚えておく…それじや……あね」

「うん!!またねカズくん!!いや、」

ゆうくん

そう最後に聞こえた気がした

Life 2 アレからの日々

あの後、結にお別れを告げてから目覚めたがその時に気づいたことがある

なんと1週間以上経過していました

ま、マジかとは思つたが結さんに聞いてみたところ

『君が起きた状態で体の主導権を握つてゐる時は時間が現実世界と精神的界は時間が同時進行するんだけどあの時は君を休ませるに体に張り付いてた精神（心）を精神的世界で癒してからあの間は僕も表面化出来なかつたから正確な時間が分からなかつたんだ』

と言つていたので『じゃあなんでその事を言わなかつたの？』

と聞いてみたら

『う』

『う？』

『ゴメンね？久しぶりだからわ、忘れてたんだ』

と今にも泣きそうな感じで謝られた流石に怒つてゐる訳でもないに泣かれるのは精神的に来るのもあるので直ぐに謝るのもやめてもらつた…………だつて忘れてたならしようがないしね（・ω・）？まあそれは良いんだけど、当然起きたがマトモに動けませんでした。

ハイ、そんな気がしてました…………

傷そのものや神器によるデメリットは治りきつてゐるんだけど、いかんせん前回が激戦だつたから体中には当たり前だけど疲労が溜まつてゐる訳でそれから一度寝込んだらそら起き上がるわけはなかつた。

そして恒例になりつつある黒歌さんから説教から

『なんでこんなになるまで連絡しなかつたの!!』や『死にかけるぐらいなら私を呼びなさいにや!!』等など言われたので

『そうしたら黒歌さんは塔城さんに会うでしょ？絶対に敵意を向けるよ？僕はそれが嫌なんです……例え妹さんでもアナタが傷つけられるのは』

なんて言つてたら『…バカ!!』って言いながら僕の顔面に近くのクツシヨンを投げつけた後部屋から出てつてしまつた…………泣きながら怒つてた…………今まで以上に心配かけたかも後で謝らないと…………

みんなに心配ばかりだからまだ強くならないと…………とそんな事考えていてようやく気づいたけど僕の横にオーフィスがペタん座りしてた。

『オーフィスにも心配？させちゃつた？ゴメンね？』

と言つて頭を撫でてみるが心做しかジト目で見られてる気がした。その後しばらくオーフィスの頭を撫でていたがやっぱり機嫌が悪いのかジト目でずっと見ていた

と遂に思つたら口を開いた

「我は知つてる。人間すぐ死ぬ」

「…うん」

「我にこんな風に話してくれるのカズマが初めて」

「うん」

「カズマがなんなか分からないけど、こないだボロボロになつて帰つてきた時に我固まつた」

「そつか」

「だから多分死んで欲しくないんだと我は思う」

「……うん」

正直本当はここで「うん」とは言えなかつた。

僕はグリゴリの戦士でそしてアザゼル直属の部下でもあるし、便利屋「りゅウ」では時々、裏側の仕事とやサーゼクス様からはぐれ魔討伐などもある

そして何より、オーフィスやグレートレッドみたいな龍神でもない

限り生物はいつか等しく死んでしまうのだ

だから「うん」とは言うつもりはなかつたが何処か悲しそうに見えるオーフィスの顔を見たら「うん」と言つていた

そしてオーフィスの話は続く

「だからこれ持つてて」

「うん？」

と言われて手のひらサイズ……と言うには少し大きいの小瓶が渡された

小瓶の中には黒い蛇のような物が入ってる

「つて前にも言つたけど僕はオーフィスの蛇は要らな 「持つてて」 や、でも「持つとくの」 ……ハイ」

圧が強いので受け取つておく

「それを飲めば一時的にカズマなら魔王と同じくらいには戦える」「なるほど」

その後も話は続いたし、オーフィスの機嫌は直つた

黒歌さん？ そんなの…………動けるようになつてからひたすら誠心誠意思いを込めて土下座して許して貰つたに決まつてゐじやないデスカ

あれから更に1週間経過して最初に目覚めた日から2週間以上経過した

あの後は電話越しに兵藤君からも心配されたグレモリーの皆からも心配されてたようだ

特に兵藤君と姫島さんとアルジエントさんにだ

兵藤君はわかる、友人だものというか心配するなら変態3人組は学校でスケベ行為に走らないでお願いだから……

アルジエントさんも分かる、あの時庇つたからだよねうんうん…………姫島さんは？ なんなら前までは若干睨まれてたまであるでしょ？

それがなんで『あの時はありがとうございました』『その後は大丈夫でしたか?』なんて嬉しそうに話しかけてきたW h y…………つて誰だお前!?

なんなんです!?グレモリー眷属は反省すると僕に優しくなる呪いでもかかってるの?怖っ!!コワイよ!!

なんでもコカビエルの攻撃から姫島さんを守つたらしいのだ
なるほど…………なるほど!!僕にほの字なんだね!!

……なんて冗談を一瞬よぎつたがそんな事を言つてみよう

多分血涙を流しながら俺に恨み言や怒りをぶつける兵藤君が容易に想像できるぞお!!

なので流石にそんなことは言わなかつたが最後に姫島さんが
「後日話したい事があるので連絡するために私の電話番号を教えてお
きますわね」

と言う今回最大級の爆弾発言をした為即座に切つたが

結局先程の想像した光景なつてるんだろうなあ電話の向こう
……

まあ直ぐに姫島さんから直接電話のかけ直しがあつたから一応電
話番号の登録はしておいた

何なら近くにいた黒歌さんからジト目で見られた何で?

そんな事が色々あり久しぶり僕はグリゴリ本部に来ていたが……
うん!!居心地悪いね!!

まあ理由は何となく分かっているけど

「悪いなカズマ、今回のコカビエル件がグリゴリ内に漏れちまつてな
……まあ分かると思うが大体の奴がコカビエルに何かしら罪を擦り付
け本人を落とし込んだとか思つてる奴が多くてな」

「ああやつぱりですか?」

「それで昇進、後は純粹にコカビエルを尊敬してたヤツらとかな」

「ああくなるほど~」

「まあ昔から特例としてお前からすれば」

「そもそも白い目で見られた所でっていう話ですけどね」

「だろうな」

当たり前だ、種族が違う時点でも全員が納得して仲良くなんてそういうそうない

それは昔からわかつてた事だし何なら周りが『無翼』や『化物』なんて言つてる時点でなあ

「あ、それとこのトレーニング室使わせて貰いますね?」

「おう、いいぞ」

「じゃあそういう事で~」

手をヒラヒラしながらアザゼルに別れを告げてトレーニング室に向かう

ちなみに今アザゼルのどこに来てたのは今回の事件の顛末の報告をする為である。

今日ここに来た目的は他にもあるそれは:

体を鍛え直すことである

ほぼ2週間も動かしてなかつたから体がなまつてたのだ

だから鍛え直す

まずは軽い運動をしてから訓練に入ろう

~1時間30分位経過~

軽い運動終了!

腹筋と腕立て伏せ1000回を5セット終わらせた後のランニン

グ

ちょっと汗かきすぎたから1回シャワーあびるか

それからシャワーを浴び30分程休憩した

いや、だつてシャワーを浴びてから急激に運動するのは面倒いしまあいいや

右手に持っている刀に視線を落とす

『刻刀』

一振の刀に2本の刃が並列に並んでいて柄は赤いリングに2本の黒のラインが引かれた物がついてる

これはとある科学者が作り出した物で通常の鋼を使って作つた物

らしいのだがなんでも魔剣や聖剣にも匹敵する斬れ味らしい

結曰く

『君が昔使つていた刀』

らしい

それ以上を聞こうとしても話してくれなきそなうなので聞かない事にした

だつて無理に聞いて嫌な思いをさせたくないしね？

とまあここまで考えといてなんだがこれは今回使いません

取り敢えずは神器の特訓だね

という訳で

「こい!!『黄金に輝きし龍の宝腕』」

シーン

とでもいうようなレベルの無音が続く

あ、あれ？

「お、おーい? 出てこーい」

右腕をペチペチ叩くが出てこない

あれえ？出現手順が変わつたとこ

「出てきて下さいお願ひします!!」

「黄金く輝きしへ龍のく宝腕く』

「へくんしんトオツ!!」

「はい変わつたア!!」

で、出てこないなんで？

思い出せ何か理由があるはず…………うん？

『力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチヤンスだつたしコツを掴んどかないとなあくあの力近々必要になるだろうし』

『力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチヤンスだつたしコツを掴んどかないとなあくあの力近々必要になるだろうし』

『力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチヤンスだつたしコツを掴んどかないとなあくあの力近々必要になるだ

ろうし』

『力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチャンスだつたしコツを掴んどかないとなあ～あの力近々必要になるだろうし』

『力をあの時に解放しすぎたかな？いや、でも第二を解放できるチャンスだつたしコツを掴んどかないとなあ～あの力近々必要になるだろうし』

な、なるほど納得!!しようがないね
いや生身でもやれることあるでしょ

あ、ヴァーリ発見

「おい、ヴァーリ模擬戦しようぜ（#、⑥、）」
なんでキレてるかつて？

…そもそもコイツが時間通りに来てたら僕はあそこまでボロボロにはなつてないだよなあ（ブチ切れ）

「…ふ、たまには君の相手もしてあげてもいいだろう…但し君相手ならこれで十分だろ？」

なんて言いながら『白龍皇の光翼^{ディバイン・ディバイディング}』を出しながら蹴りかかってき

た

鎧なしとか舐めすぎだろ
流石に蹴りはかわすそして

「必殺!!激情スパイ럴!!」

新必殺技（今作つた）激情スパイ럴は『俺』の感情を拳に乗せて腕を捻り殴る瞬間に回転させて殴る技だ

という訳で俺の怒りを受けろヴァーリ!!

「オリヤアア!!」

「ふん」

あ、避けられた

そのまま壁に直撃

ドゴン

「え?」「は?」

…………直撃した瞬間に壁に大きな穴があきその後に

壁が粉々になつた
……何で？

Life 3 三大勢力和平会談

前回までの荒寿司

龍導「やつべえ」ヴァーリ（コイツ人間なのに生身で……）

今回のあらすす

三大トップの和平会談

「あ、今度駒王学園で三大勢力での和平を組む為の会談があるからお前も参加しろ」

唐突!!

「唐突!!そして初耳!!っていうかアンタはこの組織のトップなのに直属の部下に対しても『報連相』ができないんですか!?」

「うつせえ！もう決定時効だからじやあな」

「逃げんなあアアアアアア！仕事してくれええええ！」

数日経過

やあどうも龍導カズマです

という訳で今から三大トップの会談始まるよ!!

え？なんだつて？授業参観やグレモリーのもう1人のビショップはどうなつたかだつて？

それはね

クソ雑回想ダイジエスト開始!!

授業参観～ダイジエスト～

「今日は英語で紙粘土!!（英語の担当教師）」

「「「「「何でや？（クラス一同）」」」」

「兵藤がリアス・グレモリーさんの裸体のフィギュア作つてるぞ!!
(松田&元浜君)」

「何でや（僕）」

『で君は何を作つてるの？（結）』

「何故か夢で出てくる赤いハサミと刻刀（僕）」

『何でや（結）』

(((なんかアイツ一人でブツブツ言つてる…怖つ（クラス一同）

))))

「授業参観終わったし帰るか？（僕）」

ギヤスパー遭遇編（ダイジエスト）

「よつ赤龍帝！（アザゼル）」

「ア、アザゼル！（兵藤君）」

「「「え？（オカ研+ α ）」「」」

「お、そこのおま「ダリヤアアアアア！」ゴフツ!!（何か言つてたけど取り敢えずアザゼルを発見したので全力で蹴つた図）」

「り、龍導？（兵藤君）」

「何!? テメエカズマ何しや「仕事をしろ」嫌だアアアアア（アザゼルを引きずつて連れ帰る図）」

回想ダイジェスト終了!!

と言うわけで寝ます

カズマ side out

アザゼル side

俺、アザゼルは現在リアス・グレモリーとその眷属たちによるこの間起こつたコカビエルの事件についての報告をセラフオルー、サーゼクス、そしてミカエルに俺という4人で聞いていた

笑いしか出ないが……やらかしてくれたなコカビエル

「これで私達、リアス・グレモリーとその眷属悪魔達が関与した事件の報告を終わりります」

と今しがたリアス・グレモリーの報告が終わつた

「それじゃあアザゼル」

「あ？」

なんだ？

「君の横で寝てるカズマ君を起こしてくれないかな？」

「は……はあ——!」

横に振り返るとそこには椅子に座つて足を組み腕を組んで仰け反つた状態で寝てるカズマがいた…………つて

「何重要な会議中に寝てんだお前!!」

「グワツ…………いててアレ? 会議終わつた感じですか?」

「終わつてねえし話が進まないのは寝てたお前が悪いからな!!」

「おい……アザゼルお前…お前…まさか俺が何でわざわざこんな時に寝てたか分からないとほいわせねえよ??」

「あ? つつても心当たりなんて………あ」

ヤバい!!

「あるよなア心当たり!! そりや確かに会議中に寝てる俺が悪いなア!! でもな! お前が毎回毎回毎回毎回お前が仕事をサボつて遊びに行つたり兵藤君呼び出してる間にさ!! 俺がわざわざ学園生活と並行してお前の書類も片付けてる訳!! 分かる!! 深夜にわざわざナナシゴンとシエムハザさんと3人で書類整理確認やその他諸々とゆうか組織のボスが仕事をサボつてんじやねーよ!! この頭プリン!! (早口) 「 プ、プリン…頭プリン…クフフフ」

や、野郎ー!!

「笑つてんじやねえぞミカエル!!」

「すみませんねアザゼル…………ブブツ」

「笑うなーー!!」

そう叫んでいると後ろからカズマがやつてきた

「取り敢えずアンタは1回頭冷やしてこい」

と言つて窓を開けた……はあ!? お、おいお前まさか!?

「冗談だよな?」

「じゃあな」

ポイッ

あ、アソツほんとにやりやがつた組織のボスを窓から外に落としあがつた!!

でもな

「考えが甘いぞカズマ!! 俺は墮天使だから翼で飛べることを忘れて

「ないつすよ」

「俺がいい終えようとし窓まで戻つてきた瞬間

「バイちゃ」

口ケランを打ちやがつたアアアアアアアア!!

つていうかそれわざわざ会議に持ち出したのこの為かよ!?

…………痛くねえ…不発か?

と考えていると窓から頭だけを出したカズマが

「一応痛くないからわからんだろうが今アンタ一般人並だし翼も出せ
ないから」

…………

「はあ?!なんだそりや!!」

「ナナゴンとシエムハザさんとの協力の元作成シマウマ」

「あいつらああああああ!!」

「じゃあの（`　?　w　?　、）ノシ」

「クソガアアアアア!!」

と言つてる途中でアイツ窓閉めやがつた……

Life 4 僕は『』

』

前回のあらすじ 会議始まる アザゼル落ちる（物理）
今回のあらすじ ちよいと時間が飛ぶよん

一体何が起こったと言うのだろうか

僕こと識目結は目の前で起こったことに頭が追いつかない
ただ分かることを言えば吹っ飛ばされた

一度の反撃も許されずアイツに

あの後会議は順調に進んでいた……が突如時が止まつた
話よれば禍の団がオカ研の部室に残してきてたグレモリーサンの
所の眷属の神器を暴走させたらしい

そういうわけでグレモリーサンと兵藤くんがオカ研部室に残して
きた眷属の救出、ヴァーリが外から入ってきている【禍の団】^{カオス・ブリゲード}の対
処、そしてカズくんが会議に乗り込んできた今回の黒幕であるカテレ
ア・レビュイアタンの対処である

当然ながらカズくんもとい『ゆうくん』は本来の力の欠片しか今は
使えてない状態

いくら鍛えても強くなつても結局の所は欠片分にしか力を引き出
せてないわけで

旧とは言えど魔王種の血筋あるカテレアには勝てるはずもない
そう通常ならね

アザゼルから預かつてたファーさんこと『堕天龍の閃光槍』^{ダウン・フォール・ドラゴン・スピア}と同
時にカズくんの偽神器を併用した疑似禁手化亞種である
『堕天黄金龍の破鎧』^{ゴルドドラゴン・フォールダウンドラゴン}を発動

うん……長いね形態名……

そして相手側であるカテレアもその形態から発せられるオーラに
あてられ流石にヤバいと思つたのだろう

やはりオーフィスの蛇を1本取り出し飲み込んだ
そこからは空中での戦闘を開始したが

当然ながらカテレアは魔王の種の血を引いているだけで魔王程の

実力があるかと言わればそんな訳は無いはずだ

だつてそうじやないとそもそも現ルシフアーサン達はあの場には立つて居ないだろうから

つまりは魔王の型落ちであるカテレアごときではファーサンの力と混ぜこぜのシェルブリット擬きのカズくん併用した力に勝てるはずが無い

それを悟つてかは知らないが懷からもう1つ蛇が入つた小瓶を unused……する前にカズくん一瞬でカテレアに接近し顔面を殴り飛ばして手放した小瓶を回収

流石ゆう……カズくん!!僕じやなきや見逃しちゃうね!!

いやでも顔面はエグいよお……

それからヴァーリの裏切りもとい【禍の団】に加入したのを聞いてアザゼルの恩から怒り突撃するがたつたの5発でのされ地面に叩きつけられると同時に偽神器の疑似禁手化も解除されてしまった

その後はヴァーリが兵藤くんの逆鱗に触れたことによつてアザゼルの制御リングを代償として禁手化その後ヴァーリが有利に回るも龍殺し：ドラゴンスレイヤーの剣であるアスカラロンの力でヴァーリの鎧を破壊したんだ!!

それで一時的有利になるがそれでも足りなかつた

だから兵藤くんは右腕に白龍皇の力を激痛をこらえて移植した

その時のカズくんの焦り方は尋常じやなかつたね：

それからなんやかんやあってアザゼルの煽りもありお胸のパワーでヴァーリを先程とは立場が逆転して兵藤くんが圧倒していた

そしてあと一撃で終わると言うところで

乱入者が現れた

僕はその顔を知つてゐる

その瞳を知つてゐる

その髪型を知つてゐる

だが

その笑い方は知らない

誰だアイツは

何故…ゆうくんと同じ顔をしている!!!!

『アヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツヒヤツ!!俺様の名前はロスト!!この会談をとあるお方の命令により壊しに来た!!』

だが驚くのはアイツの容姿だけではない

アイツが連れている配下のような奴らだ

黒いスーツの集団で全員がマツチヨのような姿をしている

しかし

そいつらには頭が着いていなかつた

色が違うだけだ

まで

待て待て待て待て待て待て待て待て!!

だとしてもなぜヤツらがこの世界にいる!?

この次元にいる!?

おかしいよね!?

だつてこの世界には生命戦維はない筈でしょ!?

そんな事を考えている間にドンドン黒スーツの奴らが仲間を倒していく

どうやら黒スーツ一体一体がかなり強いのもあるがロストって奴が持っている右腕につけている腕輪によつて学園にいるみんなの魔力と光力が使えなくなつているらしい

だがカズくんはそもそも光力も魔力もないから関係ない

だからこそ突撃したのに

『神器保有者?あれ何で神器が解除されてねえんだ?』

『何?』

『俺様はなあ!!神器の能力を無効化する力を持つてんだよ!!』

『なんだと…』

『いやでも生身で最強の俺様の拳と同じくらいなのに段々押されはじめてきてるつーことは弱くはなつていつてるつーことだなあ!!』

『グアア!!』

『オラ死ねやあ!!』

その言葉の後、吹つ飛ばされて気づいたら旧校舎方面の森林の中にいた

「う、うあ……痛つてえ……」

『あ、カズくん目が覚めたんだね!! 良かつたあ』

『結…………か…………今…………俺はどうなつてる…………?』

『かなり深刻だよまず左眼がさつきの吹つ飛ばしの時の奴の手刀で完全に潰されてグチャグチャになつてる』

「おえ…マジかよ」

『それと右腕を見て』

「…………なんじゃ…………りや……」

『完全に力負けしたね神器ごと碎かて肉が少し剥げてるし骨もこの間程じやないと多分アイツは倒せない』

「…………うん」

『うんやバい』

だから

『だから正直に言うとこれは逃亡した方がいい。逃げながら力をつけてじゃないと多分アイツは倒せない』

「…………うん」

『でもね僕は君自身であり相棒の織目結であり糸目結だ』

だから

『だからこそ君の意見を意志を尊重したい』

『君はどうしたい?』

「俺は…………アザゼルを兵藤を姫島先輩を塔城をグレモリー眷属をついでにその他も助けたい」

『どうやつて』

『正直1番使いたくなかったけど…………これで』

といいながら見覚えのある小瓶を懐から取り出した

『オーフィスの蛇!!』

『そうこれをこうして』

と言つてキュポンと2本の小瓶とも蓋を開けて…………つて

『まさか!?』

「いただきます」

そういうオーフィスの蛇を2匹いつぺんに飲み込んだ
それと同時にカズくんが気を失つた
結 side out

??? side

何処だ……真っ暗で何も見えない
よお!! 来たかようやつと
ん?? 誰かいいるのかな?

ああ!! 僕は大門雄護だ! そして隣のコイツは
?? 雄護だどうも短い間だがどうぞよろしく
えっと僕は

それは知ってるから言わなくてもいい
はあ……

まあ話はいい今は時間がないからな!!
そ、 そうだった

だから本題に入るぞ

ついに遂に戻ります力の一部が
え?

つまり俺になるつてことだよ

それってどういう…………いや思い出した!!
だろ?

俺は俺で貴方も俺でそいつも俺つてことです始まりは俺からでし
たがそこからは封じて

俺になり更にそこから力が使えなくなつて

僕: 俺になつたつてことか

そういうことだ

オーフィスの力はこの身からすぐに消えたけどあの膨大なエネルギー

ギーのおかげで大門_俺雄護に戻れる!!

つうわけで行くぞ!!

はいはいお二人共行つてらつしやい
とりあえず全力で奴を「ぶつ潰す」「打ち碎く」
!!!!

Life 5 大門

前回のあらすじ：やろうぶつ潰す!!

今回のあらすじ：ロスト視点から始まります、何なら視点が何回も
変わるかも

そうかアイツか!!

あのお方が死んでもいいから連れてくるように言つたのは!!
名前は確か……

「おい」

「あ？」

そこで堕天使の長のアザゼル…………だつたかに話しつけられる
「テメエ……ロストだつたか何しにここに来た」

「オッサン……聞いてなかつたのか？すそれともド忘れか？」

「いや確かに聞いただが、お前のさつきの顔は何か思い出したつて感
じだつたろ？違うか？」

「へえ、アンタ鋭いんだな！じゃあ特別に教えてやるよ!!」

「俺様は龍導カズマを連れてくるように言われたんだよ」

「何……？」

「いや、龍導カズマも偽名なんだつけ？確かだ！」

と言いかけたところで森林の方から赤い紅い赫い閃光の螺旋柱が
出現した

ロスト side out

アザゼル side

ロストが何か言いかけたところでオカ研の方向の森林から赤い螺旋
奴
状の光の柱が出現した

オカ研の方向……いや……まさか

【ありえない】

その言葉が心の中で何度も反復する

アイツはあんな事じや死なないのは知つている
致命傷程度

頑丈なのも知つてゐる

だが流石にあんな事だつたとしても動けば死んでしまう可能性がある

だからこそないと思つていた

向こうから草を何かが踏み倒す音が聞こえてくる

そしてヨロヨロとした足取りで足音の主が姿を見せた

「おい…おい…マジかよ…‥‥‥」

そこに立つっていたのは間違いなく龍導カズマの筈だ

だが体の傷が赤い螺旋の渦が出現して消えると同時に次々と治つてい

くあれはなんだ？本当に俺の知る龍導か？

「なんだあ生きてたのかよ龍導カズマいや…大門雄護オ!!」

「俺を…」

「あ？」

「俺をその名で呼ぶなアアアアアアアア!!!」

その叫びと同時に刀が出現する

「テメエは俺の大切な奴らをキズつけた!!兵藤を姫島をアザゼルをキズつけやがったんだ!!」

そう叫び終わつた後、空中に出現した刀を割り2振りの刀へと変わ
り刀のリングはカズマ改め雄護の左腕に巻きついたあと赤いグロー
ブへと変わつた

『記憶の物語』マイメモリ・オブ・ストーリー 第2章【三重奏】トリオズ 第3章【疾風迅雷】ア・ジリティ 2章同時既動!!

すると今度は章とか言い出したと思つたら雄護が3人になりや
がつた!!なんじやそりや!?そして雷雲が出現し3人とも雷に打たれ
て俺でも見えないスピードで駆け出すそれと同時に2振りの刀をそ
れぞれ雄護に投げ本体はグローブに付いてる杭の様な何かを引き抜
いてガントレットの形状に変形させた

「はあ?ああ?!なんだそりや!!」

奴も困惑してるじやねーか!!

アザゼル side out

雄護 side

どす黒い感情が俺に力を与える

『俺』は知らないはずの力を何故か使っている
だがそんな事はどうでもいい

結

『なんだいゆうくん』

2人の俺に簡単なサポート頼む

『OKー!!』

あと

『うん?』

アイツをぶつ壊すぞ

『ああ!!』

まずは黒スーツ軍団を蹴散らす

「オツラアアアアアアア!!」

雄護（B）が刻刀振るう

その瞬間に黒スーツ達がまるで生地がズレたかのように斬れる

「フーーーン!!!」

今度は雄護（C）が一閃して兵藤達を拘束していた黒スーツを断ち切った

いくぞ結

『オウサアー!!』

そしてそれらボロボロの黒スーツを赤核手甲でえ!!!!

「ダツ!!ダダダダダダダラアラアラア!!!!」

殴る!!千切る!!潰す!!

同時に倒した黒スーツが完全に消滅を確認するとそこから赤い糸

が俺の赤核手甲に吸収される

「俺様を忘れてんじやねええよ!!」

ちつ!! 邪魔だア!!!! 今はすつこんでろ偽モン!!

ちつ!! 邪魔だア!!!! 今はすつこんでろ偽モン!!
「追加既動『第1章【O R I G I N】』来い絶影!!」

瞬間、絶影を呼び出し一気に飛び出してきた奴を押し出して行く
これで妨害の心配をしなくていい!!

「なんたい？」

『えーと……ゆうくん（B）の方に6体
ゆうくん（C）の方が4体だ
よ！』

了解!! だつたら一氣に片付ける

「レガシイ」

「一掃するぞ!!」

「りょ」「ラジヤ！」

一
行
く
そ

俺の合図と共に2人の俺が黒スリッパで跳び飛はし1箇所に纏める同時に赤核手甲の指先を鋭い引っ搔き爪の形状に変化させる

必殺!!

戰維喪失

その言

そして2人の俺も消える元に戻る
れる

さて後は

!! 「Prototypeの部隊を倒しただけで調子乗つてんじゃねぞ

「ああ!? そんな事知らねえよ!! ゆつたろ!! お前は徹底的に潰す!!!!」

その為に叫ぶ

「シエルブリツトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

その言葉かつては憧れた人の力だつた
だがもうそんな考え方はやめだ

俺が持つてるから俺の力なんだよ

だからコイツは俺の

「シェルブリット」

咳くようにいい右腕に視線を落とす

そこには幼少期に1番使つていた

信頼していた力の象徴があつた

ただ

なんか黒いな？

『多分さつき使つたオーフィスの力の残滓：つまりは絞りカスだと思
う』

なるほど

まあいいか

「くらいやがれええ！」

「がアつた、何でこんないつ「しゅんで近くまでとでも言うのか？」へ、
へめえ」

「一気に加速して奴の顔面を殴ると奴は忌々しそうな顔で俺を睨む
「だがなあ生憎俺の方がブチ切れてんだよ!!!!」

いくぜ龍導流!!

「必ッ一殺!!【弾丸雨】ダラダラダラダラダララアラアラアラアラア
!!」

「やめ、ぐううああああああ!!!」

何度も何度も俺は奴に拳の雨を浴びせ、奴は悲鳴をあげる
だけどな

「これはお前がなぶつた兵藤の分!!お前がビンタした姫島朱乃の分!!
そしてアザゼルの分だアアアアアア」

「き、ぐ、ごおッ!!」

お前に嬲られた仲間!!そして俺の方がもつと痛かつたんだよ!!

「メだ!!」

絶影の方に殴り飛ばしそれを絶影が上空に蹴り飛ばす

「絶影第2形態に移行」

『Quoooo』と鳴き声の様な再起動音と銀白色の光を放ちながら

「アイツよりも上空へ!!」

絶影の背に乗り、目指すは奴の頭上に行く

そして頭上にいるのに気づいたのか奴は必死の形相で「く、くるなああああああ！」と悲鳴を上げながら無数の魔力弾を放つ

たかな
知つたことわやねえんだよ……………！

絶影を蹴り、シェルブリットの羽3枚

奴の元へ向かう

「来るな!!俺様は俺様!!」

「うるせえ!! 死に晒せ!!」

激情のスパイラルブリッド

そしてその辺に妙」と云ふのは

雄護再覚醒回でした!!

次回は多分イッセーの視点（回想）から始まるかも
尚、下からは今回出てきたアルター能力の解説

誰も3人で分けるアルカリ能力

実力も3分の1で指示出しは3人の内のどれかに居る本体の結か

多樹1の時に使うアルター

第3章【迅雷疾風】

実際は雷と風を操るアルタリでそれによる身体能力強化

某テテイカルさんとの違いで言ふはちよアヒートは遅めにな
るけどラディカルさんより負担はかなり少なめ

発動時のイメージは金色のガッシュュのガッシュュの第六の呪文ラウザルクから

アジリティは確か素早さとかつて意味だつた気が
感想!!下さい!!誤字報告下さい!!（大声）

評価はいいや!!（多分低評価）

Life Final 決別

俺、兵藤一誠は目の前の光景を見て呆然としていた

俺達はいきなり現れた口ストと名乗る龍導と同じ顔した銀髪の男によりなすすべもなく拘束された

最初は俺が全力で殴りに行つた……が拳が当たる直前で俺の禁手化が解除された

まだタイムリミットならあつたはずなのに何で…………!!!!

それを見透かしたように口ストは言った

『俺様の体には神器を無効化する力が備わってんだよ!!』

そう言いながら拳が空ぶつて倒れかけた俺の腹に強烈な蹴りが入られる

その後ヴァーリもひたすら攻撃を仕掛けたがその度に全ての攻撃が技がかき消される

そして遂にはヴァーリさえも拘束されてしまつた
がそこで朱乃さんが奴に近づいて言つた

『貴方、ゆ、ゆうくんですかよね？な、なんで』

『ゆうくん…………？ハハツ!!誰だそりや!?言つたら女!!俺様の名前は口ストってなあ!!!』

そう言つて顔面を平手打ちされ吹き飛ばされる朱乃さん

それを見て俺は怒りが湧き上がる

がそれを見て龍導も激昂し殴り掛かる

それでも当たらぬ………と思つていたが

5発10発と拳が当たる

そしてそれを警戒したのか

今までが遊びだつたと思わせるかのように奴は龍導の体を何度も突き龍導の体からは血が大量に吹き出しそのままオカ研の方の深林に吹き飛ばされて行つた

そしてそれから血だらけで戻ってきた龍導は自身の事を雄護と名

乗り

先程とは打つて変わつて奴を口ストを圧倒していた

あと一撃で終わるというところまでは行つてたと思う
だがそこで邪魔が現れた

『すみませんがロストは申し訳ありませんが回収させていただきま
す』

『誰だテメエ!!』

『私はオルトと申します。以後よろしくお願ひします大門 雄護様』
『ツ!!ザケンナア!!!』

オルトと名乗る相手に殴り掛かる雄護

だがその拳は奴に当たることな空振る

そしてそれと同時に奴らは居なくなつた

『ツ!!クソがクソがクソ……クソがアアアアアアアア!!』

その後叫ぶ雄護

結局俺達は呆然と見る事しか出来なかつた

次の日、今日だ。

あんな事があつた後でも当然学校はある

一部校舎が壊されている部分もあつたがそれ等も全て修復されて
いた

そして教室につくと松田と元浜がこちらに駆け寄つて来た

「おいイツセー！今日、龍導の奴と一緒に来たか!?」

「いや、来てねえけど……もしかしてアイツまだ来てないのか?」

「そうなんだよ!!おかしくないか!?アイツは今まで一番最初に教室に
来てるような奴なのに!!」

「でもゆ、龍導も遅刻する事ぐらいあるだろ……多分」

「いや、でもさ」

「兵藤の言う通りでしょ、アイツだつて人間なんだし遅刻ぐらいする
わよ」

「桐生…………だよな!!」

「おーい!!ホームルーム始めんぞー!!」

とそこで担任が入つてきた事によつてみんなが急いで席に着く

…結局龍導の奴遅刻か?

どこまでは思つていた

だが担任の言葉で俺達は再び固まってしまう

「突然だが皆に朝から悲しいお知らせだ」

「「「？」」」

「今日限りでこのクラスの龍導カズマくんが居なくなります」

「…………は？」

気がつくと俺は口から言葉を零していた

居なくなる？誰が？龍導？雄護が？なんで？

「私も朝、校長や理事長から聞かされた事なので詳しい詳細は知りませんがどうやら彼自身が自分の意思で自主退学届けを出してきたそうです」

「いや、いやいや理由は!?」

「家庭の事情としか」

「…………!!」

「…………!?

誰かと誰かが言いあつてるがもうその時点では俺の意識はそつちには向いていなかつた

何でだ龍導…………分かんねえよ…………

時間も過ぎていきもう放課後

学校も終わりアーシアとゼノヴィア共にオカ研の部室に向かう

「イッセーさん…………その」

「イッセー……」

「あ、アーシアそれにゼノヴィア！大丈夫だつて!!アイツの事だきつと何か事情があるんだろうし訳だつていつも通り」

「イッセー先輩!!」「イッセーくん!!」

そう話しながら部室につく…………と同時に小猫ちゃんと木場が部室から出てきた!!

「2人とも慌ててどうしたんだよ」

「オカ研の部室のテーブルの上にコレが」

と小猫ちゃんが手に持っていた手紙を俺の方に差し出してきた

そこには

『我が友 兵藤一誠とその仲間達へ

雄

護』

と書かれていた

『突然皆の前から居なくなる事をすまなく思う。だがこれから俺がしようとする事とは間違いないお前たちを今以上に危険な目に合わせると思う。だから皆の前から居なくなる事を許してくれ、理解してくれ…………とは言えない。けど今生の別れって訳ではないと思う。勿論、前らの見に危険が起こればすぐ駆けつける。だから一時的な決別…………いやお別れだ。じゃあな元氣で』

「なんだよそれ…」

「イッセーさん?」

俺が手紙を読み終えて思った一言だった

「俺は、俺たちは助けられてばかりで未だ何も借りを返せてねえよ：!!アーシアを生き返らせてくれたのも、お前で部長の結婚式で追っ手が来ないよう足止めしてくれたのも、コカビエルを倒したのも殆どお前だつた!!」

いつの間にか目から大量の涙が零れ落ちていた

「俺とお前は……ダチだろ!!何で何も頼つてくれないんだ!!何で!!」

何も出来ないそして返せもしない俺に俺は嫌気がさした

イッセー side out

雄護 side

『本当にアレだけで良かつたの?』

「ダアアアア!!」

「グベツ」

何がだよ

敵を殴りながら俺は結の質問に答えた
『兵藤くんとの事だよ!!』

ああなるほど

「フンつ!!」

「ドワツ」

更に殴る

良かつたんだよ、アレで

『手紙だけでバイバイはいいと思つてるう?』

ウツザ!!

いい!!それに今、兵藤達の顔を見れば俺はこの復讐をやめてしまうかも知れない…踏みどまるかも知れない…

それだけは絶対やだ

『そつかア……君がいいなら良いさ』

オウ

「これでメだ!!」

「ヒイイイイイ総員退散!!退散ーーー!!」

「逃げんな!!」

六弾一撃

「ヒツサアアアアツ!!」

セクス・オブ・ワン

「「「ギヤアアアアアアアア!!」「」」

「ふう……」

『終わつたカンジ?』

ああ終わつたカンジ

これで渦ヴォルテックス・バンチの団の九州支部は終わつたな

つてかこいつらあのデカい箱を大事そうに運んでたけどなんだつたんだ……

『さあ?中身を調べてみたら』

そもそもそうだな

俺は両腕のシェルブリットを解除して箱に近づき蓋を開けた

…………ええ?

『ああ……これは面倒事の予感』

…………だな

中には巫女服を着ていて金髪に狐の耳の様な物を生やした小学生位？の少女が寝息をたてていた

第1部覚醒の赤と緋

完

次回、第2部始動

第2章 激情の化物 第1節 獣滅旅の狐姫篇

Life I 狐少女との邂逅

え～とまずは自己紹介だつけるか？

俺の名は……雄護だ

そして俺の中にいるのは織目結こと結

現在、リゼヴィム・リヴァン・ルシファーを殺す為に禍の団と似たような名前で暗躍している『渦の団』の日本支部を潰して回ってる。なんでかつて？…………なんでだつける？

『いや、向こうから突つかつて来たから君が強くなる為に潰す的な事を言つてたじやん』

そうでした、そんな理由でした

結果としてはまあアルターの使い方ボチボチ思い出して来た感じついでに現在、渦の団の九州支部は壊滅させたのだが…………面倒な事になつた

九州支部組の奴らが運んでいた、でかい箱の中を調べると巫女服らしき物を来た金髪狐耳のおおよそ小学生と思われる少女が寝ていた
あ、狐のお面発見…………じゃなくて!!

え？ 何？ 渦の団＝ロリコン集団って認識でいいの？ これ？

「ん、んん」

お、起きそう

「ん、あ？…………へ？」

巫女服狐耳少女視点

自分を攫つたと思われる者達がボドボド

目の前に自分を覗き込んでいる黒のグラサン掛けてる輩

「…………逃げるのじやあアアアアアア！！」

巫女服狐耳少女視点（予想）終了

「あつは！ ですよね…………」

そら少女視点から見たら明らかに俺は攫つたヤツらよりヤバい奴だもん

いやあしようがないよ…うん…しようがない…

『自分で言いながら落ち込まないでよゆうくん…』

いや、だつてこの俺としての記憶は完全に思い出したよ?うん、ただ同時にあつちのもう1人の??の記憶も少しだけ思い出しちゃつたんだよ

バケモンじやん

『せやな w』

軽いよ反応がよおおお!!

『というかいつまでもグズグズしてんなよゆうくん!!あの子がどつか行つちやうぞ!!思い出しんたんだろ!!僕たちのモットーも!!』

困つてる奴は

『助ける』

特にガキは

『助ける』

何故なら

『子供は善にも悪にもなれるから』

ハア…分かつたよ結

『ならば良し!!だつたらあの子のところにとつとと行け!!』

はーい

足に力を溜めてスタートダッシュの要領で……!!

パン!!

でスタッツと華麗?に着地

「少女何かお困り?」

「不審者アア」

「アダツ!!」

顔面殴られました

なんなら「フー!!」つて警戒しながら火の玉出てるんだけども?何それ?何これ?少女怖!

『いや、知らない男に話しかけられたらそうなるでしょ』

そもそもそうだな

というかこれはもしかしなくても

「テメエ!! ソイツを何処に連れてくつもりだア!!」

「!!」

『ヤツコさん起きちゃつたじやん』

はやすぎないか？起きるの？

「バレる位なら!!」

起き上がつてすぐに思考巡らせて魔力弾連射とかつてか魔法使いかよ!!

「チイ!!」

「な、何を」

少女が言い終わる前に魔力弾と少女の間に割つて入り魔力弾を食らう

イツツア～

「お、お主」

「少女怪我は？」

「な：い」

「ならよし!!俺の名前は雄護だ!!少女名前は?」

「九重：じゃなくて」

「よし九重じゃあここから動くなよ1歩も!」

「ちよ、待つのじや」

「とりあえずアイツはぶつ潰す!!

魔力弾のせいで破けた服の怨み!!

Life II 何気ない契約

前回のあらすじ お互いの自己紹介、渦の団九州支部残党復活!!

今回の粗筋 顔面崩壊（九部残党）

「おい、二度とこんな真似すんなよ」

「はひ!!（はい!!）」

「次やつたら…」

現在、九州支部残党（以下九部残党）をボコボコにして脅してます
分かるように言うと先程のセリフの後に無言でシェルブリットの
第1状態で腕のカバーをガチャつとワザと目の前で開いてます
「ヒイいいいはずみまんせんもうじまぜんのでゆるひて!!」

「本当か？」

「ほ、本当です!!」

「なら以後悪さをしないこと…………あ、しても良いけど次突っか
かつて来たら命がないと思えよ（*^-^*）？」

「はい!!」

反省…？もしたようだし？行くかー…………あつ

「九重はアイツらに用ないのか？」

「いや、というよりあやつ大丈夫なのか？」

「（自業自得だから）大丈夫でしょ？」

「ええ…？」

九重さん九重さん、その『うわあドン引き』みたいな顔やめません
？

なんか俺が悪いみたいじやん

『実際必要以上にボコつてるからゆうくんが悪い』

ええ…？

「じゃあ九重？ちゃん？さん？様？殿？嬢？行きましょうか」

「何処につ…て!!名前のあとをつけ過ぎじゃ!!そんな呼ばれ方するな
ら呼び捨てでいいのじゃ!!」

「そうか？じゃあ九重まずは朝の腹ごしらえと行こうか？」

ニヤッと笑い彼女に手を差し出す

現在ファミレス

実はアイツら発見してボコしたのは朝の五時だつたりするのだが
……

めっちゃ食うやん…奢りつて言つた後からめっちゃ食いますやん

九重ハン

今までドンだけ飯食えてないかがコレで分かるな!!（分からない）
そして飯食いながらも分かつたのは

「つまり九重は家出したら何者かに背後から気絶させられ気がついた
ら」

「体が縮んでいた!!じゃないからの…」

「まあ京都妖怪のお姫さんってのには驚いたがな」

さすがにそこまでは予想しきれなかつたがよくよく考えてみると
まだ子供である九重の利用価値なんてアイツらからしたらパツと思
いつくのは2つしかないしな

1つは九重が何かしらの強力な力とか異能を持つていてるから攫つ
た可能性

これは洗脳すればどうとでもなるしな!!トーシロの俺だつて似た
ような事出来るんだし!!悪の組織的な奴らが出来ない筈は無いよな
!!（無茶振り）

2つ目は身代金目的の攫い

まあ普通に考えれば今の話聞く感じこつちなんだよなあ…

『ゆうくんそれでこの子どうするんだい?』
決まつてる

「なあ九重?」

「ぬ?」

「いや、返事する前にご飯飲み込んでからにしてくれ」

「飲み込んだのじや」
のじや!!

「フフッ、まあいいで九重」

「なんじや雄護?」

「お前、俺と契約しないか?」

『契約?』

いや、なんで結が…………めんどいし説明続けるか

『うおい!!』

結が抗議の声をあげた気がするが気の所為だな

「で契約内容は【九重を京都の家まで五体満足で届けること】」

「五体満足?」

「頭、腕、胴体、足が全部無事な状態で」

「なるほど…………お願いするのじゃ!!」

「おい、まだ報酬の内容言つてないぞ」

「報酬?」

「当たり前だろ?俺はタダ働きはしない…………しない!!」

「何故2回…?そんな事より主が望む報酬とはなんじや?」

「俺の望みはたつた一つ…………お前から何かを貰う」

『ヘタレたね?ゆうくん?【京都妖怪のお姫さんならたんまり報酬貰えるだろうと思つたけど現状保護者がいない子にそんな契約させるのつて詐欺師じゃね?】って思つてヘタレたね!!』

うるせえ!!ダメッテロ!!

「それで契約するのしな「するのじゃ!!」だからもうちつと考えて結論出そうよ!」

「いいやしつかり考えておるぞ報酬はこの面じゃ」

と言つて頭に載せてた狐の面を見せてきた

「ええ……「ダメなn」いやいいよ「良いのか?!」」

『ゆうくん?』

「だつてそろそろこのサングラもボロボロになつてきたしな」

「ひつ」

チラツとサングラズらすと怯えられた…………傷ついたわー

「まあいいやじやあこの契約書にサインして」

「名前を書くのじやろ!!それぐらいなら私も分かるぞ!!」

なんだこの可愛い生物

はあ～さてさてどういうルートで京都まで行こうかな？

Life III 激情噴火

前回のあらすじ 頬面崩壊（多数）、九重との契約
今回のあらすじ ……は？

九重と契約を結んではや1週間が経とうとしていた
そろそろ京都に着いてもいい頃なのだが……まあ案の定という
か

まだ辿り着けてはいない：理由は簡単!!

追っ手を潰しながら（文字通り）各支部も潰してゐるから（被害甚大）
正直かなり面倒臭いけどこれが1番早いと思ひます（ほんとお？）
実際追っ手が増える一方ならばもう各支部を潰すしか道は無いの
だ

その甲斐あつてか、アルターの感覚や使い方も思い出し大分身体に
馴染んできた…………のだが…………

「うーん」

「雄護？」

『ゆうくん？』

シェルブリットだけがまともに発動できないのだ

大問題である

主に刀以外の近接戦闘方法は殴る蹴るなのにそれが1番向いてる
アルターが発動時間が短すぎるのだ

1分持てばいい方で、10秒がシェルブリット第1形態の基本展開
時間になつてる

短え!!

九重を見つけた時に使つた技もシェルブリットが10秒しか持た
ないのでほぼ必殺技の様な使い方だ

原因としてはあの時1番オーフィスの残滓を吸収していたアル
ターだつたからだろう

それにまだ第2形態にマトモに至れてない

一度だけコカビエル戦で大量のエネルギー？オーラ？を受けて復

活した事によつて朧氣ではあるが至つてはいる

つてことはなんかドデカイエネルギーを吸收すればいけるか……

?

まあいいか

「雄護」

「ん? どうした?」

先程までの考えに一区切りつけた時にちょうど九重が話しかけてきた

「雄護は何故名字がないのじや?」

「!!いやそれは…」

唐突!!

「それとも名字を名乗りたくない理由でもあるのか?」

「……………そ…う…だな…まあ九重にならいいか…………昔話を

しよう

「うむ?」

「昔、ある力を手に入れた少年がいたんだ。それは少年が憧れた人と同じ力だつた」

「ある時、少年の友が暴漢に襲われそうになつたことがあつたんだ…その時に少年は力を使つて友を…少女を守つてしまつた」

「それで正義の味方にでもなつたつもりなのか今度は悪魔に追われる人を助けた」

「そしてその人達が悪魔たちに認識されなくなるようにもした」「だから、そんな大きな力を考え方無しに使うから」

「その力に興味を持った奴に両親を殺されていた」

「トレーニングをして家に帰ると悪魔によつて夫妻が殺されたた」「悪魔が言うには『俺の力』が気になつたそうだ」

「そしてその間に暇つぶしでもするかのように夫妻は殺されてた」「最初は家を間違えたかと思つたよ」

「だつて家中が血で真つ赤に染まつてたからな」

「そしてそれを見てその悪魔に叶わないと分かつて少年は逃げ出した……そして少年は死んだよ」

「それが雄「確かに昔話するとは言つたが『俺の話』とは一言も言つてないぞ!!」おい!?

まあ今の俺はその時の俺じゃないから確実に『死んではいる』よな
もう既に龍導が混ざってるしなんなら本来の俺もちよつとずつだ
が混ざり始める

だから問題はない

ただ元の姿に戻つていくだけなのだから

「H A H A H A !!」

「私の!! 心配を!! 返せ!!」

ポカポカと九重に叩かれる

カワイイ

ふとその姿が漆黒の少女とダブる
そういうやオーフィスは元気かなあ
絶対怒つてるだろうなあ

怒つてと言えば黒歌さんもだろうな
あとは多分グレモリーの奴らは心配してんだろうな
自分達がいつも大変な癖に

「なんだ九重は心配してくれてんのか?」

ちょっと笑いながら九重に言うと

「当たり前じやろう!! だつて私達は…………」

「私達は?」

「と」

「と?」

「と、と、と、」

「うん」

「…………友達じやろう?」

『やつたねゆうくん友達が増えたよ…………ゆうくん?』

言葉を失つた

友達…………友達があ…………

少なくともこの一週間近くの旅で九重は俺の事を友達だと思つてくれてたのか…………

俺はどうだ？俺にとつての友達の定義ってなんだろう？

…………一緒にいるだけで楽しくて、心が安らぐ様な存在
じゃあ九重は？

……決まってる

「心配してくれて……そして友達だと思ってくれてありがとう……俺も九重の事を友達だと思つてる」

「じやろ!?」

「じやろ w」

「笑うなー！」

九重はカワイイなあ

『うわあ…』

おい、そこ小声で引いてんじやねえ!!

「はあ、まあいいやとりま九重」

「なんじや？」

「さつき解体した奴らで最後だからあとはまつすぐ京都に帰

ズチャ

…………だ…………？

あ？

『しつかりしてゆうくん!!』

何が起こつ……た？

『気をしつかり保つんだゆうくん!!』

今どうなつてる

このドスグロイ液体は何処から出てきてる

声が出ねえ……右腕の感覚もねえ……どころか色んな感覚がしなくなつてきてやがる…………なんでだ…………？

『ゆうくん九重ちゃんが!!九重ちゃんが!!』

というか周りの一般_{雑音}人共がうるせえ

『九重ちゃんが攫われた!!』

は？…………あ？

今なんて言つた？九重が攫われた？なんで？いやいや

「ふざけんなよ」

前々回は死なせて前回は怪我させた

そんなに何度もダチを傷つけさせてたまるかよ……
ホントに……

「フツザツツツケンジヤネエエエエエエエ!!」

その時俺の中に学園を去る前にあつた醜悪な赤く黒い力がこの身
を駆け巡った

Life IV 神衣の力

前回のアライザライ 濑死なんだなこれが（

☒

??

☒

）
今回あらすす 「笑わせんな!!」

急いで追跡する

なんだこれ？

傷が治つてやがる……なんでだ？

それに身体が今まで以上に軽く速く動ける!!

『これは…………あの時の力だ!!』

あの時つて言うと……

『オーフィスの力で記憶が戻った時に至つた形態だよ!!』

なるほど

というか今まで見えてなかつた左目も見えてやがる!!

しかもこの感じもしや

『うん!!まるで僕の視界がゆうくん共有されてる見たいだ!!

すつげえー!!（小並感）

言うなればこの状態は【神衣モード】!!

…………ん?…………まあいいや!!

今は九重を攫つた奴を蹴散らかす!!

『見えた!!』

アレは…ドラゴンかよ!!

というか認識改変してねえから一般人にガツツリ見られてんじや
ねえかよ!!

チイツ!!結!!ここら辺で戦闘しても問題ない場所は!

『ちよいまち!!えゝとこはダメでアレもダメでこつちは…………あつ
た』

よし!!

結（の『絶対知覚』による）ナビ開始!!

『ここから6つ先の交差点を左に曲がつて突き当たりにあるゴミ処理
場の更に向こう側にある廃工場!!』

よくやつた結!!…………しかしどこにでもあるな廃工場!!

『そだね』

まあ、それはそれとして

『吹つ飛べ!!』

『G r o o o o?』

『おつとど…セーフ!! ゆうくん九重ちゃん無事だよ!! 無傷！無傷！』

一気に黄色のドラゴンに追い付き頭を蹴り飛ばし、それと同時進行

ドラゴンが手放した九重を回収した

怪我はないのか…良かつた……

さて、もう一発!!

『くらえ!!』

廃工場内部に相手をシューーー!! 超エキサイティング!!
…………何考えてんだろ?…………結

『うい』

更にもう一発!! ドロップ

『キーーーック!! ……ヌエ!?

結が驚きの声をあげる

そもそもその筈、何故なら今しがた放ったキックが（全能力中1割の力とは言え）片手で受け止められたからだ

とりま九重をアルター結界最大出力で守らねば

「テメエいい度胸じゃあねえか!!!」

(^ _ ^ = ^ _ ^) おつおつおつ?

ドラゴンさんブチギレ?『キレイてるね!!』

ドラゴンさんブチギレ?『ブチギレだねえ!!』

「何がオカシイんだよおい!!」

奴の拳がコチラに向かってくる!!

それを躊躇あつぶねええええギリギリじやんけ!!

忘れていたがアイツ普通に俺たちの5~6倍の大きさの体格をしているのだ

「避けんじやねえ!!」

やだね!!

「なんか喋れや!!」

やだ……は?

現在行進系で喋つてんだろ?

何言つてんだ? はつ倒すぞ!!

『ゆうくんゆうくん!』

なんだい?

『さつき復活してからまだ一言も口から発してないです』

ま?

『ま』
マジかあ…

『それと』

ん?

『今更だけど刀はさつき何処かで落としちやつたしアルター能力もあと1回しか使えないよ』

……………はあ?!?
な、な、な、なんでえやあ!!

『だつて体の1部を治したのに1回でしょ?』

『僕が【絶対知覚】を使ってその後【マッドスクリプト】を使っての認識阻害で2回で合計3回』

『そしてさつきのアルター結界で1回の合計4回』

『更に未だ成長途上のゆうくんじや』

5回が限界…いや正確には5回以上発動できても身体に（想像以上）の不可が掛かつてまともに戦闘出来ないって事だろ?

『そうそう』

つまりステゴロで戦えと…………既に致命傷治したせいで疲れるんだが? 無茶では?

というか今もこんな会話をしてるが奴の火炎弾避けるので手一杯ぞ???

『そんなこと言つてもしょ、あ、待つて……ハアツツツクツショイ!!』

ビチャビチャビチャビチャ

ヒヤアアアアアア!? 背中がゾワツときたつ!!!!

何？クシャミ？というかなんで背中に！結さん俺の背中に鼻か口でも着けてんの！？

『へへッゞめ……』

え？どつたの？ってかドラゴンの動きも止まつたんだけど？

『ゆうくん』

またなんか起きました？今ならそう並大抵の事じや驚かんよ（フラング）

『背中見て』

俺の？なんでま『いいから!!!』分かつたよ

そう結へ返事をし、背中を見ると

羽、羽、羽、羽、というか翼

え、なにこれ？メタリンウイング？あれ？でもあれコカコツコーと戦つた時に壊れなかつたけ？というか翼多すぎて後ろがほぼ見えないんだが！？

『いや、これ墮天使の翼じゃない？』

ンなわけ（笑）

…………いや、有り得なくはないのか？

？の記憶からして俺の本来の能力的には出来なくはない感じだな
だとしても要因はなんだ？

『考へても分からぬなら後から考えよう!!』

せやな

というわけで喰らえダイブキック!!

「G r o o o o o o o o o !」

当たつた時の悲鳴だけがドラゴンっぽいの草

「テメエ鴉か…通りで不意打ちがよく決まる」

といきなりドラゴンが起き上がりながら喋るが知つた事か
というか奴の方が先に不意打ちしてこなかつたか？

「そろそろ黙つてないで何とか言つたらどうだ？アアツ!!」

スルゝ

あつ!!

『どうしたの？』

いや墮天使の翼があるって事は墮天使の力が使えるので？

『そうだね？』

つまり光力もつかえるのでわ？

『そうかあ？』

やつてみよう

まず槍でもなんでもいいから光力で光力、光…………

『小さいね…』

確かに…

手のひらにはソフトボールより一回り大きいくらいの光球が出現した

これ使うならステゴロが早いわな

『ちよ、ゆうくん!!』

あ？ガツツツツツツツツツツツツツツ？

…………次の瞬間工場の壁を突き破り、裏のゴミ山？みたいなところにまで殴られ一気に吹き飛ばされた

クツソ油断した……

「驚かせやがつて！たかが天使ごときがこの最強の龍であるこの俺!!!!
ガルマ・アドラズヴィルに勝てるわけやねえだろ！！！」

やばいフラフラする…ちよとこれは…：

『早期決着せねば』

ホントにな…だから行くぜ？結!!

『オウサ！』

その場で足に力を込め全力で地面を蹴る

「必殺」

声と言えるかどうか怪しいものを発し一気に奴…ガルマに迫り両腕に先程の足と同様に力をただ込める全力で!!!
それと同時に両腕にシェルブリットを纏う!!

「弾丸雨うううううううう!!」

一撃、二撃、三撃、四、五、六、七、八、九、十、十五、十八、

「はああああああああああああ!!」

二十撃目を叩き込む!!

呴ふそれでモーれて

紅茶ノレバ

激情のスノーケルアリーナ（六強一撃Version）

力の土手の脇に両腕を突き返す
ノニノダリソ、の既に段目之終之解

ジニルアリットも既に役目を終り解説されてしまつた
ガルマは虫の息だがこつちもかなりやばい

「へへッそんなもんかよ!!!」

そんな事なかつたわ

『うい?』

光大

スマシありやウノギツミ!

光力を右拳に載せがガルマの顎に目掛けて拳を放つ

光彈

ドサツと音ともに

やつと倒れたら『やつと倒れた』

やつとという程の時間は流れとはいが致命傷から復帰した後の相手としては面倒くさすぎるのだなので俺と結の意見が被んのはしようがなし

あつていうかやばい眠い

『ゆうくん!! やつとアレの解析終わつたみたいだよ』

そうかじやあ後は頼んだ

その前に

九重に使つてたアルター結界をガルマに使つて動きを念の為封じ

2

じやあ頼んだおやすみ・結

『うん!!任せて!!おやすみゅうくん!!』

その言葉を聞き届け俺は意識を失つた

だが意識を手放す直前に一つだけ思い出したが

「さつきが初発動じやなかつたのね…」

神威モードを発動する?が居た

俺

Life V 旅の終了は契約と共に

前回のあらすじ おやすみ（図の図）

今回のあらすじ 契約があひやあああああ!!
起きたら知らない天井でした

とりあえず上半身だけ身体を起こすとわあ

布団の中のオイラの体が包帯だらけだア!!（小並感）

特に両腕がぐるぐる巻きになつて痛てえ

見た目的にはアレ、漫画とかにある手の先まで動かせないくらいに

包帯が巻かれて元の腕の数倍に大きさになつてるやつ

というかなんで布団の上で寝てんの?

結の事だからどつか適当な所に行くと思つたが……見た感じが完璧に和のお屋敷なのだ。

まあいいかとりあえず誰か呼ぼうかな?

5時間経過（？）？

…………（。△。）ハツ！一度寝してたやべつ

んお九重…つて寝てんのかよおい！

まあいいや起こすか

「九重起きてくれ」

…………ああ…やつぱりね…何となくそんな気はしていた

だからだろうな戦闘中自分でも喋つてないことに気づかないのは
…いや、気づきたくなかったのか……

声が出ない

さつきの言葉も喋るだけでそうとうキツい

なるほどね…アルターで体を直すとこうなんのね：

多分喋ることはギリギリできるって事は声帯はあるんだろうな

……

まあ、これくらいの事で一々しょげてもしようがない
でも殆ど声は聞こえないからと言つて喋れないのも困る

……………せや ハート・トウ・ハート 夢 を應用すればいけるんぢやう?

思い立つたが吉日!!じやあやつてみつか!!

先ずは首に巻いてある包帯を首輪かチヨリカートでもアルタリで
変えてそこ夢の能力を植え付ける…

よつしゃできた（，ω，）？

じやあ早速九重に呼びかけてみるか？……………イケるか？

『九重の起きろ』

手応えあり！出力最大でイケるのか効果反転

通常 ハート・トウ・ハーツ 夢 は相手の意思を読み取るというものだが今回はその

応用で俺の意思を相手に直接届けるといふことだ

廻用といふが充満力が

『起きろ、起きないと一えーとほつペグリグリするぞー』

それまつペグリリグリリグリリグリリ…起きねえ

「痛いのじゃ!?」

《お、やつと起きたか》

多少九重のほつぺが赤くなつてゐる氣がするがスルーダ

「おはよう九重」

ありや？ 放心してる？ なん

うおつと抱きつかれたというか突進された

『ごめんな心配かけて』

「雄護、雄護、雄護おおお」

『泣くな、泣くな、気持ちは分かるけども』

「わかつてないじやろ!? お主4日間も眠り続けたのじやぞ!!」

『それは普通にスマン』

なるほどあの龍しばき倒してから4日間眠つてたのね
まあ、怪我より単純に疲れが溜まつてたんだろうな

『九重、ところどころは何処なんだ』

「?、私の家じや」

なるほど……ん?

『じやあどうやつてここに来たんだ?』

「覚えておらんのか?」

『ちよつと疲れてたせいかまだ記憶がハツキリしなくてな』

「あの後雄護が私を起こしていきなり『家の事思い出して今すぐ!!』つて言つたから家の事考えてたらいきなり入口門の前まで来たのじや!!しかもその後雄護は急に倒れるからびつくりしたんじやぞ!!」

『ああ……スマン』

多分オーフィスの残留粒子?パウワー?的なアレである

そもそも何故結があの時【絶対知覚】を使ってたかというとそれはオーフィスの残滓を解析して貰つてたからである

そしてその理由は転移術……所謂ワープやテレポーテーションを使える様にする為だが

話を聞く限り結果は成功のようだ

(だつたら)

とりあえず九重の頭の上にある狐の面を手を使わずに手元に引き寄せる

「のじや!?」

『キツツツツイ!!』

キツツツツいが!?

集中力とか力とか色々持つてかかる感じだあ!!

『とりあえずこれ貰つておくな?』

「な、なんじゃ今のは!?」

『超能力？的な？』

他に何も思いつかなかつたしとりあえず誤魔化した
で、後は……

『九重』

「ぬ？」

『俺の両腕の包帯をとりあえずとつてくれないか？これ着いたまんま
じや何も出来ないからな』

「で、でも雄護その腕は」

『何となく分かつてるから…自惚れかもしけんが何度も俺の為に
落ち込んでくれんな！』

「雄護…」

『それに九重は笑顔の方がカワイイしな』

「カワ、恥ずかしいからやめるのじや!!』

『へいへい』

そう何度も顔を曇らせてもらつても困るしな
それから両腕の包帯を徐々に九重が解いてく
そして完全に包帯が無くなる……

そこには無数の亀裂が入つてた

特に右腕が酷いが確かこれは……アルター痕だ

九重が俺の腕の包帯をとるのを躊躇つた時点で予想出来た
だからそんなにショックはないがチョイと腕が動かしにくいのが
難点だな

それと

『九重実は1つ頼みがあるんだが』

「どうした？」

『ええと実はな』

…………よしつとここでの用はこれで終わりかな

『じゃあそろそろ行くか』

「もう行くのか!?まだ起きてからそこまでたつてないじゃろ!?」

『いやあそれが俺三大勢力から特に堕天使の組織のグリゴリから指名手配されてるから』

「初耳じゃが!」

『言つたら九重は心配するだろ?だからな……それに九重の親御さんには会つてないけどここまで処置してくれてるんだからいい人だろ?それくらいは分かるさ』

『………だつたら今度は私が雄護を守るのじゃ!!指名手配されてるならここに居ればよかろう!!お母様も私が説得するからだからだから……』

⋮

『…………ありがとう九重嬉しいよ』

「!ならば!!」

『だけどそれは無理だ』

「なんで?なぜなのじゃ!!」

『俺には九重と同じくらい大事な友がいる…………そいつらは危なつかしいからな…完全に守れるだけの力を今のうちにつけたいだからもう行かないと』

「大事な友……」

『ああ、だからそんなんに泣くな!!大丈夫!!お前やここの人達がピンチになつたら必ず駆けつける!!ピンチになつたらもうダメだつて思う前に俺の名前を呼んでくれれば絶対に守り抜くから』

『それに今生の別れじゃないからなその内また来るさ』

「…………グスツ、約束、じゃぞ?」

『オウヨ!!だから俺からも最後に一つだけ頼み事だ』

「……なんじゃ?」

『その内…多分だが、三大勢力の使徒として髪がプリン色の堕天使の親玉か煩惱だらけの茶髪で俺の同い年の奴らが来ると思う!その時は話をしつかり聞いてくれ』

「その頼み承つたのじゃ」

『ありがとな』

最後に九能の頭をめいっぱい撫でる

『じゃ、またな』

「うむ！またなじや！雄護」

笑顔でコチラに手を振る九重を見ながら俺は京を旅立つた

第2節 指名手配のレインフォックス篇

Life I レインフォックス&ブラック

「そういえばみんな」

「どうしました？ 部長」

「それはある日の部活終了後の出来事だつた
「帰りには氣おつけておいてねここら辺…………ではなかつたけれど
どうよら良くないものがいるらしいわ」

「良くないもの……？」

部長の言葉にアーシアは小首を傾げる

というか良くないものって具体的には何なんだろう

「部長、その良くないものとは？」

木場が質問する

「良くないものと言うより『良くない輩』かしら？」

「なんでも魔王様……お兄様から聞いた話なのだけれどもここ数週間
位の間に悪魔や魔法使い…………そして果てには『禍の團^{カオス・ブリゲード}』を無闇
矢鱈に倒してゐる輩がいるそのなによ」

禍の団を！いや、倒してくれるなら俺的には万々歳だけど悪魔と魔
法使いも無闇矢鱈にね…………あれ？ひょつとしなくとも俺達もヤ
バいのでは？

「外見は全身を包む黒いレインコートを身につけていて顔には狐のお
面、右手には刀をもつてゐるらいしわ」

「特に悪魔と魔法使いで倒された者のその殆どは賞金稼ぎや腕試しに
襲いかかつてゐるらしいのよ」

「幸いこちらから手を出さない限り襲いかかつてくる事はないらしい
から見つけても向こうからコチラにコンタクトを取ろうとしない限
りは極力無視、戦闘になつてもできる限りは逃亡してちようだい」

「分かりました！」

「特にゼノヴィア」

「わ、分かりました」

名指しで注意されるあたりアイツみんなから戦闘狂って思われて
んだろう…それにもお面に刀…………まさかな……？

どうもー最近レインフォックスとかいうなんも捻りもない名称で
指名手配されてる龍導雄護『テーす

『そしてその相棒の織目結『デーす』

2人合わせてー

『え?』

いやふざけてみただけ

『なんだよー（ □ ・・。・ □ ）』

いやーそれにしてもうん…………

【渦の団】 支部ほぼ壊滅 (*^_^*)

『いや他人事みたいに言つてるけど君がやつたじやん』

『しようがないね支部長や構成員がなかなかに厄介だつたからね?』

兵藤達に手を出す前に潰しとかないと

『アザゼルやサーゼクスさんからしたら大迷惑だろうねえ?』

しょ、しょうがないね(震え声)

さつきも言つた通り一人一人の構成員が厄介だからそこにポイ

する訳にもいかないしね

さてさてそれはそれとして

そろそろ兵藤達の試合があるから観ようぞい

『確か若手悪魔のN.O. 1を決めるレーティングゲームの試合だつけ
?』

それそれ

『雄護先生の明日からできる簡単異界観戦方』

『長い長い』

まず手始めに【絶対知覚】を発動します

『うん？普通に無理だね？』

次に手短な機械のWi-Fiを付けたり消したりします

『スマホやパソコンでも可』

そしてWi-FiのON/OFFを繰り返すことでネット回線そのものを感知します？

『下手すると1番重要な所で疑問形』

そこに不可解な回線を数本見つける事が出来ます

『もしかしなくても説明面倒くさくなってるでしょ？』

そうすればこの様に…………うん？

『どした？』

いや今悪魔側の試合中継ジャックしたんだけど見えない

『……つまり』

これは兵藤達がピンチの可能性が高いね

『一応聞くけ《勿論行くぞ》ですよねえ……』

兵藤達も助けられて尚且つ強い奴がいれば倒して実力もあげられる一石二鳥だろ？

『そうだねー』

適当に流すなよ～まあいい

『【絶対知覚】出力最大で全開!!』

これで兵藤の位置を探る

『兵藤君魔力オーラ発見!!対象を座標認識としてロック!!』

行くぜオーフィスワープ!!

Life II 加速する危機

オーフィスワープ!!

.....失敗クセエ!!何処だここお!?

『失敗?あれ?おかしいなあ?』

座標超転移術

通称：オーフィスワープ

兵藤が読んでたドラグ・ソ……ソ、あつボール

ドラグ・ソボール原作D×Dに出てくるドラゴンボールの所謂パロディの主人公が使つてた瞬間移動に近いというか多分まんまそれ

『そう。だから失敗するはず無いんだけどな?』

現在進行形で失敗したせいでなんかよう分からん敵を切り捨て御免祭りだが?

なんだ?羽の形状からしてコイツら悪魔か?

てかなんか俺以外にも戦つてね?あれは.....

『ジジイがコカビエルよりでかいオーラ放つてる槍ブッパしてて草』

確かに誰なんだあの「ぬう?新手か!!」槍こっちに投げてきやがつたぞあのクソジジイ!!??

『新手じやない!!』

刻刀で瞬時にたたつ斬る.....無理だ硬え!!

ならば弾く!!

ギンツという金属を勢いよくぶつけた様な音をたてたあと勢いは落ちなかつたが軌道が逸れて俺の後ろに飛んでいく

「ほうやるな若造……ならばもう一度」

と言いながら今度は槍の巨大なオーラをコチラに向けて発射ッ!!

『アブソープショーンシールド』

読んで字のごとくオーラを盾で吸収ウウウウ!!よつしやいけたア!!

というか

『バカヤロウ!!危ねえだろお!!』

「このワシの武器グングニールの一撃を受けて尚健在か面白い」

面白いじゃねえ！…つたくことしてた場合じゃねえのに!!

『おいクソジジイ!! 兵藤達は何処だ』

なんじや貴様奴らの仲間か』

それならホレツとジジイが指さした方には神殿？みたいなものが建つてゐる

あそこに行つたのか

だからな
だつたらさつさと行くか…………さつきから嫌な予感がマシマシ

そう思い走り出した正にその瞬間に

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

『なんだ!? いつたい何が起きてるって いうんだ!!』

結が示した方を

緑が元しが方を見るとやうに口の如く真一歩いきに火も燃え
がつてしまいそうな極大のオーラを纏つてる奴がいた

《兵藤》

『 ゆうくん何か、何か言つてる 』
それは俺がよく知る人物の筈だつた……が明らかに様子がおかしい

『何かつてなんだよ?』

『ここからじや声が拾えないけど……あの感じからして呪文?』

る様なタイプじや》

なんだ……呪文……赤龍帝の籠手……血のようなオーラ

『まさかつ!?

そんな！力とし力に向更二ノハシナガモの発動しそうに行けよ

やめつ

アアアアアアアアアアアアア
禍々しく刺々しい赤き霸龍が存在して
いた

!!!』

Life III 衝突の赤と赫

アレは

『あ、誰か極太レーザービームに打たれて吹き飛ばさ』

『アレはダメだろ!!』

『ふえ?』

結が驚きの反応を示すが今はそれに構つていられない

『結、【絶対知覚】だ、それ使つて原因を探してくれ』

絶対アソコまでなつた理由何かある筈

さつき吹き飛ばされた奴?あんなのあつたとしても理由その1だ
何か別に本命があるは

『雄くん!!』

『どうした?』

『アルジエントさんの気配がない!!』

クソツ!!それで覇龍化か!!

『結は引き続きアルジエントさんの気配を探し続ける!!』

『雄くんは!?』

『俺は兵藤を殺してでも止める』

『分かつた!!』

結にそう伝え俺は駆け出す

両腕にイメージしろ……!!

『銀色に輝け!!シェルブリットオオオオオオオオオオ!!』

その言葉に続くように俺の両腕が一瞬輝き光が止むとそこには銀色のシェルブリットが装着されている

現状使える中で1番強い、シェルブリット更改

『兵藤を捕縛しろ列迅砲!!』

両手を握手をするように握り込み更に両肘から生えてる列迅を腕事グルグル巻にして1つのデカいロープイメージして兵藤の方に飛ばし

『肆連線刈結!!
(ヨンレンゼンカラムスピ)

『グラアアアアアアアアアアアアアア!!!』

先端から4本の列迅に分離させて様々な角度から球のよう^に兵藤
覆い

さあここから本命だ……だからもてよ俺の体?

『【N R ハンマー】【グレートピンチクラッシャー】【アルター・エイリ
アス】3つ同時既動』

『グアウ!!』

「ガアアアアアアアアアアア!!」

発動し瞬間直ぐに俺の身体が地面に押し潰さそうになるそしてそ
の間に兵藤を【N R ハンマー】と【グレートピンチクラッシャー】で
ボコ殴りにする

俺自身は【アルター・エイリアス】によつて圧力をかけるそれによつ
て兵藤による吹つ飛ばされるのを封じさらに!!エイリアスによる自
作自演とはいえピンチに陥る事によつてグレピンのスペック大幅u
pだ!!

『そしてこの戦いの解説は僕、織目結でお送りします!!』

『結!?ふざけてる…てかアルジエントの気配探しは?』

『アルジエントさんならほら』

と言葉の後に左目が開き結の視界とリンクする

そこにヴァーリと美候とアーサーそれに氣絶しているアルジエン
トに駆け寄る(兵藤を除く)グレモリー眷族全員の姿が見えた
なるほどだつたら結は兵藤の方に視線を合わせてくれ!その方が

戦いやすい

『おk!!』

すると防戦一方の兵藤の姿が見える

これなら!!と思つていた事がありました…次の場面になるまでは
『ギツシヤアアアアアアアアアアアアアア!!!』

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!!!!』

そんな奇声にも叫びとも聞こえる声と共に出た異様な機械音

ドライグの声

その直後、【NRハンマー】が一撃でやられ二撃目で【グレートピンチクラッシャー】が碎かれた

『……待て、待て待て待て!!【NRハンマー】がやられるのは分かるが【グレートピンチクラッシャー】が碎かれるだと!?今のグレピンは出力最大でしかも俺自身にエイリアスで圧力をかけてるからさらにパワーが上がつて現状最強のシェルブリット改の最大出力より力が上なんだぞ!?』

『……つまり?』

『マジモンのピンチだよ』

「グルオオオオオオオオオオオオ!!」

『な!?』

極大火炎弾!?こないだ戦ったガマルの火炎弾よりもけえ
というかこの距離から防御……!!

『俺を守れ【アルター・エイリアス】!!』

咄嗟に出た命令にエイリアスが前に出て防御体勢をとるが
エイリアスは極大火炎弾に吹っ飛ばされ崩れ落ちる
ハハツこれにどうやつて立ち向かう?どうやれば勝てる?
こんなの……………

『…………でもここで怯んだらお前はやりたくないことをやつてしまふ
筈』

『だつたら』

『その前に俺がしつかり殺してやる』

列迅をアンカーの様に射出して兵藤の胸元に一気に近づき
赤い小さな羽を左右12枚再構成からのお

『即興!!12弾二撃!!両腕一撃!!必サア～～～ツ!!シェルブリット
インパクト!!!』

最大最凶の一撃が放たれた

が

『嘘だろ?』

ノーガードでヒビすら入つてない生体鎧のような赤い装甲
だが拳に当たった感触で何となくわかつてた
直ぐに着地そして

『プランBへ移行!ひたすら攻撃を入れまくりの攻撃避けまくり
…………やつてやらあ!!!』

『了!解!!赤の羽12枚再装填!!』

『必殺のおおおお!!シェルブリットインパクトオオオオオオオオオオオオ
オ!!』

「ヴウウワアアアアアアアアアアアア!!!!」

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!』

なんだ!?今度はあるのレーザービームか!?

いや口がさつきよりも更に明るく、というか炎が溢れ出して來てる

『Expllosion!!!』

さつきの火炎弾の……連射!?

流石に2発目は食らわないってか!!

だつたらシェルブリットインパクトの噴射でこのまま方向転換して避けきつて

『2発後ろに行つたよ!!』

朱乃ちゃんに行つてる!?やらせつかよ!!

『光力シールド!!』

2発続けて薄い円状の光力によつて防げたがその直後に光力サー
ルドが碎け散つた

やっぱ当たつたらひとたまりもないじやないか!!

『次3回目!!至急装てe』

バキ!!バリバリバリ!!

言い切る前に左側から嫌な音がし同時に左腕からものすごい激痛
が走つた

『イッタイガアアアアアアアア!?そんな事より考える事が多すぎる!!取り

敢えず三弾目からは赤羽は右側に集中』

身体が動かない!!

：なんだ兵藤の目が光つて、

それと同時に俺の全身を光が覆い尽くした

今回のQ & A

Q：何でここまでボロボロなの？

A：投稿者のせい禍の団の下つ端集団蹴散らした後に、ある人物を
鍛えてたからだよ

Q：神衣モード使わないんか？

A：ある人物との特訓中に使用したからインターバル中で使用でき
ないよ（尚、結との視界リンク（左目限定）はできる模様）

Q：最後のは？

A：ブチ切れて旧魔王派吹っ飛ばした時に使った（時止め+ロンギ
ヌスマッシャー）はめ技、即死コンボ

Q：イッセーを殺す必要は？

A：（必要）無いです。

　　というかアルターの1日使用限界回数を超えてるから今の
状態でイッセー死ぬとエタニテイ+エタデボ蘇生出来ない可能性が
高いし、そもそも使えない可能性も高い

Life IV 目覚めし龍

前回のあらすじ

『あつこ死にm』（焼ける音）

僕、木場祐斗は目の前の戦いを目で追うことしか出来なかつた
気づいたらアーシアさんが消えて旧魔王派のシャルバ・ベルゼブブ
が現れ

そして兵藤君が遂に霸龍化を目覚めさせてしまつた。

その後まるでシャルバは子供のように霸龍へとなつた兵藤君に一
方的に倒された。

その直後に、ヴァーリ達が合流と共にアーシアさんも生きて助けられ
た事が判明した……が兵藤君が僕達の存在に気づいてしまつた。
こちらに敵意を向け攻撃をする……前に僕達の割り込んだ人物が
いた。

その人はボロボロでズカズカな黒いレインコートを着ていた

「またここなのね……」

見覚えのある暗い暗い場所

「よつ！」

「なんだあんたか」

そこには、^オ雄護^レが立っていた

「何だとはなんだよ？」

「今忙しいんだよ……俺の中から見てるなら分かるだろ？ 気絶なんてし
てる暇はないんだよ……もつともつともつと強い力が必要なんだよ
！」

「だつたら朗報だな」

「グッ!!頭が」

激しい頭痛と共に頭に浮かび上がる記憶

そこには黒髪黒髪のマッシブな体型の男が楽しそうに何かの話をこちらにしてきてた

「ほら、見えたろ? アイツとの会話している記憶」

「これは…」

「お前は賭けに勝ったんだよ」

「今から使うその力のその領域は俺ですらまだ至れなかつた」

「だからこそ、それ相応の地獄を見る覚悟はしとくんだな」

オレの言葉の後、ツリと意識がまた途切れた

『ア?!ガアアイアイアイアアアアアアアイアアイア!!!!』

最近は痛みを感じることが殆ど無かつたからこそ余計にこの言い様のない激痛が俺を蝕む

頭は冷静な筈なのに身体が痛みに耐えきれてなくココロからの叫びがでる

『しつかりしろ!! ゆうくん!!』

結の声が聞こえる

ダメだ

目覚めたばかりなのに
いしき……が……

『Di vide!! Di vide!! Di vide!! Di vide!! Di
vide!! Di vide!! Di vide!! Di vide!!』

蒼い輝きが視界に入り体の中エネルギーがドンドン絞り取られていく

『ゆうくんだけじやない…?まさか周りの皆からもエネルギーを吸つ

てるの?』

(ああ……こりやもうダメかもしんねえ…………俺の負けか…………結局俺
はまた救えないのか…………大切な…………大切な…………)

消え掛けの意識の中、視線が捉えた赤き霸龍は涙を流して泣いてる
ように見えた

『うガアアアアアアアアアアアアア!!!』

右腕を地面に思いつきり叩きつけた

ビキイ!!と地面が割れシエルブリットにも亀裂が走る

『ゆうくん!!』

『ハアハア、叫べば強くなる訳じやない…………だが俺は強くありた
いから叫ぶんだ悲鳴の叫びじやなくて滾りの叫びとして!!』

『……何言つてるの??』

『気にすんな』

ただの根性入れ直しだから
さて……

『ここからは殺し合いじやねえ……俺とテメエのケンカだ!!腹アくくれ
よ?』

大きく息を吸い改めて心の底から叫び上げる
『シエルブリットオオオオオオオオオオオオオオ!!!!』

右腕がシエルブリットが金色に輝きその金色は俺の両腕を包み込
んでた

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!!!!!!』

『こいつは』

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!
Boost!! Boost!! Boost!!!!!!』

『この輝きは』

『Longinus』

『お前とオーフィッシュの輝きだああああああああああああああ!!!!』

『S m a s h e r !!!』

眩い輝きが俺の両腕から放射され兵藤のレーザーと当たる

『俺達に……足りないのわあ!!』

『グルアアアアア!』

『速さは勿論!!根性が足りねえええええええ!!!!』

輝きがレーザーに押し勝つた

それと同時に両腕にまとわりついてた輝きが晴れ

赤い装甲に黒のラインが入ったガントレットが現れた

『【シエルブリット第三形態亜種ドラゴンライド】って感じか?』

『オオオオオオオオオオ!!!』

また何かする前にあの胸にある砲門を潰さなきやな取り敢えず…

『真正面からぶつ潰す!!』

『シエル!!ブリットオオオオオオ!!』

今度は兵藤の口から火炎弾が大量に飛んでくるそれを両腕で弾きながら直進する

『オーバー』

『バーストオオオオオオオオオオオオ!!!!』

『グッ!!オオオオオオオ!!』

暴力的なまでの赤い輝きが両腕から放たれそのまま

兵藤の胸に風穴を開けた

そして赤い龍の巨体のシルエットはドンドン縮んできて最後は元の兵藤に戻っていた

ただ元の姿と違う所があるとすれば兵藤の胸に大きな穴が開いたまま今も尚血を流し続けているところだろう

『俺もそろそろヤバいな……』

「貴様アアアアアアアアアアアアアア!!!」

ダンツ!!と効果音が付いても良いくらいの勢いで右腕が切り飛ばされたね

というか

『邪魔しないでくれた前、聖剣士ゼノヴィア』

左腕で彼女の首を掴んで地面に押し付けてから言う

『というよりリアス・グレモリーや木場祐斗、塔城小猫は睨まれても困るね？ていうよりも怒ってるのか？尚のこと理解しつらいのだが？』
「目の前で下僕を!!家族を殺されて怒ら『じゃあ何で止めなかつたの？」

『？』

『んあ？結？』

入れ替わってる？え？何で結が表に回って俺が裏になつてんだ！？

てかはえー入れ替わるとなんというか幽霊みたいな感覚だなあ

(呑気)

『兵藤君生き返らせるから手貸して』

「わかりました！」

説教？しながら説得しちやつたよ…流石結さん俺に出来ないこと
を平然とやつてのける…これはもう呼び捨てにできないのでは？
(呼び捨て以外だと返事しないから)

アツハイ

ともかく体の主導権返しておくれー

『もう返したよ』

『よし…ヴァーリ・ルシファー、黒歌は居ないのか』

「居ないがそれが『いや、いないならそれでもいい』そうか」

さてと

『取り敢えずほい！来い【刻刀】!!』

『ここから急ぐぞ!!まずはアーシア・アルジエント!!兵藤一誠の胸以

外の傷を君の神器を持つて治すのだ』

「えつと何で胸は治してはいけないのでですか？」

『取り敢えず治して説明はしながらする』

「わ、わかりました!!」

返事と共に兵藤の傷を治し始めたアルジエントさん

『ああ～因みにこの中に仙術使える人はいないよな』

多分塔城は使えるんだろうけど黙つて

「使えます……少しですが」

塔城さんが拳手してこちらに近づいてくる

あら少しほはトラウマ克服したのかな?

『なら話は早い塔城小猫、君は兵藤一誠の左腕つまりは【赤龍帝の籠手】に溜まつた邪気を一瞬でいい取り除け』

『そ、そんな事』

『ホントに一瞬で良い一瞬と言つても0.0000001秒位だ』

「ホントに一瞬……なら出来ます」

『よし!タイミングは君に任せる』

「…………行きます!!ハツ!!」

『変身!!…………ッシャアオラア!!!!』

塔城さんの掛け声と共に瞬時に神衣モードになり邪気がなくなり瞬間を狙い刻刀を兵藤の左腕に突き刺しあ目当ての物を奪取する

『寝てないで起きやがれ!!ウエルシユ・ドラゴン赤き龍の帝王ドライブ!!』

『貴様どうやつてこの俺を相棒から』《そんな事はどうでもいい今はどうでもいいんだよドライブ》何?

『アンタまだ覇龍化のツケを兵藤一誠にまわしてねえだろ?…………それを全部俺に寄越せ』

『…………そんなものの手に入れてどうする?ハツキリ言わなくとも分かるだろ?それは常人じやなくともただの毒だ、デメリットでしかない』

『常人でなく人外だそれに中途半端とはいえど覇龍化したお前らを倒したのは俺だそれに毒なんて俺にとつてはないような物だ……後くれないのなら兵藤一誠は助けない』

『…………いいだろうくれてやる!!こんな所で相棒にくたばられても困るからな!!』

『そう来なくちゃな』

ま、どう応えようが兵藤は助けるんだが

すると左腕の赤龍帝の籠手から邪氣:覇龍の氣(9:1)が流れ込んでくるわあ~ほぼ邪氣の構成だ~(*^-^*)

『よしじやあさつさと治そうドライブ、君にも当然協力してもらうよ』

『良いだろう』『Dragon booster』

『Boost!! Boost!! Boost!! Boost!! Boost!!』

!!』

『ブーステッドMAX更にエタニティデボーテ』

限界ギリギリまで力をため今度は地面の一部をエタニティデボーテ（エタニティエイト+エターナルデボーテの複合型アルター）の宝玉を再構成し兵藤の胸の風穴近くまで浮遊させる

『行くぜ!!必勝!!クリア・ブラスター!!!』

『Transfer』

ドライグの声がなると共にエタニティデボーテの宝玉を碎きその瞬間に宝玉を経由して放たれる深緑色の光線が兵藤の胸に当たる
そしてみるみる風穴の周りの肉が蠢き増大し完全に穴を穴を塞いだ

「嘘…」

徐々にそして完璧に治すアルジェントやフェニックスの涙の回復方法とはいさか違うためか驚くグレモリー一行+α

『そりや光線ブッパの回復方法なんてそうそう見ないでしょ』

それはそう

『じゃあ……あ、忘れてたコイツは返す』

綺麗に治った兵藤の左腕にもう1回刻刀刺しドライグを兵藤の中に戻す

『じゃあな兵藤一誠の左腕は君達で治せ』

「ま、待つて」

朱乃姉…朱乃さんに呼び止められた

『何?』

「ゆうくん…ですよね?あの…………助けてくれありがとう」

『…………そう……兵藤は5分もせず目覚めると思う』

返事だけして俺はその場を立ち去った

番外編 現時点での主人公の詳細その2

龍導雄護りゅうどうゆうご

年齢：17歳？

能力：アルター能力『記憶の物語』、マイメモリ・オブ・ストーリー、????

趣味：読書

好きな物：友人達

嫌いな物：それ等を奪う者、戦闘狂

憧れ：我を通す人

龍導カズマがオーフィスの力の欠片を代償として大門雄護の記憶を取り戻した状態

正確には龍導カズマでもなければ大門雄護でもなくその両方、つまり2つの精神が混ざりあつて出来た精神なので大門雄護であり龍導カズマでもある(?)。

見た目は髪が黒髪になつており前髪の一部が赤いメッシュのようになつていて、

ロストとの戦いで左眼が潰され中途半端な治り方の為ほぼ失明している。

その為いつも九重から貰つた狐のお面をし黒いレインコートを着ている。

黒いレインコートはアルターで作つてある為レインコートと言えども鎧のように硬く聖剣、魔剣の刃ですら簡単には切る事は出来ない。

現在はオーフィス、黒歌の二人と住んでいた家を出てある町で見つけた廃墟を拠点としている。

基本的には1人で行動することが多く襲つてくるものに対しての容赦はほぼほぼない。

実は下僕が1体いるのだが鍛える時以外はほぼ呼び出さない。

過去に大門夫妻を自分のせいに失つてしまつてるので大切な物近くに置きたがらずその為に1人で行動することが多いと思われる。

体内に織目結と1番最初に形成された思われる精神(所謂もう1人

の僕!!）の2つを宿している。

アルター能力『記憶の物語』について

1番最初の雄護と思われる精神を対象として形成されたアルター能力である。

元来の雄護が物語（小説、漫画、絵本、アニメ、等のサブカルチャー）を好んでいてその上で『アレに成りたい』『コレに憧れる』等と言った好奇心の2つが混ざり合い形成された為に能力はそれに準じた物となっている

第1部『ORIGIN』

アニメスクライド本編に出てくるアルター能力が全て使えると言う（イカレ）能力。

ただし相性なども普通にある

シェルブリット第1形態

基本的に発動するアルターであるシェルブリット
身体能力の小強化に加え拳による破壊力と攻撃力で飛躍的に上昇する。

使用時には右側の背に赤い3枚の翼を形成するが雄護自身の意思で複数同時に形成したり3枚使い切つても補充したりすることができる

基本出力はスクライドのカズマよりやつと少し超えた

相性：ちょっと良い

シェルブリットさらにはらため改

シェルブリット改に使用するシェルブリットと絶影を使用頻度を増やし感覚を掴んだ事によつて至ることが出来た形態

所謂『シェルブリット1・9形態』

シェルブリット改と形状の違いで言えばメインの色が橙色から銀色に変化している事と、両肩の背合わせて計6枚の赤い翼が最初から形成される点だろう

必殺技は両腕をくつつけて発射した列迅で相手を球状に360。

包囲で拘束する『肆連線ヨンレンセンカラムスビ』

赤い翼を計12枚使い両腕で発動し殴る『必殺のシェルブリットイ
ンパクト』

ただし12枚もの翼を1回で消費しきり発動をする為両腕にかかる負担はかなりのものであり最悪の場合腕がちぎれる

しかしそのデメリットに似合うだけの価値はあり、唯一自力でスクライドカズマの第2形態シェルブリットのシェルブリットバースト差し迫る威力を誇る。

尚ちぎれた所で…

シェルブリット第3形態亜種『ドラゴンプライド』

霸龍化した赤龍帝の『ロンギヌス・スマッシュヤー』を利用してシェルブリットで向こう側への扉を強制的に開いた事によつて実現した形態。

見た目はシェルブリット第3形態のメインカラーが橙色から紅蓮に変わり漆黒のラインが4本ずつ両腕のシェルブリットに刻まれて龍の鱗が付いたような見た目をしており、本人は気づいてなかつたが頭から龍の角2本を生やしていた。

強さで言えば最終形態に近い第4形態という強いは強いなのでその場限りの所謂『特殊限定形態』の筈だが…？

グレートピンチクラッシャー

霸龍化赤龍帝により1発KO

相性：普通

NRハンマー

以下同文

アルター・エイリアス

圧力をかけるぞ！火球を防ぐ為に盾にしたらズタボロになつたぞ

相性：普通

絶影

シェルブリットの部品扱いで最近殆ど出番無し

相性：割と良い

夢

ハート・トゥ・ハーツ

相手の意思や思い：つまりは心を読み取ることができるアルター
能力

相性抜群の為、能力の反転まで出来る

最近はその方法で首輪を作りそれを使い喋れるようにした

相性：最高

??? 実はこれが戦闘系アルターで1番相性良かつたりする

相性：最高

第2部『三重奏』

本体含め三体に分裂するアルター能力で、分裂時に本体からエネルギーが分けられるので強さはそれぞれ3分の1の強さとなっている。連携、数で攻めたい時に使う。

第3部『疾風迅雷』アザリティ

雷、風を操り操作する能力で、その応用で身体能力の強化も補えるまあまあの優れものアルター能力

???? 雄護の生命力の源。

いわゆる再生能力を持つており、致命傷とかでもない限りはどんな傷だろうが大体1～2分で完治する。

そしてこれが雄護の体内にあるため悪魔、天使、堕天使や戦乙女、魔人、龍人などでも無いのの人やそれら人外以上の身体能力を身につけることができる

最大の特徴は上記2つの能力を最大限解放して戦う、『神衣モード』になれるところだ。

『神威モード』

先程も書いた再生能力、驚異的な身体能力を最大限まで高める形態使用時に『変身』か呪文を唱え赤手甲のピンを引き抜く事で使用可能となる

使用時は髪色が真っ赤に染まりほのかに発光していて、両目は赤く輝き左眼は結の視界と繋がる。

織目結

誕生経緯不明、年齢不明、目的不明の三拍子が揃つてゐる現在下手しなくても怪しい奴

が雄護的には親しく話してくるし、害がないのは分かつてゐたので直ぐに受け入れた

見た目は金髪ボニー・テールで両眼は赤いスレンダー美少女

雄護が氣絶したり本人自信が譲つた場合は結が体の主導権を得る

基本的な戦闘スタイルは剣一本で相手の急所に切り込んでく

第3節 黄昏戦争のモンスター

Life I 我、赤い糸に染まりしもの

おっす!!俺の名前は兵藤一誠!!

みんなからは【イツセー】や【赤龍帝】最近だと【乳龍帝おっぱいドラゴン】なんて呼ばれてる!!

そして今、俺達は兵藤家の地下一階にある大広間に集まっているんだが……

そこには俺達グレモリー眷属とイリナとアザゼル先生+会長率いる生徒会+シトリーレ眷属+バラキエルさん

そしてヴァーリ率いるヴァーリチームと……

『ふあ〜』

欠伸をしている龍導しんゆうだった

話は先日まで遡る

俺達グレモリー眷属は北欧神話の主神であるオーディンのじーゃんの護衛をしていてその時をわざと狙つて来た来訪者がいた。

赤い狂氣的な眼をした北欧神話の悪神ロキ

「アハハハハハハハツいいぞ赤龍帝!!そらそら避けろ!避けろ!白龍皇!貴様にはこれをくれてやる!!」

「クソツ!」「クツ!!」

目の前を埋めつくす程の圧縮された光の様なエネルギーが何処までも俺を追いかけて来る

途中から参戦したヴァーリすらもまさかの防戦一方

他の皆もロキと同じ赤い眼をしたフェンリルに襲われ其方の対応に手一杯の様だつた

そんな中ロキの上空にいきなり白いボディにマゼンタのラインが入ったバイクが現れ次の瞬間

『衝撃のファーリースト!!スピン!!』

そう言いながらバイクの前輪がロキの顔面に当たりそのまま皮膚

を削り取つていく

それをバイクごと弾く口キ

『よオ……コレで何度目になるか知らんがいい加減ウザつたいから
決着をつけに来たぜ口キイイ!!』

「龍導雄護おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

『うるせえ!!』

バイクは瞬時に光の粒子になつて気づいた時には既に右腕にまと
わりつきそのまま見慣れた黄金の籠手に変わつてゐる

「貴様は私の邪魔をしないと気がすまないのか!!」

『テメエが先に売つたケンカを俺が買つてるだけだろうが!!』

「ケンカ!!これをこの戦いを喧嘩と言うのか貴様は!!!!』

『それ以外になんて言うんだよ』

龍導は喋りながらも殴りかかつていく

「フ、フフフ：フハハハハ!!ならばいいだろう」

『何を「仕切り直しだ」何?』

「仕切り直しだと言つているのだよ龍導雄護。赤龍帝に白龍皇それに
貴様も居るのだコレは此方も本氣でやらねばいかぬというものだろ
う?だから主神が三大勢力と和平を結ぶ日に私は神々の黄昏(ラグナロク)を行う
それを防げるものならやつてみろ!!」

言うだけ言つてその場から口キが消えた

そして今現在その対策を練るために俺の家に皆集まつてゐるのだが
が

皆の視線が約1名にのみ注がれている

『…何だよ?』

少し不機嫌に聞こえる声で応えたのは全身を覆う程デカくブカブ
力な真っ黒なレインコートに狐のお面を付けた人物

「いやこの時期にそれ暑いだろ?脱がねえのか?」

アザゼル先生がそうやつて龍導?に話しかける

というかコイツが龍導かどうか分からなんだよな仮面は付けて
て外さないしレインコート來てるせいで見た目もあまり当てになら

ないそして声は同じ筈なのに何処か違和感を感じる

「それによ今回は共同戦線だからこうやつて作戦を考え対策を話し合い交流を深める必要があんたう？」

『……俺は共同戦線に参加する気はサラサラない』
え？

「何？」

龍導？の言葉を聞いてアザゼル先生の顔が怖くなる

『だつてそうだらう？この共同戦線に参加するメリットがないじゃないか』

「メリットつて何だよ？』

『そこまで言わないと分からねえ訳じやないだろアザゼル？俺は足を引っ張るような弱い奴らとは手を組まないと言つていいる』

「「!?」

『あえてもう一度言おう…………雜魚はすつこんでろ』

「あまり調子に乗るなよ餓鬼、てめえ1人でロキに勝てるとしても思つてんのか？』

龍導の物言いに怒氣の混じつた返答するアザゼル先生
というかブチ切れてるよな？

『違うな思い上がりつてんじやない実際にそうなんだよ』

『そんなに言うのならその強さ俺に見せてくれよ龍導雄護』
ヴァーリが立ち上がって龍導にそう言つた

…………あれ？ここでヴァーリと龍導が戦つたらヤバくね？

Life II 最速最凶

『ゆうくくなん??』

(何? 何何? なんで結さん怒つてますのん?)

『いくら何でもさつきのは言い過ぎでしょ?』

さつき……あく

(雑魚? の事か? いや……でもあれ位言つとかないとこれから今回の
口キみたいな奴がわんさか出てくる可能性があるからな、おおよそ俺
のモノと思われる記憶の通りなら既に本来の未来と少し違うからな)
だから

『煽つて憎まれる恨まれる』……それでアイツらが強くなり自衛出来る
なら本望だよ)

『それは後々ゆうくんが辛いよ…………僕は（俺がいいんだから良いん
だよ、コレでこの話お終い）むう』

無理やり結との会話を切り上げるが声や態度からしても『不満しか
ないですよ』オーラが溢れ出ているのだが、まあそこは無理にでも
納得してもらう他ない

さて話は変わるが今俺達は校庭の方に行くために駒王学園内を歩
いて移動している

まあ駒王学園は駒王学園でも偽モンの方だけど

今歩いてこの空間そのものが本来の駒王学園出なくグレモリー達
がフェニックス家の三男とレーティングゲームをした会場だ

え? 何でこんな空間が残つてるかつて?

決まつてんだろ? サーゼク様が残しといたんだよ。

残しといた理由とかはまあ……考えたくないなあ

「こら辺でいいだろう?」

とかくだらない事考えてるグラウンド中央に着いた

信じらんねえなあ:つい1ヶ月前位にここでコカビエルクソ野郎
と殺し合いをしたんだよなあ:最後に俺の力になつたて考えればあ
のクソ野郎の事も少しあマシに思えるか

『ああこら辺でやろうというかさつきとやろう結果は既に見えてい

る』

「ほう…言うじやないか」

『事実だろうが戦闘狂』

いい加減めんどくせえし今回でストーキング（指名手配）も終わらせたいしコレが1番手つ取り早いよなあ

『アザゼル確認』

「はいはい、えーと今回のヴァーリVS雄護の決闘のルール説明だ。その1殺すのは無しだ、その2戦闘範囲はこの空間範囲この空間外はアウト、ってな感じの2つの簡単なルールだ。そのルールを分かつた上で絶対厳守する事を誓えるなら2人の決闘を認めよう」

「誓おう」

『誓う』

「分かった：準備が出来たら言えスタート合図ぐらいは出してやる」

『そうかい……あつアザゼル!! ホレツ!!』

「つとと危ねえだろ!? いきなり刀身剥き出しの刀投げんな!!」

『それ壊れるの嫌だからアンタが持つてくれ』

「話を聞きやがれーー!!」

さてと（ガン無視）どのくらいの力でやろうか

「もちろん全力だ」

能力なしで心読んでくるの軽くホラーなんだが

『いいだろう』

「我、目覚めるは」

『は?』

ガチじやん思つてるよりガチじやん

だつたら俺も詠唱するわ（気合い入れ以外の意味なし）

『僕も詠唱手伝うよー（・・ω・）！』

おつじやあ頼んだ

「霸の理に全てを奪われし二天龍なり」

『我、異界より現れし化物なり』

「無限を妬み、夢幻を想う」

『悠久を生き、無限を目指す者』

「我、白き龍の霸道を極め」

『欲望を満たす為に獸へ墮ちる』

『汝を無垢の極限へと誘おう!!』

『『汝、我が偽りの白き最速に溺れろ』』

『J u g g e r n a u t D r i v e !!!!!!!』

『【記憶の物語】第1部『O R I G I N』第3章『ラディカル・グッドスピード』第4話『フォトン・ブリッツ』既動』

互いの詠唱が終わるとヴァーリは鎧の宝玉が青白い輝きを放ちはじめ徐々に鎧の形状と本人の体格の変化を繰り返しながら覇龍へと変身

俺は足場……つまりは自分が立つていところより後ろの殆どの地面を抉りアルター粒子へと変化させて虹色輝きで全身を包み込み最速の男の最終極地であるフォトン・ブリッツの鎧と能力を権限させる

「白い鎧……先程のバイクに使われていたガワに似ているな」

『能力は実際に殴り合えば分かるだろうよ……そういうテメエは初っ端から覇龍化か……言葉に偽りは無いようだな』

「ああ悔しいが今の君にはコレで勝てるかどうかすらわからんからな……それでも更に高みを目指す為に俺は全力で挑ませてもらう!!」

『いいだろう……アザゼル』

アザゼルにスタートするように目で催促する

それに対しアザゼルも此方とヴァーリを交互に見て頷く

『準備は出来たようだな……コレより龍導雄護対ヴァーリ・ルシファーの決闘を行う』

「始めッ!!」

イツセー side

ずっと俺は夢を見ているのかもしれない

俺達のピンチにヒーローの様に龍導が駆けつける？

俺達に対していくら弱いとは言えあそこまでまるで他人や嫌いな奴に言うような言葉

そして

決闘開始直後に微動だにせずいきなりヴァーリを吹き飛ばした訳が分からなかつたあのヴァーリが龍導に吹き飛ばされたのだ
気がついたら轟音と共にヴァーリの後ろにあつた駒王学園の校舎
が完全に崩壊していた

龍導がまだ俺たちといた時に龍導自信から聞いた話だが

本人曰く「ヴァーリとの間は天と地までとはいかないがだいぶ実力
に開きがある…………兵藤君程ではないけど」

そう言つていた、だから

『やつぱ弱いなあ』

そこにいる黒いレインコートをたなびかせる男が自身の友人には
とても見えなかつた

Life III ウホツ!!男同士のむさい温泉回!!

そろそろ指名手配されるのも面倒臭いし取り敢えずアザゼルと腹割つて話そうと思い以前、九重に教えて貰っていた秘境温泉なるところで集まることにした

「いきなり地図を送つてきたらかと思つたら」

『何…最近の話を聞くこうと思つてだどうせお前もタイミングを見計らつて俺の話を聞くつもりだつたんだろう?』

「間違つてないが…………がつかりだぜ…まさか温泉とか」

『いや俺が風俗とかに行くとで思つたのか?情報漏洩防止だよ』

「なるほどね」

『アアツ熱湯がしみて気持ちーーー!!』

「うわあ…」

『俺の反応に素で引こうとするな』

「いやじやなくてお前、二、三週間だけの間で何があればそこまでになるんだよ…」

そう言いながら俺の体を見て心配の言葉ではなくドン引きの言葉をかけてくるアザゼル

『いや、待て普通に傷つくぞ』

がこの言葉もスルーし続けて聞いてくるアザゼル

「それも例のアルター能力とやらか?」

『まあな…どんな力にも代償だつたり条件だつたりがいる…大なり小なり』

「でアルター能力の代償がその気持ち悪い程の亀裂か」

『若干の語弊があるけどまあ概ねその通りだ』

両腕と両足に亀裂、即ちアルター痕が残っている

『アルター能力…確か正式名称は【精神感応性物質変換能力】つて名前でなアルター能力のアルターは確か英語の変化や進化を意味する【ALTERATION】を略して【ALTER】だつたかな?でアルター能力者はまあ生物以外であれば……あー実際に見せた方が早いか。

これでいいかこのタオル』

そう言いながら俺は頭の上に置いてたタオルを手に取りアザゼルに見せながら分解をし新しくナイフを作る。

更にそれを分解してタオルに戻した。

『こんな風に能力者の意思：つまりは精神に反応、影響して物質の分解、分解した物を自由に形を変えて形成し直すだから【精神感応性物質変換能力】つるんだよ』

「成程な」

『でアルター能力つてもザックリ分けて3種類ある』

「あ？ 今言つてた物質の再構成だけでも大分ヤバいがまだんのか』
『あるんだなコレが』

アザゼルの前に指三本をたてる

『装着型と具現型、それにアクセス型だな』

『装着型は読んで字のごとく腕だつたり足だつたり体の1部に能力の着いたアーマーを装着する。次に具現型だがこれにはまあ色々だ戦闘人形や武器や玉とかの道具だつたりだな。そして最後にアクセス型だが、これが1番分かりづらいが単純にアクセス＝物だつたり人だつたりだな』

「アクセス型だけ随分適当な説明だな』

まあ俺自身がそもそも能力の関係上使ってるだけであつてしまつかりアルター能力そのものを理解出来てる訳では無いしな。

『あとはあく確かアルター能力の強さによつてはサイズとか関係なく大量の物質を再構成に使つたりするとか位かな？』

『いやもう一つあるわ。さつき言ったアルター能力の種類である装着型、具現型、アクセス型なんだけど時たまにアルター能力者の力が強くなり進化する事があるけど大抵はそのどもが最初は具現型だろうがアクセス型だろうが最終的には装着型になるんだよ』

「それは』

『直接戦闘する方がアルター能力者は早いからな』

「アルター能力者つて脳筋つて意味合いかよ…』
違います（虚言）

『アザゼルそのアルター能力者：面倒いから【アルター使い】な。で、アルター使いを脳筋の集まりみたいに言うな。ただ超能力で殴り合いでてるだけなんだよ』

「いや、脳筋だろ（でしょ）それは!!」

やめろお結までアザゼルと一緒に否定しないでくれよ!!
落ち込むぞお俺はア!!

『ココまでがアルター能力についての解説だな。ココまで何か質問あるかいアザゼルくうん』

「その気持ち悪い喋り方やめろ」

『じゃあ止める。……話が脱線したな…アザゼルアンタが聞きたいのはこのアルター痕についてだろ』

「ああ、そうだ」

『じゃ、話の続きだ。このアルター痕つてのは装着型のアルター使いにおこる現象だな。主に装着型はさつきも言つたが体の一部に装甲を展開し武装するアルターの事を言うんだが、まれに体の一部そのものを分解、再構成し武装する奴らがいる。そういう奴らが分解や再構成に失敗したりアルターを使いすぎるとその部分に亀裂が走る。それが【アルター痕】だよ』

「成程な。という事はお前のそれは…」

『使いすぎと言うよりは無茶苦茶な使い方をした報いだな』

説明が面倒臭いから俺は誤魔化した。

その後は最近あつた出来事をアザゼルから聞いた。

へえ一誠くん確り禁バランス・ブレイク手化つてのに成れたのねゝほあゝだつたら
『俺がやる事は決まつたな』

Life IV 結成!! 対【超口キ】対策チーム

『右からザコ、雑魚、マシ、まし、まし』

「ああ!? 喧嘩売つてんのかてめえ!?!」

「おい、匙落ち着けつて!!」

『事実だろうが受け止めろ』

ギヤーギヤーうつせえんだよ。と続けて言つておく。

俺がやる事とはソーナ・シリリーが率いる生徒会チーム、リアス・グレモリーチームそしてヴァーリ・ルシファー率いる禍の団白龍皇派の3チームを次の口キ襲撃日に向けて鍛え上げる事である。

正直無茶ぶりにも程があるがやるしかコイツらが生き残るすべがないからなしようがなし、だ。

それで憎まれても結構。煽つて強くなつてくれるならそれで良し!!だ。

『てめえらを今日からラグナロク迄の間に俺が鍛え上げる。目標は地
で魔王クラスの力を身につける事だ!! 最低でも最上級悪魔クラスだ
!! 文句ある奴は今すぐココから立ち去れ!! お情けで言つてやるがな
!! 先の俺のバイクアタックやヴァーリ1発KOを見て余裕こいてる
なら先に言つとくぜ』

『この戦争^{ケンカ}から外れる』

『何言つてんだ』

んな風にイッセー君が聞いてくるが甘い甘いぞお

『蜂蜜より考えが甘い』

『何?』

『何故なら口キのあれは「本気では無いからだろう?」 正解だヴァー
リ・ルシファー』

「はあ!? アレで本気じやないとか嘘だろ!?!」

『何回もあるの状態の…通称『超口キ』と戦つてる俺が保証してやる。奴
のあの赤い状態は強化形態とかではなく強化通常形態って事だ』

「…強化通常形態と強化形態の違いが分かんねえよ!!」

『はあ!? それくらいファイリングで分かれ!! (無茶ぶり)』

じゃあ分かりやすい例え…例え…あつ!!

『ほら仮面ライダーゴーストの闘魂ブーストとか仮面ライダークローズのグレートクローズ的な奴だよ』

「いやそもそもそれが分かんねえよ…」

『いや仮面ライダーぐらい分か…る…だろ?』

あれ?俺今なんて言つた?仮面ライダーつて何だよ?

(結さんやい)

(無いね)

(まだ何も聞いてないよ…)

(この世界に仮面ライダーもその言葉も存在しないと思う)

(思う?)

(忘れたのかい?僕の記憶も不安定なのを)

(そうでした)

あれじやあ…いや今はそんな事どーでもいい

『バカのお前にも分かりやすく言うならドラゴ・ソボールの極楽浄土編に出てきた界神の界神拳みたいなもんだ。違があるとするなら、あんな漫画の技と違つて口キのはデメリットなしで全力が出せるつて所だろうな』

「それつてつまり常に俺のブーストを掛けてるようなもんかよ!?

『…そういうことだよ。だろ?オーディンのジジイ。テメエなら口キが元々赤髪じやない事ぐらい知つてんだろう?』

「気づいておつたか…」

『んな初步に気づかないわけねえだろテメエらが。日頃から合わないにしても北欧神話勢の方が本来の口キを知らねえわけがねえ』

『待て龍導言つてる意味が『つまりだ!!何の因果か知らねえが北欧の悪神口キは俺と同じ赤糸を体内に取り込んだ不死者つてえ訳だ』

……は??』

「不死者つてあの不死者か!」

アザゼルが俺の言葉にいの一番に食いついた

『ああテメエらが今考へてる不死者であつてゐる。特定の弱点はあつてもそれ以外なら首を斬られようが心臓を潰されようが全身を焼き

尽くされようが瞬時に傷が再生したり死んでも直ぐに息を吹き返したりする人間が記すような神話や御伽噺にあっても実物は殆どない

い』

『その不死者であつてるぜ?』

「その証拠は?」

『ちよつと待て』

そんじやあ左手で右肩当たりを物凄く力を入れて掴んで
ミシツミシツメキッ

『ツぬうん!!』

そのまま左腕を振り抜き右腕を胴から引き抜いた

ブチブチブチブチグチイヤア

そんな音と共に肉片と血が弾け飛ぶ（アルター応用爆破）

「キヤアアアアアア!!」

『落ち着け』

阿鼻叫喚である

『ほれ、ここからが本題だ』

直ぐに飛びついた血と肉片が混ざり糸状となつて方に着いてゆくまるで編み物でも編むかのごとく血と肉で出来た糸が絡み合って

して

『ほらな? 治つたろ?』

「驚いたな、まさかマジモンの不死者とはな。」

『ああだが、不死者だからこそその明確な弱点がある。お決まりのな』

「その弱点つてのは?」

『燃やすもの、火だつたり炎なり』、【斬撃、ようは剣や爪又は切り裂く能力なり】だな、フェニックス家と比べると劣つて見えるが俺達は精神が飲まれない限り勝手に再生する例え頭を潰されようがな。』

「なるほどな……いやだが思つたより弱点が多いのは嬉しい誤算か
?』

『それがそうでも無い…』

「何?』

ため息をつきながら答える。

そして次の瞬間に放った言葉にみなが驚愕する。

『残念ながら口キにはそれらの攻撃は通用しない』

『その上奴は再生スピードは俺より僅かだが早い』

『その上でテメエらも俺も力をつけて口キをボコるしかねえ』

『んな無茶苦茶な事出きつか!』

反論は匙だけであつた

いや、人間的一般人の感性としては正解なんだが
『やるしかねえ』

『後は質問!? 「あ」ねえな!! 「おい』』

『という訳で移動だ』

□? □? □

よつす!!俺、兵藤一誠!!

俺たちは今、龍導について行き広い訓練所のような所に来ていた

『今から俺とお前らグループに別れて手合わせしてもらう』

『昨日のうちにアザゼルの方からデータ表を貰つてる』

『グレモリー眷属組やシトリリー眷属組はつい最近合宿があり、それを

元に現在の戦闘能力をデータ表にしてもらつたんだが…』

『正直よく分からん』

『だから修行をつけるにしてもお前ら雑魚どもの実力が分からなきや
どうしようもないって訳だ』

く、クソ何も言い返せねえ

実際俺たちはヴァーリよりも弱いからな…

『とりあえずグレモリー眷属組、準備が出来次第掛かつてこい、一撃で
も良いの入れられるなら雑魚発言も取り消してやるぜ?』

……俺達から!?

Life V 修行開始

俺、兵藤一誠!!

今、俺たちは反省会をやつてる。

理由? 龍導に8人がかりで負けたからだ:

『テメエら雑魚が相手ならこれで十分だ』

龍導がそう言い懐から取り出したのは小石だつた
『貴方…まさか小石1つで『私達を相手にする気? つてか?』台詞を取
らないでくれるかしら』

ぶ、部長ダメです龍導相手にキレていたら

『ま、流石にコレをこのまま使うことは無いさ』

小石を親指で龍導自身の上空へ弾き

そして

虹色の光となり消えていき、変わりに龍導の体が僅かに虹色の光つ
ている

『身体能力を強化した。小石1個分だから微量にだがな』

『とつとと掛かつてこい』

その後、部長の指示で俺達は動き

ゼノヴィア、木場、ギヤスパーが龍導の動きと視界を牽制し

その合間合間に小猫ちゃんが突撃、俺がバランスブレイクし突撃、
部長と朱乃さんが消滅と雷の力を最大まで溜めて放つ

ただ龍導からしたらそれら全て分かつた上で引き止められていた
わけで、結果として

『よーし大体分かつた』

それだけ言い残し腰に下げていた刀を取り出し峰の部分でゼノ
ヴィアと木場のデュランダルと聖魔剣を受け流してから投げ飛ばし

ギヤスパーは龍導の周りを蝙蝠化して視線を防いでいた為、ギヤス
パー蝙蝠に龍導自身が閃光の弾(殺傷力0)を目潰しして自身が着
てたレインコートでギヤスパー蝙蝠を包み込み縛り木場達と同じ投
げ飛ばし、小猫ちゃんが突撃した所にタイミングを合わせて背負い投
げの要領で龍導の後方に投げ飛ばされ、俺は:バランスブレイクした

直後に加速して急接近したのに

『おせえ』

とだけ言われ腹に一撃、たつたの一撃で鎧が破壊し俺は氣絶。そして部長や朱乃さんの方に投げ飛ばされ部長達はチャージの中断し、その隙に何処からか手錠を取り出して部長達を拘束後又も投げ飛ばし。最後には戸惑っているアーシアに軽くチヨツップして

『しゅりょく!!グレモリー眷属共の実力は大体分かつた!!次、5分、10分のインターバルを挟んでからストリー眷属共だ!!』

と言つて現在に至る

「これならどうだアーチ!!」

あ、匙が神器から出るヒモで龍導の右腕を拘束した。

?…………はあ!?簡単に捕まってるじやねえか!?

「これならテメエも動けないだろうが!!今です!!会長!!皆!!」

「匙……よくやりました!!」

『自身を凹とし更には敵を拘束し味方に次へのバトンを渡すなんて…感動的だな!!』

龍導が褒めた!?ってことはまさかこのままッ!?

『だが無意味だ』

あ、右腕を切り落として匙の顔面に投げつけた。

「ヴェ!?う、腕がつつ」

『拘束はいい線いつていたな匙元士郎。だけど俺のこの身は不死身…さつきと同じ欠損部位をくつ付けて再生する他にもこんな風にツとおつ!!』

『なるほど切り飛ばしても切れた部分から再生するのですね…』

『Exactley!!ソーナ・シリリー正解だ。不死身にも種類はあるが俺の不死性は凡そ万能だ。だからこそこういう事も出来る』

先程匙の顔面に当たつた龍導の右腕がひとりでに動きだしたと思つたら

シユルルル~

「な、う、動けねえ!!」

「匙!!」

『こういう風に糸に戻して敵を捕縛、拘束が出来るんだよ』

先程まで龍堂の右腕だつたものが血塗れの糸となり匙をグルグル巻のミイラの様にして拘束していた。

そして案の定拘束した匙は急接近して捕まり投げ飛ばされる。

「が、会長避け「すみません匙!!」グボツ」

匙は避けられ壁に着弾した。

ミシツボキボキ!!?

……今骨折れたみたいな落としたけど匙大丈夫か?

『折れても後で治してやるから心配すんな』

「後からか…よ…（ガクツ）」

「さ、匙ーーー!!」

匙元士郎ダウン

その後会長も呆気なくリタイア

『ふむ……よし決めたテメエらの特訓内容だ』

へ? 特訓内容? あ、いや早くないか? 決まんの

『記憶の物語』^{マイメモリ・オブ・ストーリー}『第2章三重奏』^{トリオズ}既動』

すると龍導のレインコートが完全に無くなり隣から髪が金髪になつた龍導が出てきた。

あれは確かに前に龍導が分身する時に使つてた技か?

『まず剣士組、そうだ木場祐斗、ゼノヴィア、真羅椿姫、アーサー・ペンドラゴン、そしてそこの私も見たいな顔して紫藤イリナ、貴様もだお前らはひたすらに斬り合え! 死合え! その上でこの結に5人掛りで互角に斬り合えるようになれ!! ただしそれ1時間は元のチームに戻り連携を磨け』

「よろしく」

「よろしくお願い致します」

「うん、よろしく頼む」

『次に兵藤一誠、ヴァーリ・ルシファー、お前らもひたすらにやり合え、死合え、兵藤一誠、ヴァーリ・ルシファーの戦い方を見て参考にしろ、ヴァーリ・ルシファー、兵藤一誠の発想力を見て戦い方を広げろ』

「わかつた」

「お、応!!」

『次、黒歌、美猴そして塔城小猫、美猴そして塔城小猫は仙術を使つて戦闘しろ黒歌は塔城小猫に仙術を叩き込め』

「はい！」

「え～俺は黒歌の妹だけかよ～」

「嫌ならしなくてもいいんですよ猿さん」

「あんだと～やつてやるよ～！」

「ぶつ飛ばしてあげます」

『あとはリアス・グレモリー、姫島朱乃、ソーナ・シトリー、3名で魔法の必殺技を作れ。特にリアス・グレモリーとソーナ・シトリーの2名は指揮系統は問題ないが如何せん火力が足りてない。だから今回でそれを補う為の必殺技を作れ』

「気にしてる事を言うわね～：わかつたわ」

「ふふふ～：分かりました」

「分かりました」

『で最後にソーナ・シトリー、真羅椿姫、匙元士郎の計3名以外のシリーサン属は今回の戦いには参加しなくていい』

「な～なんだよそれとかは受け付けねえから単純な話なんだよ残りのメンバーは下級悪魔の中なら確かに強いが今回の戦いでは如何せん火力が足りてない。分かりやすく言うならそもそも基準を満たしてないからダメだつて話だよ。遊びじゃねえんだよ戦争なんだよ殺し合いなんだよ。テメエらは仲間死んだ時無感情でいられるか？いたらねえだろ？そういうのはめんどくさいけど戦意や戦力に干渉してしまうようなのは極力排除してえんだよわかんねえのか？この戦争はおっぱいドラゴンや奇跡や偶然では勝てない緻密に練り込んだ作戦と研鑽によつてしまか勝てねえんだよ!!!!』

龍導の奴すげえ一気に喋った上にネチネチ責めるように言いやがる!!

「…わかつた」

『と忘れるところだった最後はテメエらだ匙元士郎、ギャスパー・ブラ

『ディ。 テメエらは特訓じやねえ』

「……へ？」

『テメエらはこれからグリゴリに行つてもらう。ギャスパー・ヴラ
ディは地獄ならぬ冥界の猛特訓』

「い、嫌ですう!!」

『匙元士郎』

「お、お、応!!」

『テメエは改造手術だ。テメエの神器にバラバラに封じられたヴリトラが目覚めようとしてる。だからグリゴリに行つてアザゼルが保管している他のヴリトラの神器をお前に移植する。そっから猛特訓だ』

「o h……」

「匙いいいい!!」

匙本日2度目の気絶であつた